

丁丑雜記

九

昭和十二年十一月上浣起筆

特別  
14  
1919  
490





丁丑雜記 九

十二年十一月上浣起筆



○女流和歌世家杉海翠子より近若、淡河の表作を  
 客を来りて自今に未だ交りたりけり、有名の作家に、此の人  
 主知的和歌の新体を主張し、和歌の天地を擴大せんと  
 すと、素と和歌に生活あるを以て、其心砂合の世相を  
 穿ち、性々志々、今もあまの歌、詞、筋、抜、跌宕、うらと、女流  
 の歌の微弱に似たり、而して女流の情熱を失ひ、夫と  
 此の情感に因りて和歌殊々味なきものあり、予一荷を  
 著者に投じて、歌壇革新の要を賞し、感嘆の心十  
 首を稿す、此集の近き一八年間の心を傳へたるもの  
 多し、若未だ、主知的和歌の主張を叙す



嚴栖十六羅漢圖 富岡鐵齋筆（八十八歳）



聖者舟遊圖 富岡鐵齋筆（九十歳落款）



いふもなきもあはれもなきも我のあはれに可なり  
けぬ山のこゝろ

社名のおもてに徳をこゝろに徳をあらうといふ  
いけにえとほろ

身の度せよもまをみよの血の国一物も虫のま  
聴くにゆくのや いれ物

試みよといふは潮弱の海に七つとつた  
まはこい入海

若くは働きつくり火の山の林業を出  
かかんぞ

畑中のあひなき中かん鳥おどし農夫の  
いれ物



崖くんと喰ひのりわろ大石の振りはとけん山

河つ成り  
破倫の村長をなむは出しはかり友有はく働く農夫

あまにまの肥えな  
わう命のこゝろ一切は白紙なん夏山りみどり我を

酒集あし君と歩めばわが住に七はとりは保の口

他人の田と我の田の實り比べつし私こころあうて群

わく農夫  
日頃く仲悪はき人の田のみりり群も也きつ

神ふる人



居る一日も返りくも白鬼の肥え七毛差の厚く  
るる秋

道路段まんと食の辛き農村を救ひ能りぬ  
政事一うか

馬頭歌言のわればらるる世の徳帯るる  
秋の風情を

山村に汽車は通く村首まが古び一家の盛  
栄也 小冊

子を産まざる遊に用るる乳房も筋ふことあり  
懐中をこし

おが牛相をよひ冷くと夫が牛ん乳が牛を四足きり  
けしと笑いぬ



をみるごとし生ぬこと口の惜しきも言はれぬ  
云ひ古りぬんが

冬の巻の返りくを語んわが息に夫が眼後の珠く  
七る舞也

この世の中は生き返らぬことわりを解さ七巻替  
七暖味なでり

いふべきの遊に費し七るみずはいつくふみずぬ  
このわら

山や空や無窮と對せん人間のわんの笑めは稚き  
七のわら

此らぬつまん歌のわらいつちるは父と娘しからず  
七七破しからず



母がう得ざりーせんがと我か血我う涙をや誰か為れ

かせさくく熱き血

愛うき我等がえにーかの子と父とのを身いも

さうく古りーめと

○此頃或る人から本村田思軒の書をも刺しを聊かある家と語つた。自分  
の思軒と交つたのは、政道堂の創立と云ふは既に彼が報わら  
ひあり、傍ら政堂をも創設した。主午協合と云ふ同志の社交  
団体も起つ時、稚子橋の大隈邸へ合つたが、其の序と多く  
彼人と交つた。其の文の龍虎が往回吳侯と書つたのは、思軒  
の漢文が各界の細評と云ふは、彼人が漢文と云ふ者ありしと  
いふことありし。彼が漢文が得意であつたのは、相合するとい  
ふことの漢字を刺しを困らせやうといふが、さういふ様子があつた。



彼人の政界と云ふ意は、その子に父が著した義塾を在る中の  
室の物と云ふたところ、疵がありて公生流を断念し、と云ふ説  
が有つた。佐向文士と云ふと世に之を殊と云ふと、其の  
西洋小説と譯した。其の序に、其の著者、彼人、七自叙があつたが、  
著者のいふを讀むれば、其の著者義塾に入つた覺束と云ふもの  
がある。又序の直譯的だが、ドモーン、グサーを好朝と云ふと  
詳し、但しあつた。何と云ふ人、<sup>敬</sup>氣味があつて、曰、輩と云ふ  
云いんらと云ふ。早稲田の龍虎に彼人が或る文と載せられたるが、  
自分の傍に根の序の字、金三の字、今これの、其の催促  
と云ふと、此の南天の金三の文を郵便に出し、其の、と云ふ  
此の、其の横柄の態が、自分の、其の、其の、其の、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、











照らす雲と鈍る雲とが空に迫りつゝはらへ

雨のひとこき

葎草木の林者(にきく)足撥(つか)の音や異國おとめの

馬上の空の 雁(雁)

大空の塵のこころに渡り鳥の群飛の星點山

〜と高〜

舌が舌あふか山が塵あふか林葉が驛を汽笛かへる

こどもまゝこゝろ

あひつきの五時を敷らるる時刻の鐘つらさぬ

こどもあつと村の平あか

山家づまいの今宵いとりにいらひらうあまふ(ま)

人とほき(四)こゝろ



野中の家の人影さうし 誰か来り誰か去るの夜と

稲葉のまゝ

山肌にくつつか山痛突とと浅何草よの山(ま)

死るざり

お鏡まをを優しくうつすまばらも暑しあふ

農夫のまま

この家の暖屋のうけげれ夜縁ぎのおえる書架の

あかしくささま

山村にこの眼つゞき窓を閉るる眼が精足とと

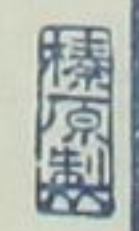
あめり

口を橋竹枝詩人詠すも 誰人せびと葉も 橋の特徴を描すも  
少くも、善術の先景、園居の状況、妓娼の姿、故人と皆同じく



甲を指すの詩移して他を指用せんとす、唯此僅に地名  
橘名の挿入に依り、其所の竹枝を云ふことを知つたのみ、亦れ特種の  
風景は明らき、竹枝を作るに此故に難し、唐詩の竹枝は此五  
二於て見し、土地に種々の特徴あるか故のや、去河松雨生身  
可人と根津竹枝を作り互に二次歌を二冊に刊し、余は贈る余  
之を讀んが前題の感あり、根津の光景も他の花柳と多く  
異なる所無んば、地名橘名を言ひし、一見互を  
善大物の詩と想ひし、あるも、自他と云ふ、難き、似  
り、●今左の歌首を掲ぐるに、皆地名を綴らるるものなり、他は  
唯九帯套の所流を辨へるに、さきに入之を菅原品川の竹枝  
と云ふべし、あるも、

根津社外月如芙蓉、笛の聲春夢中、根枝祠頭鼓声



伊方、曉鶴、帝破、五更介

東台山上四更鐘、流入鴛衾松寂濃、憶起去年の月  
久遠、初栲時始相逢

此地繁華半世倦、根津畢竟是迷津、曉鶴啼、林

鳥呼、猶有春園夢、醒人

此後從來春色衰、松、欝、不、欲、費、昏、湯、街、燈、火  
的、於、書、一、無、復、也、人、説、去、來

名詩十五首、地、名、橘、名、橘、名、を、根、津、の、竹、枝、を、云、ふ、こ、と、を、知、つ、た、こ

の、歌、詩、の、文、唱、和、次、詠、の、詩、も、二、根、津、と、知、つ、た、こ、と、の、地、名、あ、る、か

故、の、文、の、文、態、閑、居、の、事、に、あ、つ、た、こ、と、の、各、華、竹、の、通、用、何、等、の、特

徴、を、見、ず、

あり相依、比倫、芙蓉、散、如、隔、河、佳、人、一、年、相、遇、僅、一、日、



畢竟元上不如人

吾如古井波不起、即似飛燕去又還、長歎情交事如此、  
庭裏莫相逢(一宵間)

蝶栖石竹冷空園、事奈愁重山眉低、蘭盡香銷即  
已去、嗔々有係淮氏鷄

此等の詩情緒の描しあるも、華柳界、常套を、根津是柳  
に限つてのまある、大概某の竹枝とよめるの普遍的情緒と  
云ふもの多し。産終さる竹枝の漫格なきも似たり

東都の花柳界の習俗を同ふする及し地方の花柳界の習俗を  
異うする、四余竹枝の神志なきものある所、以て其の異なる習俗  
と詩材とするが故歟、

十一月六日記

○後北草子の和歌と漢文取て技巧を弄せしめんとす、真



卒の宵に却つて味あり

群鳥をまむれ持て来ぬとなし、し平昔も忘るべし

此等の悲しき偽暮村の竹枝

信法郎を重く家深くして屋上のふも竹枝さう山村

の家

生涯はそき村の娘の我らよすこやうに悲しみ

を知らず

いと、きの雨にも冷ゆる夏草や青紐のてきをを

い出が

向の村も犬あふことし我が犬の吠ゆるこゝに

聴き返しつ

露い淋りと袖を倚あかやあ栗栗して雨ろろろ



音を聴く事

おろつゝの眼とさうへへ大きく張るゝ空をえつめて

我をみとめず 死を傷む

我が泣けば泣いてくんと今も今も我より泣かせる

君へぬ君かな 全上

恥づかしくも君のいはゆるき 君の双乳を亡骸杖く

と我の死へかへり上

鉛座のほろり花をう娘あつ 顔良き人ばかりす

つちまはんと思へ

○前巻に浴めつゝを考へた書き身書つたことをこゝに追記  
すると浴場の家庭に於ても劇と曰く秘密の場不だ家人と云

死ぬ人の入浴寸ま入ることを述べてゐる。市中の浴場を女湯と主人  
の特権と看しゐる。三度のぬぐい他の男子より倍射秘の場  
ない。斯う秘の場や異性の身体の秘密と探りたがりの  
好色の故とのみ言ふべきでなく、好まぬ心である。云ふのが安當  
である。實際異性同士が互ひに身体の秘密を丸出しにして  
互ひに好むの心も動かす。彼等の秘の場は其の  
あつた。其意ある男子の異性の身体を知つて指すといふへ  
女の浴場の群女の儀況令の如きもので、老弱をまぐの異性  
を二本一七見得る所が其風景と興味もある。審美的に云へば女  
人の美醜がこゝに正体を現し、普通は女性の大浴の顔貌を  
見ると判断せんが、その正態と浴場の正態の。少くもその  
ハの顔の顔と過きまの顔貌は在り、浴場の正態と過きまの顔貌は在り、















言は分岐は秋人以外の知名り不立りしもの鐘を  
の意をよめるよふに今後一層も是の道に指し  
ぬきしを物とし、信じてのやする矢に不立りし  
ちりし。

短歌のうらには流人への苦情と理解  
と信つてさもつはよく、かつと大直の  
信し

信しよぬつて秋人はあふるあつつかし〜  
いつかあふるつと物、白あつと信つつと  
あつと、にあれと〜

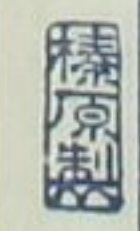
市ノ字 多 隔 して  
お あり

杉浦家も世深雨振といはれりか此の空を  
きり歌集を讀み感もあつて破格と氣玉を裁  
して空を不列底の湖をか未だ振つた夏多の  
和歌と對照のつて特々然とよむとく

○昨今の氣候は毎年と違つて暖か〜と未だおぼえり  
唯は秋の志きりんり、陰晴常々〜おぼえ得やうと  
花果いふとあり、秋霖の例年の如くして鬱ゆ大限の  
危前の花の流し枯んたも未だおぼえり、危樹多く  
あつちの白樺梧桐の志きり葉を落し、雨はゆる  
しく空に地上と堆を弄すも掃つて痛〜、茶花漸やく  
人〜と山茶花漸やく開き、花壇の菊先、紅白錦を  
殊々目を惜〜と此同書案菊の時、酒を呼んば鬱と



此の如く、忍び居りや、いふに、時節の急を、奇りある、川  
の難、若狭の鮎、最も、舌を、執す、此氣節、即、野菜の、在る  
く、も、松葉、改、といふ、白菜、(中略) 傲、各、割、豆、店、漸、  
く、鉛、板、を、冷、す、え、ち、余、の、喜、ぶ、所、も、戦、報、を、き、り、  
り、百、餘、百、挺、の、交、戦、を、得、り、快、く、而、も、緊、張、に、  
、ハ、来、し、き、よ、も、強、し、要、も、必、と、後、人、の、頭、腦、の、地、後、を  
、回、り、つ、つ、時、に、河、室、の、来、つ、て、河、法、を、交、り、も、可、り、或、は、押、  
、是、を、水、の、成、り、寄、り、を、(中略) 應、ず、も、可、り、回、  
、こ、や、各、物、を、貯、り、来、り、よ、も、各、が、河、を、破、り、早、く、一、書、  
、愛、も、危、し、を、即、湯、全、部、立、休、も、亦、未、く、あ、る、費、之、ん  
、と、時、の、急、を、も、統、制、す、の、一、快、と、も、嗚、呼、し、誰、ん、か  
、秋、空、の、悲、し、い、よ、り、吾、ん、の、間、途、を、覚、へ、あ、る、よ、り、空、を、



此の手紙

十一月八日記

昭和二十二年十一月九日 (十)

### あすから朝湯廢止

江戶ツ子の自慢、朝湯が石炭の値上りや営業時間の合理化や  
「燃料節約」の名の下に廢止される

きのふ抜打的發表に

街の江戶ツ子連いきり立つ

朝湯廢止申合せは、湯屋を「中心とした朝田、下谷、本郷、荒

### 謹告

向、國民、勤、勉、の、精神、的、人、物、的、の、虚、禮、虚、飾、を、廢、止、消、費、  
節約、の、國民、的、精神、を、此、朝、湯、場、場、業、者、亦、消、費、節約、  
の、勵、行、の、國、家、的、精神、的、の、為、に、二、時、間、短、縮、仕、り、  
十一月十日より左記通り實行仕、候

一、朝湯廢止 但、午前十時より始業

一、夜間終業時、午後十二時限り

各位 以上 東京浴場組合

大 正十一年に石炭の高値から各組合に廢止運動が起された事もあつたが、依然として江戸の風習を残してゐた下町七區の浴場協同會は去月末淺草區七軒町岩波芳氏他二十一名の組合長會議を開いた結果、明日から日の出時刻の朝湯を廢止、午前九時乃至十時始業、午後十二時終業を決議、各浴場長を聯絡して了解を得た八日之を抜打的に發表され、朝湯の朝湯會はウチ意魚の如くいきり立つて申合せの断り断りに罷起となつてゐる

川、日本橋、京橋の城北五百五十  
九軒だが、湯屋値上と事態の影響  
で浴客が激減した上に、用人不足  
に悩まされてゐる折柄なので全市  
に波及する模様である、岩波氏は  
燃料節約は國民の義務です、江  
戸ツ子自慢と云つても最近では  
老人が閑人の繁華事に過ぎない  
でせう、この少數の人の爲に  
流し客が少くて収入の減つた使  
用人を朝五時から翌日朝二時ま  
で働き通させるのは人道問題で  
す、お客様には氣の毒ですが時  
節柄仕方ない事です  
といつてゐるが  
一、淺草區前の某朝湯會員小  
澤三郎さん(中略)は  
江戸の誇りを虚飾とケチナされて  
は我慢出来ぬ、後の國民保  
健からいつても奨励するのが當  
り明か、夜明けを待つて飛び出  
す氣持が判らぬエかな  
と歎息、松永電機浴場長は  
朝から風呂へ入つてソソビリな  
合せて置成致しませんが、強制力  
まで持たせる必要はないが結構  
な事です「室間は朝湯廢止のビ  
ラ」











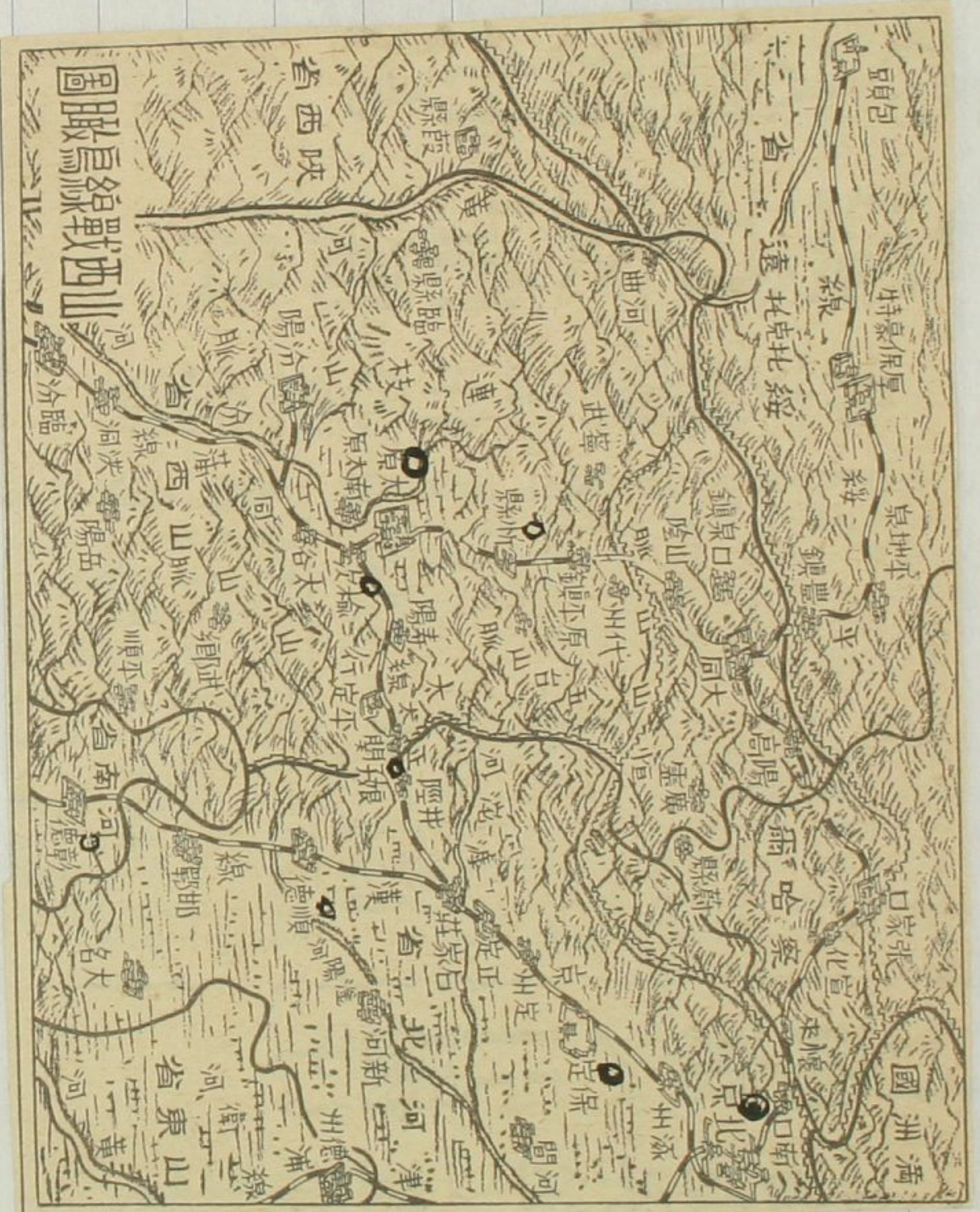
のびく、南京の唯に政次の府より、上海にも南京の巨港を助く所  
が、開港以來日支那の金融も物資も之を頼るに多し、彼等が  
かま方を上海に置き、防衛に力を盡すに名は故に、彼等が  
長期の戦闘を欲するも、真逆に三月より七箇月ばかり日と  
の思ひ通りには、あらず、彼等の陣地の何んも空しく果かたしめぬ。  
天然の要害も難攻にあり、此等を頼るに彼等、其の逆を斬り  
早速に高嶺よりとる思ひ通りには、あらず、支那の款をもて  
しつゝ、英のうらやまを、あつたに、あらず、併し支那の邊に日本  
の敵するものもあらず、この事、實の上で証せん、此に支那  
のありとせん、とてあらず、英のいふやうに、とせん、とせん、とせん、  
か支那の窮む、九回分派と因つて、英米とて、一干渉せしめん  
と企てれば、日本の不参加と、伊田公日本に左祖し、初めから

標原製

九回分派の製鉄が揚ぐ、前初日本を侵略、四回呼は、はりて、此  
米國も四回、所勝を鋒銳を収め、英米も互ひ、エニエヤ、  
少と譲り合ひ、英米乗が、早く支那を、とせん、とせん、とせん、  
の、皇軍の九回分派の繩と、細りつ、ある内、早く大上海を、  
九七号而、大なる変化を生じしめ、此間日中の防共の、更なる、  
人、日、防伊防共の條約が、締結せん、此に、是、九回分派  
の、料、敵、の、因、つ、と、い、高、く、。亦、此、間、高、沙、希、四、の、治、久、法、権、を  
撤去し、と、其、の、所、を、五、回、の、面、目、を、保、つ、た、れ、。日、本、の、武、威、の  
揚、つ、つ、外、交、も、着、手、を、進、め、し、め、。新、つ、て、支、那、方、面  
を、見、ま、西、班、牙、の、條、約、の、解、け、が、中、海、の、い、れ、く、を、政  
治、の、敵、も、願、つ、て、あ、る、支、那、が、行、法、つ、て、の、後、の、敵、は、英、と、  
ソ、と、彼、等、の、支、那、の、條、約、を、其、の、一、と、英、人、と、英、人、と、い、う、(平)

十月記





山西銀線圖

○政府の年賀郵便全廃と関係が申合されとある（此の答は終  
 りて及ばぬ事なり）政府の郵税と増款一たのん斯の申合はせと  
 一、自ら収入を失ふ事のいふは、いふも斯の事一は、我が  
 付いたと思ふ自分らも、十数年、前と異なり、年賀札を廃し  
 て他から寄附を乞ふ事なき事いふ、今ある年賀札を廃し  
 て、輸入税一札を替へてのめいがある、けれども、今ある年賀札  
 と全く形式的の異なる、積りたから、自分らも、今あるとんを改出  
 へき事として、斯の一枚の事いふも、出さる。政府が之んと  
 廃んといふ、改出は、此の事、時、無益の札を消費する事  
 此と異なり、か重き理由とせんし、なら、や、た、改出、斯の形式の  
 札と全紙を敷する方が、此の事、時、た、不謹慎とせん、へきか  
 あらう。自分らも、この事、改出の事いふ、よ、か、い、か、せん、う、























うとまふ(十二年十一月十日)

○元戸出身のひとが雅法をふけりていふ何ういふと就て語  
れりといふれば自分いふ所の関係がもつ洋ももつから特は後  
をどの何れも有つてあるが志のしち年時代の流の初録  
ハ感ふみんか或化を交けしことをたふること。また関係の  
と言ひ切つて行かぬ。この余はかゝるも。何人もいふの  
感化を交けしものいふ。自分の意近元年二月十日  
美んから、極の古の。夏に先比の僅う十数日前、歌の  
歌をよけしものいふ。自分の生時代の澤柳の極の古の  
いふ持つて切つたにやういふ。古夏、殉に烈士の遺  
州といふ感えの刊行せん。極の夏が詩の詠せん。美を好  
人が授んれこのいふとせし。春の東湖のあぬの地やう

東湖の地やう

雅法は、此人もその年の宗邦の的、田天侍史や信長持存が  
いふ。古生開の熱心。漢せんれ、正氣の歌や歌今の歌を  
語記しその存の片身が殊かられ位のよふ。随て東湖のいふを  
言ふ。こゝも一時大流行をねりて出づる。流行を鼓するの勢  
かすのれ。各府の若主景山が極の氏の親眷にありて、勤王  
の大義を唱へたり。列府に後、いふ此侯のより神のいふ  
後事を交けし。美公以東偏を察し、うけし成のれ。大日本史を  
讀まぬ。男子の恥辱がある。如く考へ、既、版本のいふ  
拘らぬ。自合の賢大人と哥意に騰字をともをせんを今も持  
してある。楠公の忠節を思ひ、現服の刻みこんだ。みんか鼓吹  
因らぬ。鳴呼忠臣楠氏を慕ふと并する。為の百里其の墓所に就  
あて。○越つたものいふ。未嘗、奇み、不知のたいと揚つたものいふ。



明末の志士であるときも大戸が此人を庇護し、北からある  
以一時の兵隊カビレと云ふたの遺蹟のついでを訪ふことを興  
味し、北の後の楽園を以て砲臺本廠と云ふる前、庭内  
を一世として公の遺構と云ふたことあり、雪天に大戸の梅舟  
を觀、西山の義公遺梅の姿を採つたこともある。古年時、代々  
の昔後、由々老等が最初、いつたりの彰考館で、大戸の學者  
がむづかしいものも考へたことがある、大戸は、同公の北條時  
務と似つて全四の激行し、北條は今七洋法河の清書のものと云へ  
ぬが、附會の事か多し、拘へる早くから一般に歡迎せられたる  
である。

自分の營をなす<sup>お梅の</sup>下居姿を採つて其の花書と見て賞つたことも  
あつた、お梅の福は、お梅を以て感慨無量な事か多し、今



い皇朝の公國と云つて、四の庭園を採り、貴い内、代々、御書を  
の碑が存し、お梅の事か多し、又自分の看後の味香  
も、お梅のね、就館を採つて、北條の北條、門の、大砲、公  
の銘が刻してあると云へ、北條の真味を感ぜ、北條後、また  
銘の拓本、数紙も得て、今七梅舟、しぬる、及射煙と云ふ、  
北條山、あるの、外知らず、お梅が、北條公、恒を、また、及射  
煙、大砲臺の、雨、北條、滅、北條、を、北條、大戸、出身の、某氏、  
依り、後、真、さん、北條、大戸の、沿革、を、初め、を、清、め、北條、公、の、甲  
冑、の、皆、を、北條、の、出来、た、こと、を、知、つ、た、北條、公、の、事、か、多し、  
北條、公、の、甲冑、が、陳、列、せ、ら、れ、た、が、銃、砲、も、お梅、の、今  
の、裝、甲、車、と、似、た、こと、も、あ、つ、た、北條、公、の、四、條、執、の、一、下、を、  
奉、り、た、こと、を、感、づ、け、北條、公、の、代、々、奉、り、た、事、か、多し、



獸の地球儀と奉獻の巻文も幸ひまゝのや又の燭火の  
文化流川に相契を得た。即印任の献納品として名作大子  
去味が流石と烈公の感に

私の筆中と在府後回のまゝ少くもあつたが今存するもの  
は幾何かまゝか何れもたゞ趣味から折し福とて千々入られ  
よんたふらの支那守山侯の親清閣の木印二顆の「清  
江微舟」印に刻してある印が、彰考館の印と向祐  
同形に刻してある。春文夫人則ち烈公の室(有栖川家の御  
方)の所遺物として御葬儀に供つた山延光の賜つた  
澄泥の梳面研の「運光」の篆法が刻してある。左  
本所の裁判に係り水漸傳人物の名を刻したる印のまが風家と考  
れしものが自今も其の印満と有するものもあつた。春楓の書



る。春楓の関が、適宜として春楓里の温泉坊に滞在したといふ  
人もあつたといふが、彼らの名をいふ所は、寺に遺したる「春  
楓の宛名印」も、相違ないものもあつた。今四方の「大」字の  
まが自分の手記に記してある。あつた人の書画の類は今も  
散らばり、書室に風流をのびたてたといふ人の狩谷権  
高が家体と考へたといふのが、名家の家の書(什)といふ  
る。(此の書は、出公未明の家といふ別家も書者といふ。中し  
人の書)

の信伯叔父が武蔵守所西宮に、四千石の土に、  
屋のある其体と隠る所とを、身中入在の名を  
つけ、并に、秋の押書とて、清くきつた。此の  
先樹が、あつたといふか、樹の名とあつた、  
榊の木に



とすへ、雅名が思ひあはるるを、亦凡そ退耕在  
(或ハ事)耕種也)と命じ、休伯、自分の推薦の日清  
生命保険会社ニ永く勤務、勤儉蓄財の功を以て、  
相方の資産があるを、別荘を築き、やうやく、此人の  
古田喜兵衛士、長女の婿のありし。

〇九回回分戦と云ふのは、滑鉄者の合戦の事、一番大切な一團日  
本の合戦、臨まぬ伊太利が西進を阻んで反對するの事、身を  
傾けず、二三回の投票を拒絶するの頃、若き、押し切つて決  
議せしむるに、不得要領であるが、日本を侵略國と認めぬ(事)  
にかゝり、七として合戦、戦争を中止せしめ、平和の途を  
開き、其の目的のあり、油俵の八思が、諸人、諸人も日  
本を侵略國と呼はり、日本を激せしめる方針を取つ

あり、どこも平和の希望があるが、寧ろ反對、激闘を共に  
する、指略のあり、九回合戦と滑鉄者の存在とある所  
以、こゝに在る、抑と支那と、今日、ふらふら、誰かの  
責任があるか、今回の事、支那の手出しが、始まる。誰かが  
誰かが支那の背後に在つて、支那を動かしてあるか、誰かが  
日清の戦いと、戦争、数年、向、戦争を動かしてあるか、  
か、誰かの少額、無ければ、其の戦争、戦争、支那を傀儡と  
日本に對抗せしめ、竊かに漁夫の利と云ふ人、とある。彼  
等こそ侵略者である。日本は、如く侵略者、其の事、と  
は、聲のしてある。一、東洋の平和を目的とする。とある。  
其れを何故、侵略國と呼ぶか、とある。日本は、当初  
事件の擴大を厭ふ、背、不、擴大の方針を取つ、平和を



欲するもの斯くあるは、何故英國を以て其の  
しるひのむらさきか、其の不振大方針を取らん、之を以て果  
の居服をうごいて支那をおぼろぐから、支那の此主義を及  
して自ら事件を振大し、遂に全面的、戦闘をなすべし。此の  
全面的戦闘を振大し、誰の責任をあるか、若し九  
回條約の精神を以て支那の主権を保護するに意ある  
支那をして不振大主義と執るべし、あまぬ方方て振ふる  
英心あるのみ、左にせしむるも、百戦百敗を見ても、英國の  
形勢の極方非道にして、どこまでも戦闘を継続せしめ、改  
三十萬の支那生靈を失つとも、尚ほ飽足する更なる  
十萬の生靈を殺さんとするべし、九回條約の精神は、  
支那の生靈の何れも己の英、四の痛痒からん、金を貸

藤田

一兵器を供給して、戦向の早く収まることを望むるは、  
日本を困らしめる外に支那の侵襲するも都合がわるい、  
侵略も種々の方略ありて、他國の犠牲を拂ひしめて漁夫  
の利を謀るもの、侵略はも猶、予を、英國が其の素する  
所の術策は、右の傍ら心を外にのぞいて、侵略は、英、  
今まを試みるもの、支那におきて、棄る、供給の  
心を奪ひ、其の心を遷却する由義あり、窮  
地は、存する、尚ほ降伏せしめ、其の終に國土を蹂躪す  
し、毎年の四民を塗炭に陥れ、其の亡國を遺す、  
乃ち英國慣用の侵略の手段である、この既述の外、  
支那の心あるもの、支那の氣のつかうもの、  
こゝに支那の敵國を、東洋の和を目的とする日本を



氣の毒の勝るべきを得る。内心は又の志媚英王が志らく  
しくも日本を侵略回呼はけりしるゝの理棍棒はけりし  
いと云はれしを得る。

○世界の公敵はソ聯の毒化運動である日本の支那討伐の一  
目的は共産主義を他滅せんとするに在り此の毒化運動は  
恰も微菌を以て餌を腐蝕せしむるごとく一般毒化すべし  
とこそソ聯の植民政策が成るのむある。英ハ金を貸し  
て侵略するの地はソ聯に微菌を侵略するの心ある。ソ聯  
に向つて苦境を立ちしめんことハフロンとエテルンの仕事  
老人の関する言ひ多しと通げを張つてある。蔣介石も  
嘗て此の腐蝕を憂ひたが、西ある捕らん時毒化に  
同志と人の助命を得るのむ、此の節を枉けたのである。

孫の遺

其の徒果抗日の戦争も起つれば日支を戦はせりしるゝ公毒  
化進展の手はあむある。蔣介石が西ある死人にさしたる毒  
化の手を伸びしるゝる知る。幸いして防共の味方か出来  
れば人の協力の新進路がある。彼等あるも日本と因  
互の四むある。西班牙の反政府軍は即ちフランシスコ  
今軍も毒化政府と交戦するも、協伊而回がフランシコ  
と左祖してあむる。防共の故にあつて日本は協伊と因して  
革命軍を認めんとす。交換的、協伊の満洲國を  
公認せんとししるゝ。日本の支那討伐して腐蝕心之戦を行  
はつし其の回復するも大なるもの防共の心ある。ソ  
聯は着と敵を西方より作りつてある。ソ聯の支那を動  
けんとししるゝ。何んを由つて斯く同窓を得る











車酸を守り、獄司の囑を坐待論十一年を著し此。出獄後  
獄中の経験と不始の決り概分と云うなり。此が確任を四時  
分く石海を誘ひこみ、奥か一月獄中の追懐法を合む  
やうに時不始と云原してゐる。石海と字を確定又  
没却の此事を述懐し共ニ感慨を極くするなり。此ことか  
あり。

石海の外圍を遊するなり。石海を要つて問七五の復かあり。此や  
うに是へう。将相の後早稲の大方。法神と云を述べて、相  
方の長身月を徒ニ教授して貰うなり。其以自分、召接の  
何字、任してゐるから、君と歎息する概分が多かつた。此頃  
入の老孝の同窓生もあつて聞かぬ。自分と石海君の言  
門来いれり。趣味的に投することか多かつた。石海君の陶

紙張の趣味あり。自ら意を作つたことセり。書意あり  
趣味の固きもの。趣味あり。同出の海海分の海海分と列れ  
ことかあるの。趣味的に交りて極分が多かつた。此を固  
故婦人の徳川徳教を著し。其御里故後、起いた時と云  
一行の内、在つてある。昔も春日山と海長の遺蹟を訪ふこと  
もあり。君の晩年、和歌を習ひ、いつかや將士首を好むと題  
たことかある。春山と壁の折る一紙かあり。此は是かある  
君の早く司法次官と云うのが大任を以て行かざれば貴族院議  
と云う。杞憂顧問官と云うも終つた。君の政次家肌の人がい  
へり。早稲田と各の關係は此が堂一流の關係を云。官俸  
的の人。西園寺公三の親近かあり。君の長子壯大なり。今  
大花次官と云う。須安の向う。君の余も一年の



長あひ七十九歳が世界一也

(十月十九日記)

る事が出来る譯ではないかこんな馬鹿氣た事はないスカンジナビヤ諸國が宣言案表決に棄權したのは尊敬に値する

# 九國會議に匙を投げ

## 公然失敗を認む

### 米國の態度冷却

【ニューヨーク十七日發】アメリカ支那事變に對する態度は嚴厲の進展と共に次第に冷却して臨時議會に於ても紛争深入りを避くべしとの意見が有力となつて居るが一方言論界方面でもブラッセル會議に早くも匙を投げ公然失敗を認

めてタイムズ紙は十七日の紙上にブラッセルの第一幕と題する社説を掲げその様に論じて居るブラッセル會議の第一幕はみじめな結果に終り出上つたものはなし宣言文だけだ然もイタリ

にイギリス、アメリカ兩國間に諒解がなかつた事である宣言は九國會議の通過に反した事すはつきり云つて居ないから日本を道義的に避けて居ない譯である月曜に第二幕が始まつても大した事は出来さうにもない

又ヘラルド、トリビュン紙はブラッセルの演説と題してブラッセル會議は延期した通り怪しげな宣言ではつきりしない日本攻撃をなし得たに過ぎない大體會議の使命は日、の面目を損はないで會議に参加出来る様な機會を作る事だつたがこ使命は馬鹿氣切つた三つの會議のために果し得なかつた、第一はルーズヴェルトの云つた對外的道義からしたシカゴの演説であつて失策の第二はイデン外相が議會でブラッセル會議で日本牽制に對照の息がかつて居ること第三は九國會議の締約國でもない無關係の國を招請した事だ日本の拒絶回答はけしからぬといふがソヴェートがリトヴィノフ代表の到着を待たずに小委員會を開いて居つたのは都合だといふのは甚だけいからぬ事であるソヴェートは大體會議に出席する權利を持つて居ないのだ、更におかしいのはイギリスの各自治領、植民地が決議に投票權を持つて居る事であつてそれなれば日本は朝鮮、台灣、南洋羣島等をして又イタリは植民地をして投票權を行使する



追而當日午餐拜呈可仕候  
準備ノ都合有之候間御來否來ル二十三日迄ニ高田市大手町八木原正路方上田良平、御一報被下度御手数數願上候

世話人  
林保科 村上水 藤崎木 原貞常 保圭  
八遠岡 八吉玉 保林  
木藤崎 木村水 科保圭  
原正 周直長 貞常 保圭  
路治 大治 作治 郎助

建設者  
高上 島田 良平 健平  
拜具

昭和十二年十一月十五日  
拜具  
線合セラ以テ全刻全所、御來臨被下度此段御案内申上候  
テ除幕式相行ヒ申度候間時局多端ノ折御迷惑ト存候得共御  
シ候ニ付來ル廿七日午前十時建設地高田市外金谷山下ニ於  
碑之儀昨冬起工以來鋭意工ヲ督シ居候處本月ニ至リ竣工致  
業ヲ多大ナル御援助ヲ蒙ハリ相企申候國事犯高田事件記念  
愈御清榮被爲在候段爲國家奉慶賀候  
拜啓 時下寒氣日ニ相加ハリ申候處















骷髏阿上春無叶、兵威の中一死を乞  
一ち年の為りよき世に生れし者

白髪鬚陀欵意少、死骸猶入少年素  
又此の一ち年の為り左の海を知らず

回籠未報壯士志、匣中寶劍死有無  
夫年暮氣沮表唯ハ威威を知らず自ら慰むるのみ  
若年の長城を固しと海を求むる人有

山墻谷壑依然在、弱は強を盡し  
と如人の向を知らず

左の強は少年の為り、録し、軍回りの殺氣を帯びる  
語が甚かり

我輩胸中之劍、亦何可少、安んじ用身



今次の好交敵若年の長城を固し  
ハ病快、身太弱と云ふも成一語さし  
偉業あり、而も斯く大達を  
一世界の不思議と云ふ誇りも、兵  
に對しては軟きことと豆腐の如し、餘小  
竹の筆録

春時表恬制志斯管城、厥功  
不朽勝致長城

筆短小るも、格すして鋭利変する所  
一其切長城の上を在り



○関三乗（又数句を抄す、時高にハハ六の注を施す  
一時の真州の不工を愧つ）

(1) 長劍耿々倚天外

(2) 懐中三尺鐵、風雨夕常鳴

(3) 干戈如林血作川、得地日多得天家

(4) 義是正、路由之何曾失步

(5) 龍爪原上土埋骨、不埋名

(6) 看河橫行有死時

(7) 太平元是將軍致、不許將軍見太平

(8) 十年定下無人問、一卒成名天下知

(9) 劍戟橫空金氣滿、旌旗映日彩雲飛

(1) 青龍刀今無用敵陣を斬る、今も龍牙の太刀を用い  
る可き、見よ出陣將士の母御が所の侍も是也。(2) 敵兵の  
死傷七十萬、屍体山と築き流血川をうす、毎日一城を抜き  
一地を略す。但れ未だ平和の目的を達せざる、(4) 死の  
も●皇軍の義に仗つ、何んを嘗て歩を失せん。(5) 悲嘆  
する、命を敵陣に殞する、將士後の不和、後等の敗る所を  
んも後等いよんと見よ、能く其知るも支那戦上の土儀  
等の骨を埋むるも其名を埋めざる也。(6) 紋の老僧も其  
や亮暴るも赤鬼や沙等の横行、或時かある後等も壁  
と一般女運命やわすべし。(8) 西歩艱難、遇ふに死者の尸現  
はつ、摺印の二三年打穿、家名人の関印、守る人あらずや、爪  
み際今もえん、四家をもく救ひ民を濟す、昔同感此の二相、推す



へこの雅と善安をん

○日本陸軍(工業)信比と其の雅流の近年強  
酒の所感と客てふと甲まふ、今歩致もふ左の  
返信を並ふ

酒飲ちし兵用なり日本精神ハ正ニ酒の裡  
に存す惜らるる下戸は此意流の意ニ浴  
す七か客法す軍回下の下戸は若狂者す

此時也

○仰るうらみ改新年罪と書をととふ、星花の句を起し  
ちると實をく

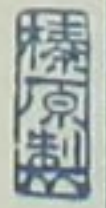
鷹の妖陣皆奔潰、一劍霜寒お大沙



○二三日揮毫に没野一、一程の苦働をやつたつらく思ふ  
に揮毫は亦うらみかまひ、氣流に雅人の書は、  
てとて、志り赴く所、筆を走せり、殆ど若者を免  
へまいか、望望を免十枚人の書は、  
口と氣共若にさる。尤も、とら待や法をととふ、  
いんまあかの用表にあるが、依託の人の由り、  
要する、書家横用の後、  
い語れよの詩れと懸り出すと、  
がある、  
つと、  
と今、  
と今、



ふしと未熟のふし出来のこともうへ。平生心き淡んふ  
い各体の字をいふと宛もすしとやり換ふのいふる危険を  
感ぜし或る字と●照意にたへしをもつて平生心き  
惜んれ体よりして仕舞ふ。長程大か錯綜の●何れ  
字の在れを取らぬと●照意に二片かあつても筆を控  
つて見ると、又もすまわぬ。一言くそ風して書きは  
と思ふとも筆が海と印つて又敗すこともあつて、  
流の一氣の成とる。一氣の成の粗漫に流るる  
多くの借紙を一奉る片つけんとするともうし、  
漫に流るることを免むを得ず。よき信札者か粗  
悪紙を持ちこむるの困る、我儘か出来ず自用  
画紙を用ふることもあつた。筆あると筆ある



意味が備本を持つてあつた。自分備本といふ  
用ひも、墨が乾かぬのびジシ〜書けぬ印を捺す  
も印肉と二三のつけねの印が捺とす。筆  
墨を墨の乾かぬとす。紙を用ひぬすとも、墨を  
かたむくのび一箱の内墨色が扱とる。夫張る画紙  
の傷んぬの書きもやすくもあつた。取扱いやすくもあつた。  
を●何れよとの書をかきよ。吾共を何人も思つてあつた。  
厄ある才一の墨を磨す。ことか、家庭に●筆備本あり  
ハるに●何れよとの恒地か、美を缺く自分のやくも  
墨汁を施用することか、あも得る。日本よのい  
墨汁かまのい、墨もか扱らぬのい、字と扱かえせ  
凡紙のい、まよのい、全く缺けるけん、己とを得る



としのり。行幸、胡麻の山楮とすると胡麻に  
しか利からぬ。殊、金右文、永く侍るゝまか、山楮の古き要する  
から、平し生かき候ふい山楮、書くことか、古き山楮、候ふいある  
併し時、多し、断り、宜しき、坊舎、ありて、古き字、任の、確、文を  
二、ふ、お、い、れ、経、験、か、あ、る、楷、色、七、時、を、い、習、い、候、ふ、る、女、と、思  
ふ、が、中、七、手、か、用、ら、る、い、自、分、の、長、い、間、自、分、の、業、癖、を、更、く  
死、い、と、い、め、た、が、い、ろ、し、七、目、的、を、進、し、ま、い、自、分、の、業、癖、  
い、山、陽、の、美、ん、が、あ、る、い、少、年、の、次、山、陽、の、美、を、仰、う、ま、ん  
だ、こ、と、か、あ、る、い、ま、が、長、命、冬、楮、在、り、候、揚、成、休、濃、得、所  
の、あ、る、千、字、文、か、千、入、り、て、志、き、ら、ん、ま、ん、だ、が、い、ろ、し、山  
陽、の、楮、候、け、が、得、所、候、ら、る、い、今、日、無、い、先、前、初、り、  
か、手、本、の、よ、く、送、ら、れ、が、一、生、涯、を、支、配、さ、る、と、今、更、く、感

藤原

す、が、山、陽、も、自、分、と、同、い、や、ら、ん、形、風、を、脱、き、と、つ、と、の、こ、目  
的、を、求、め、し、ま、ん、の、い、概、観、に、い、こ、と、か、あ、る、

父、祖、の、遺、傳、が、手、筋、に、関、係、ま、う、と、ま、ん、て、ら、る、が、こ、ん、い、本、式、と  
思、ひ、ら、ん、先、考、の、い、若、い、時、教、原、秋、露、と、師、を、し、て、本、式、を、  
と、思、ひ、ら、ん、其、の、清、書、美、而、校、か、あ、り、れ、の、と、思、ふ、と、若、い、頃、の、書、  
が、既、に、登、上、入、り、と、思、は、れ、自、今、七、女、の、血、を、承、け、お、兄、の、時、を、  
と、も、く、書、く、と、候、め、ん、だ、が、中、七、父、に、及、ば、ら、る、ら、ん、或、は、  
父、が、三、十、年、頃、書、い、れ、屏、風、半、道、か、あ、る、  
双、を、自、分、が、書、か、せ、ん、だ、其、時、自、分、の、五、十、年、頃、あ、る、ら、ん、か、夫、法、  
父、に、及、ば、ら、る、ら、ん、併、し、手、筋、の、確、し、き、遺、傳、に、影、射、者、と、思、ふ、  
と、洋、書、も、学、ん、だ、洋、字、の、ペン、メン、シ、ツ、カ、も、習、ふ、ら、ん、自、分、の、時、を、  
を、扱、き、洋、人、の、習、字、の、先、生、の、形、景、を、や、つ、れ、こ、と、か、あ、る、か、先、生



















形を紙の面を押しし巻紙が行え、此等、専ら婦人の向に行はん  
に、優美の趣か、多しを歌をよむ男子も用ひん。淫世俗  
を以て美艶の地模様のあつた、給半切りもあつた。最上の奉書紙  
が用ひんし、その手紙をさくま、勿体ない感があつた。手紙  
をさいて貰ふ料も、これがある。自分の一束百枚、はたの給  
半紙を、得比の、タレカ金花物、むむあつたと思ふが、此等、  
華麗のもの、五彩の意があつた。性々金銀泥も、用ひん。若  
り淫世俗の隆盛時代、其の様を畫し、その常時、給半紙  
の上覆、を、替得る、給版を用ひんことを思ひ合はせると、書  
翰等に念を入ん、の、不思議なるのが、此等、實際どの位流  
布し、あつたらうか、自分、多く、書翰を定る、其の、  
中、あつた、新の、給模様のあつた、手紙、多し、の、解らざる

此、多分、此等の、  
為、あつたらうか、  
つた、唯、サヤ形、  
と、給、  
と、画、  
を、  
い、  
却、  
し、  
自、



半紙詩箋形の残す風味のあるよび、又松竹を特々紙を  
 濃く染めたる東山の連豆の圓のあるり、紙を濃く染めたる  
 淡めたるよびありて、題目があらざる所のぬがある。又登山  
 画家が試みたる詩箋形の古閑殿の古山植物の花を十種画  
 して、その風味がある。また他に、俗摺紙のある詩箋紙のよび  
 種々あるが半紙切の手紙を考へることか、進んでゆくべき  
 ので、古紙のあつた半紙切の或人と今あるもの、果んどころか、精製紙の紙  
 すら、ゆくゆくは、今、他種紙の紙が珍しく、ゆく、郷土の  
 養を、郷土の田舎で、古紙のよび、唯、松竹を、紙の紙  
 画と、心く、果んを、紙とする、世の中、と、果ん、世の一例として、左  
 又、果ん、と、果ん、よ



状 袋

この状袋は、三河森下と申しまして、最も古い手法をもつて、材料  
 の楮から、のり、まで、一切、自分達で、つくり、寒さを待ちて、  
 手漉きにされるもので御座います。

それに、皮斑を入れ、染色をなし、その上より、木版を押ししたもの  
 で御座います。

松竹梅、の三種を圖案したもので、御正月用に、ふさはしいものと  
 考へまして、彼の地へ行き、わざ／＼作らせたもので御座います。  
 郷土味豊かな、そして日本紙のみの持つ特殊な紙の味の物で御座い  
 ます。

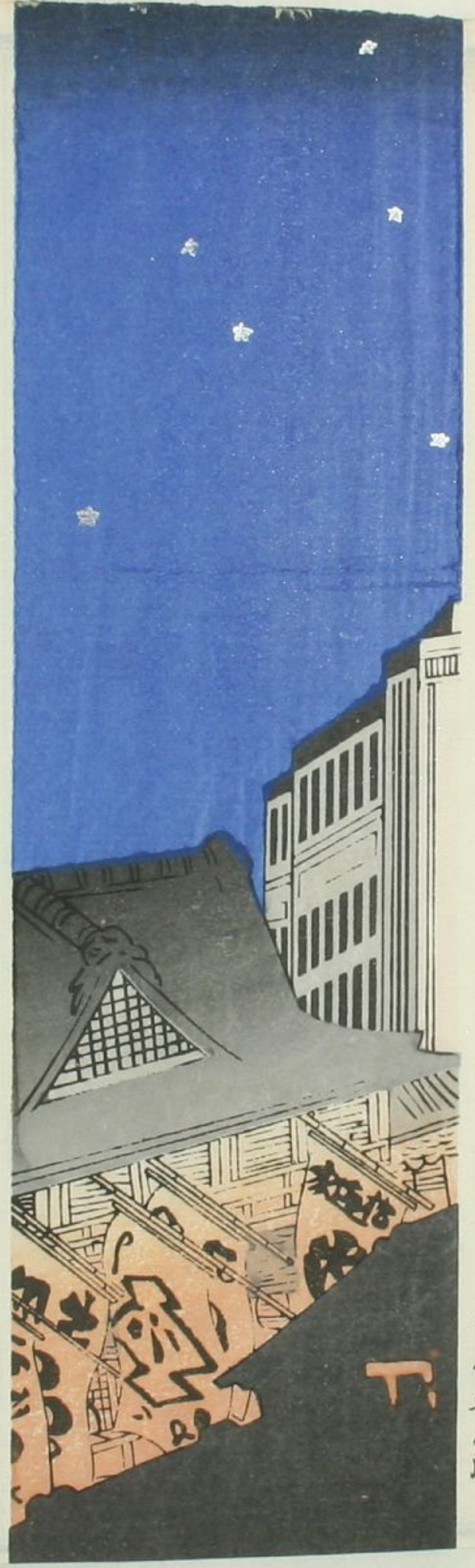
郷土工藝社

事務所 本郷區根津須賀町二十七  
 電話 五三三八番



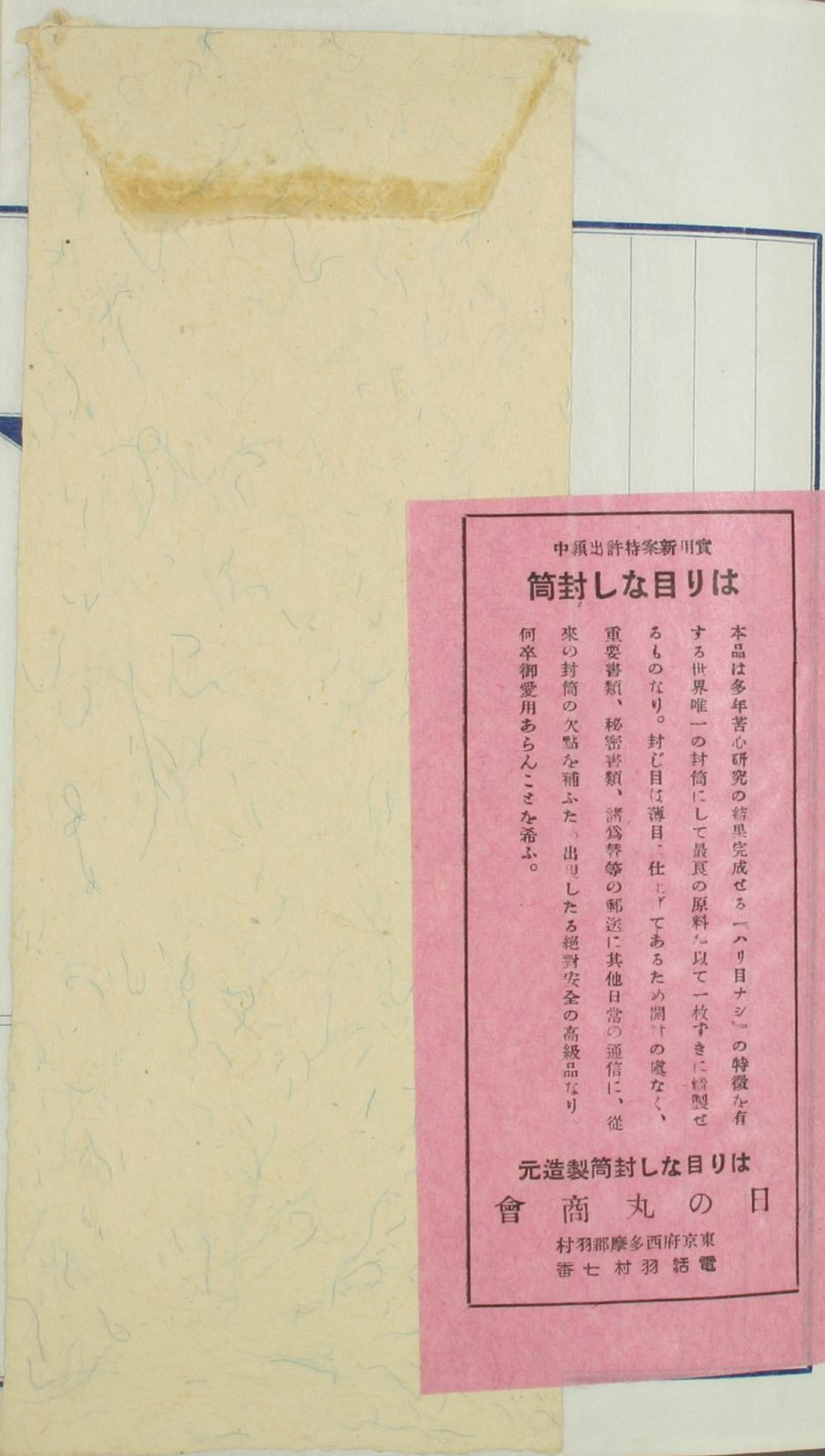
今の為年草紙の男女も手紙をかくやうなことを書簡に入  
 る用紙と或人と同じいやうなわけは、性々冷接紙のある  
 七の七らゝたる日例として二葉ぬめりよりの京都の巻のし  
 ぶ荷葉が一時的に多量な車ある行かんが、今の勢うえうけ  
 いぬ向かすゝ縁が割念々増すをえうてはるのか欠点で  
 ある。

近來の物も西洋化して日本固有の風味のいかにあつたか  
 は辨つてゐるが、萬葉草紙の如く一紙にぬるゝ家ニカク瘡  
 を入るゝものか、さういふ長り目うゝお同を流い  
 るものあつたことか、實際にぬるゝか、伊勢もさうもさう  
 いが命の入つたことか、なまもの標本をぬりもあつ



京都の夜  
 七と七井金版





中須出許特案新川實

### 筒封しな目りは

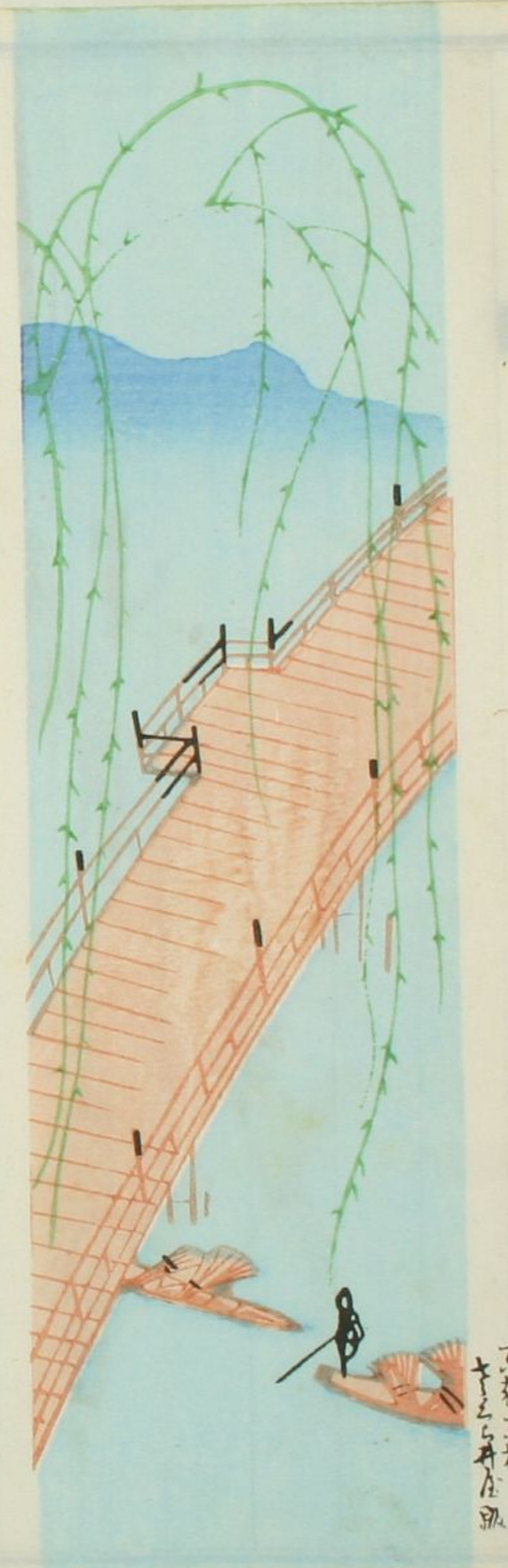
本品は多年苦心研究の結果完成せる「ハリ目ナシ」の特徴を有する世界唯一の封筒にして最良の原料を以て一枚すきに精製せるものなり。封じ目は薄目、仕上げであるため開封の虞なく、重要書類、秘密書類、請為替等の郵送に其他日常の通信に、従来の封筒の欠點を補ふた、出現したる絶対安全の高級品なり。何卒御愛用あらんことを希ふ。

### 元造製筒封しな目りは

## 日 丸 商 會

東京府西多摩郡羽村  
電話 羽村七番

元造製



日丸商會  
東京府西多摩郡羽村  
電話 羽村七番



























の石と生れ十八才のち早稲一ジョセフスミスが一八二三年  
二神の啓止を得るとその一派を開いたのは、娘さまが清教徒  
の一人と云ふにスミスは、農教さんだが、又の教徒の、  
漢の世を命じて、その口ツキの山嶽をめぐり、あま  
の苦痛と戦つて遂にエタ、物の大塩湖地方を開  
拓するに至るの、即ち此の宗教の風俗教養の  
結果に、性関係の極りを善格にあつたと云ふ、  
今、此の人口が増殖して、一夫一婦の制を  
おぼつたが、四土開拓が、此等の記つた所以かと云  
ふ

○早大出身の文士海田貞敬、新雲の節を有してゐるが、  
其節の由来をいふ、自分も命類を愛するから、一喝禪  
刀斬白雲の漢を古き其つた、も公典故の、  
このことである。

○野口多内、札幌原郡利根のともむ、其父竹次郎、  
の思ふ存中終つた、其のことが、  
書中の代々、二松を今、聊、漢をの、  
宿まると、  
あつたが、後支那の、  
城の時、奉大から、  
の、  
早大今の、

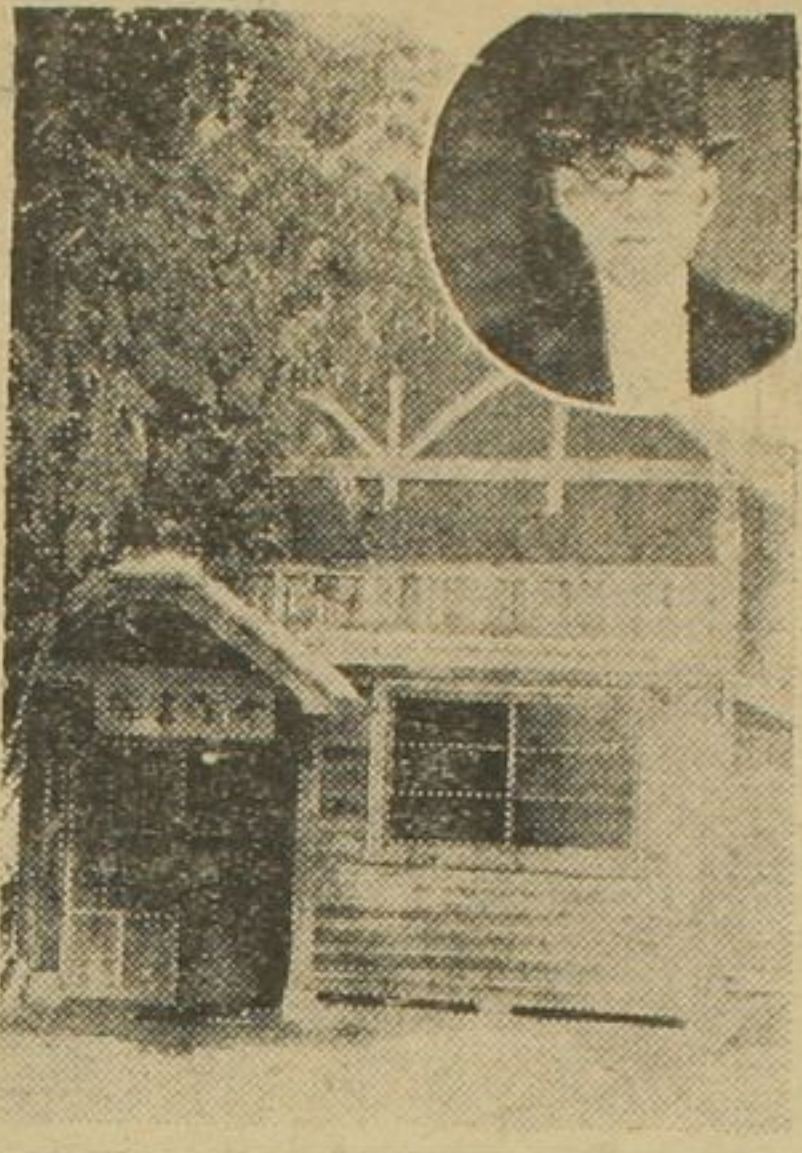






# 在滿同胞の父が 故山に『希聖書院』

## 野口氏後進教育に



支那、滿洲各地に活躍すること四十餘年かつては奉天居留民會長、滿洲華人聯合會長等の要職にあつた野口氏、任じ在滿同胞の父と仰がれた北滿原郡佐々木村大字野口、野口多内等は既述の通り

段と大なる關係をもつて迎へられる。「眞實は野口翁と希聖書院」  
▲希聖書院設立の主旨  
希聖書院は漢學と支那語を講修する所の余の家然なり宅地西南隅に講堂を新築し東南隅に講堂を附設す余は幼にして郷黨肥田野金州先生の困學塾に入り漢語の初歩を學び後東嶺二松學舎に濱ひ三島中洲先生に師事して業稍や進み一時松陵の塾師を囑せらるる幸て支那官制中清末の大儒吳汝輪先生の門に入り業を受け當りの學問文章について些か啓蒙する所あり余は未だ斯文の道

果を躬けむるに至らずと雖も此の如くにして歴史の大体に通ずることを得たり  
支那語、及支那時文に至りては余の專修し且つ從來實用せる所なれば特に言ふべきなし、余少小儒術を出でて志を支那に立て或は國務に従事し或は民業に就き前後四十餘年を彼地に送り此大老を告げ故山に歸隱するに及んで地方整理の氣風大いに昔日に榮るものありて動もすれば泰西倫理の思想所在に傳播す

るの情勢あるを知り復た弱に憂ふ所あり乃ちこれを恢復して時弊を匡救せんとせば漢學に依りて東洋道徳の振興を圖るに如くはなし是に於て余は漢學自ら操らば家塾希聖書院を設立し進んで教學の實に任せんとなす  
是れ 固より好んで人の師となるに非ず唯だ同志と互に相講習し依て以て人心を作興し農村教化の實を擧げ斯年を國家に捧けて獻芹の微忱を効さんと欲するに過ぎざるなり書院設立の三

綱を掲ぐることを如し  
一、教育勸諭の聖旨を奉戴して忠孝の大道を闡明し皇國精神の發揚を期す  
一、漢籍を教授して階級を融通し東洋道徳の精華に基いて堅實なる思想を養成し以て人心作興農村教化の大成を期す  
一、支那語を教授して我と滿洲國の不可分關係を密接にして兼て日支親善の便益に資せんことを期す

開業に先立ち今回その主旨、學則を左の通り發表したが多年滿支各地に奮闘して偉大な業績を挙げた成功者野口氏の教育は必ずや今後明朗支那に活躍する幾多有爲の人材を輩出するものとして特筆の一

野口氏内閣

三月  
四月  
五月



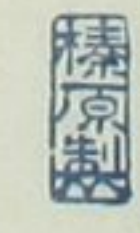








寶石の威力の強い婦人の持物が、只昨日盗賊大さかおさく、まが、ボウ  
ケツトのすけもツボンとぬきこんの容易な隠すことが出来ぬから、  
斯の貴き品を著けし懐中時計が例とちうてある。雑誌の題名  
をいへば、紛失の持物が起るの不思議な事。西洋では  
とんぷを指さす所の腕時計があるのちあつて、貴婦人を驚かす事  
ことか、紛失とあつて、探偵小説とちうく、ハダク、寶石の国作  
てある、先んち我ら近代時代の小説が寶石刀分夫と又技師  
と改切り形の悪状とちうと、或る又趣を同のりしてある。し  
巴里の豪華な社会もある、貴人の有る、寶石の寶石の或る  
萬圓のものもあつて、是を保護する、外生の時、時計  
自動車に乗る、且つ二人の銃を持つ、護衛が同車してある  
とある、寶石とあつて、ことわざも、寶石を抱くもの、斯く



も、寶石を抱くもの、是は却る、眼の的とちうて、多漢のたは  
と、寶石を抱くもの、ことわざも、寶石を抱くもの、たは、  
珠を抱くもの、身を危あす、ことわざも、いひ、多くの寶石を  
人の某皇室の宝物、某侯家の名物、とちうて、あるもの、  
持する、手を行はす、こゝ入つて、いひ、貴の、性質を、油と、こゝ  
や、二がり、盗賊の手を、握れ、持品がある、ことわざも、即ち、  
いひ、出する、願ふ、いひ、ある、指し、盗まん、村所有者、ある、深  
い、怨恨を、宿し、とちう、ことわざも、盗賊の家、かく、見ると、不潔のよ  
とも、見ると、いひ、ことわざも、ある。  
寶石が、何れ、犯罪の、原因と、ちう、事、単り、寶石を、指し、盗む、  
直接行動、とちう、事、模造品、を作る、人を、欺く、こと、が、頻りに  
に行はれる、こと、也、近來、寶石の、も、作る、流弊、の、進歩、を、おそれ



てのこゝか、かう又四五のダイモントを偽造するもの容易なること  
いまがの境を造してゆか、ナカク容易なる偽物の鑑別かつぬ  
美か為の空を南の正品を深く金庫に潜りおき、標を  
とてその模造品を出しておくのが、或ると例もある。正品と偽り  
模造品とを、別非偽をすゝめるものもあるが、両方があること  
とあつて模造品を作り、美を正品だとし、偽りあるもの  
より大金を取つて、女の金を着飾る模造品の鑑別を偽人を  
欺いた例もある。

昨を病んである為、シアウアリエーを有するところの、偽物の原則といふ、  
人間の思惑もぬき、つゞく人間のぬき心か、為す業の、  
まゝ幻影を造る模造品の、馬鹿が、  
とふふと、  
欺いた例もある。



八相作を、  
七工、  
のやうな、  
故を以て、  
破篋を、  
詩半切一枚と、  
六街三市、  
女高祿、  
作回八千、  
爪出美丹、

破篋を、  
詩半切一枚と、  
六街三市、  
女高祿、  
作回八千、  
爪出美丹、



清中未術年其此時遠行すもあまやをといふこと  
 乃の花柳と詠いし詩余に味無きとあまや  
 之んも反故とて一罵すも惜しむべし予家五峰の  
 書式にてもあまや一罵すも惜しむべし予家五峰の  
 (昭和十二年一月六日記)



吉田博土地名辭書編纂の思ひ出

倫 市 島 春 城

今度富山房が吉田東伍博士の大日本地名辭書を改版するに方り、私に博士と辭書につき思ひ出を語れとの注文が出たので、忽卒記憶を辿つて懷舊談を試みますが、思ひ出づるまゝの漫談で、論次も次第もないことを御容赦下さい。

顧みるに、丁度日清戦争の時です。吉田君は私の宅に寓して居られた。私は讀賣新聞の記者であつたが、吉田君は是非従軍記者として觀戦したいと切なる冀望があつたので、私も聊か斡旋して、軍艦橋立に搭乗を許され、親しく海戦を目撃したのです。其頃海戦も終局に近づいた頃で、吉田君は現に丁汝昌の自殺の蹟を討ねて無事に引上げて歸られた。

そこで吉田君から、自分は生還を期さず従軍したが、幸に無事に還ることを得て見れば、何か報國の一端ともなるべき編著を企て、己れの記念ともしたいと云ふ話が出た。これが吉田君の地名辭書の編纂を思ひ立つた初まりで、私は君の計畫に對し直ちに賛成を表し援助を約した。後に考へると此の約束は如何にも無謀極まるものであつた。吉田君當初の考では三年を費せば成ると云ふ豫算であつたが、それにしても私に何んの資力もなく何んの参考書の持合せもない。唯三四の書生を督してゐた頃で、材料は書生に寫させ、吉田君は私の食客として置けばよいと云ふやうな杜撰な胸算で、大膽にも何人に圖ることなく、吉田君は私の薄暗い書生部屋で筆を執り初めたが、段々経費が高んで、到底自分で遣り通す見据ゑがつかず、半歳位は覺束なくも自分の手で賄つたが、終に富山房の坂本君に相談して同書店に之れを移すことになつた。こゝに漸く活路を得たが、實は三年で成功を期したのが十三年の歳月を費した程規模が段々に擴がつた。それを擴がるに任かせ、何んの苦情も曾つて言はれず、遂に大成したのは、全く坂本君の雅量に由るので、吉田君も存分の編纂をやり得たのである。



此の編纂は前述のごとく、日清戦争後に始まり、日露戦争が終つて後完成したのである。其の完成を告げた時、私は印刷された尨大の辭書を携へて、初めて吉田君を大隈伯に紹介した。其時大隈伯は辭書を齎しながら、「吉田君は學者でないからこれだけのものを遣り上げた」と云はれた。卒然之れを聞くと褒めたのか、貶したのか感ふやうでもあるが、自分は伯の意のある所を領して、流石は伯だ、面白い讀辭だと感じた。伯の意は世の學者は實行家でないから大きな顔をしてゐてもこんな事を成し遂げ得ないと皮肉を云はれたのである。更らに委しく云ふと、高く標持してゐる學者は一概に自家の面目や名譽に頓着して、思ふことがあつても、周囲の論評を恐れて容易に外に發することをしない。かうでもないあゝでもないと思慮する間に歲月は遠慮なく経過して、折角の思想を腦裏に納めて墓に入るのが多いと、學者の臆病を皮肉られたのである。吉田君は後日博士の學位を勝ち得たが、其頃はまだ無名の人であつた。大隈伯が學者でないといふのは此の故である。此の辭書の完成を告げた時、上野の精養軒に多數の學者を會して祝宴が開かれ、吉田君并に自分の郷里の先輩前島男爵が祝詞を陳べられ、來賓中にも二三祝詞を述べた人があつた。私自身は當初關係をした丈に、著者に次ぐの喜びを感じ、其の所懐を辭書の序に書いた。それを簡約に申すと、世には鬱然たる大家があつて、遠く望むと如何にも偉らく見えるが、其の實力如何んと検討すると、案外名もない小家に劣ることが少なくない。支那は東洋に國する一大雄邦で、久しく大家とされてゐたが、一朝戦つて見ると、弱小の如く思はれた日本に苦もなく敗れた。露西亞は世界に久しく恐れられた大國で、鬱然たる大家の估券を有したものだ、これも戦つて見ると案外に弱く、勝利は終に日本の手に歸した。大家と云ふものは必ずしも實力上の大家でなく、名もないものが寧ろ大家以上であることが二大戦役で立證された。吉田君は無名の人だが、其の行蹟は遙かに世の所謂の大家の上に在ることは此の辭書が證明すると著者の爲めに大いに氣を吐いたのであつた。

吉田君は中學教育を受けた位で、高等の學校に入つた人でない。然るに天稟の學才があつて、殊に國史に精しかつた。君に「日韓古史斷」の名著があり、地名辭書出版前に早く富山房から出版されたが、あれなどが君の史的識見を語るの好適例である。君は常に新井白石の學識を稱揚し且つ私淑もしたが、實は種々の點に於て白石に比すべき人であつた。史學に於て

得ない特徴であつて、地名辭典は世に幾種あつても、此の書が卓然として群を抜いてゐる所以である。著者は随分圖書館あたりで地誌を漁つた。どこの國でも大概地誌は刊行されてゐるが、著者の困つたのは某々地に纏まつた地誌が缺けてゐることであつた。即ち九州などは敵國と境界を接してゐるから、戰國時代には互ひに地誌を秘した。随つて斯る所には精細の地誌を見ることが出来ない。四國などでも何故か土佐に纏つた地誌がなく、これには吉田君も困つた。僅かに帝大圖書館に、南路志と云ふ大部の寫本があつたのを、坪井博士を介して、見ることを許され、君は一兩度坪井博士の家に就て見たことがある。此の南路志拜見が縁をなして、君は學位を得た。それは後段に語ることにする。

十三年の歲月を費して本書の成つた時、學界を驚かした中にも、志賀重昂氏は熱烈の讀辭を咨まなかつた。自分は何人の讀辭よりも氏の讀辭を多とした。氏は地理の専門學者で、自身に抱負もあり、苟くも人に降る學者でなかつたが、吉田君には心酔するまでに敬意を拂つたものだ。此の書の刊行された其の年であつたか、自分は一冊を携へて坪井博士を訪うて、貴下の庇蔭で此の書が完成したと謝辭を陳べた。實は謝禮の外に野心があつたのだ。其の野心は外でもない。此の書に依つて吉田君に博士の學位を得させたい爲であつた。私は率直に坪井博士に對して此の書を學位論文と見做すことが出来れば、貴下の御斡旋で學位を得させたいと思ふがどうかと云うた。坪井博士は沈思の後、よからうと云はれ、博士自身推薦者となつて、文學博士會の議に問はれ、滿場一致で吉田君は文學博士の學位を贏ち得た。文學博士會は最も通過困難の會で、異論の紛起が常であるのに、何等學問もなく亦高い學歷もない吉田君が滿場一致の推薦を得たのは眞に異數と云ふべきだが、實はそれほど諸學者が一齊に此の著者の學識を認めたからに外ならない。

筆の序に吉田君の強い記憶の一二を附記して見よう。久米博士は晩年に語られた。吉田君に初めて會したのは「日韓古史斷」の草稿を持參して相談に見えた時であつた。其の除材料となるべき或る一文を示したが、吉田君は黙々としてうなづき敢て寫し取りもせず、辭し去つた。そこで妙な男だと思つたが、其の後古史斷が出版されて贈られたのを齎して見ると、自分の示した資料がチャント收めてあるのに驚いたと語られた。大體歴史家は種々の事件の大略の時代は語してゐるが、吉田



君は年號は勿論何年何月と云ふことまで抵ね記憶してゐた。自分が曾つて郷里に遊説を試みた時、吉田君も同伴して到る處に其の地の歴史を説いた。別に手控やうのものを携へてゐないので、其の講演の委しいのに自分も舌を卷いたことがある。同行した地は郷國であるから別して委しいのであつたかも知れんが、他縣でも同じく地理歴史に委しいと聞いて、自分は曾つて君に云つたことがある。日本全國の到る先々其の地の歴史を語り歩き得るものは天下廣しと雖も君一人であると。

あとは餘談であるが、吉田君の近親に國史に委しく相當の著述もある人で小川弘と云ふがあり、和學に造詣があつて曾つて音楽學校の教鞭を執つた旗野櫻坪と云ふ人もあつた。吉田君の天才は其の血統から來て居ると思はれるが、茲に漏らす可らざることは、小川弘の遺著に國邑志と云ふ數十卷の寫本のあつたことだ。纏まつたものでもなかつたが、地名に史的考證を施した點は、地名辭書に相通する所があつたので、吉田君が地名辭書の編纂を心掛けたのは、一つは故人の遺業を完うせんとしたのにもあつた。勿論國邑志はあの辭書の内容に比すると九牛の一毛もないほどのものであるけれども、君の心がけの元は此の書にありと云ふべきである。

君の晩年は早大出版部で計畫した庶物歴史辭典の編纂を擔任して材料蒐集に年餘を費した。これも庶物を史的に考證せんとしたもので、若し脱稿すれば地名辭書と並び稱せらるゝものであつたらうが、君が筆を下さない前に病に罹り、終に逝いた。君の病症は何んであつたか、醫者の診斷を厭うて何んと勸めても應ぜず、やつとの事に保養に出かけることになつて、自ら行先きを選んだ地が銚子で、そこに赴いて二三日たつと訃音を聞いた。旅館の傳へる所に據ると、附添ひの家族を東京に歸し、即夜病體であるのに多量の酒を飲んで其の夜絶命したと聞いたが、君は病の不治を思つて密かに決する所があつたのではあるまいかと感ぜしめた。銚子が君の終焉の地であるから、そこに終焉の碑を建てた。此の終焉地に就ても地理的の話がある。君は平素利根川に大なる趣味を感じて、赤松宗且の著した利根川圖志は其の愛好の圖書であつた。利根の吐口である銚子を保養地と選んだのも、多分平生の憧憬に因るので、保養中探検を庶幾したのであつたかも知れない。何んにしても平素憧憬の地が終焉の所となつたのは奇縁であるとも言ひ得よう。

は白石の壘を摩するものがあつたと云うても過褒でない。「日韓古史斷」の如きは、白石の古史通よりも數歩踏み出したものである。君の史學に就ては先輩久米邦武博士が崇敬を拂つた隠れもない事實に徴しても明かだ、こゝに絮説を要しない。

以上の如き史的天才を著者として「大日本地名辭書」が成つたから、不朽の名を流したのも當然である。此の辭書は單なる地名の羅列でなく、各地名に史的考證のあるのが特色で、幾多千古の疑問が、著者の識見に由つて各々明解を得て居ることが更らに大なる特色である。世の學者の多くは、史的疑問の解を得れば虎の子を得た如く、事々しく論文を書いて世に誇るのが常であるのに、此の著者は創見を惜しげもなく各地名の注脚に傾けてゐる。即ち此の辭書は著者の創見の記録とも見るべきもので、下ノ頁にも著者の史的識見と創見が燦然として光輝を放つてゐる。あれだけの大著に多少の誤謬があつたとしても咎むべきでもないが、著者には確たる自信があつて、改版に際し斷じて訂正をしたことがない。

吉田君は世に稀なる博覽強記の人で、一たび寓目したことは決して忘るゝことなく、忘れ勝である古い年號なども、ハツキリ記憶してゐる。且つ君は頗る勤勉の人で、編纂十三年の長きに渉る其間早大の講壇に立つて幾何の時間を費した外には夙夜編纂に没頭した。あれ丈の大著をどの部分でも人手を藉りたことがなく、屹々として自から筆を把つた。其の草稿は幸に一頁も脱せず、皆な早大の圖書館に保存されてゐるが、それを積み重ねると等身幾倍とも云ふべき大部のもので、皆な君の墨痕を存してゐる。君はあの大著をなすに一たびも足を擧げて實地踏査などしたことはなく、いつも机上に參謀本部の測量圖を置き、徹頭徹尾之れを參考とした。毎々聞いたことだが、自分が實地踏査をやつても此の圖の精なるに及ばぬと云うた。又圖に由つて山河の形勢を案じ、甲地と乙地の距離を考へ、戦記の誤謬を正したことも一再ならずある。某の戦記には甲地から乙地へ一日に攻め入つたとあるが、これ程の距離に昔の行軍が一日に達し得る筈はないなど屢々語られたこともある。尚ほ地名は皆な漢字になつてゐるから、動もすると漢字に拘泥して種々の見解を下すが、實は漢字に書かない古名に選つて考へると、初めて眞解が得らるゝものだと言はれたこともあつた。

此の地名辭書はどの地名にも普通の地誌に無いことが織り込まれてゐる。其の織り込まれた何物かが即ち著者以外に持ち



此縣各地の地味  
は、大抵、砂質の  
土質である。其  
の地味は、概し  
砂質の土質であ  
る。其の地味は、  
概し砂質の土質  
である。其の地味  
は、概し砂質の  
土質である。其の  
地味は、概し砂  
質の土質である。

一 圖

一 圖

東京府

此縣各地の地味  
は、大抵、砂質の  
土質である。其  
の地味は、概し  
砂質の土質であ  
る。其の地味は、  
概し砂質の土質  
である。其の地味  
は、概し砂質の  
土質である。其の  
地味は、概し砂  
質の土質である。

一 圖

一 圖



○予日本金石拓本を蒐集し終ること五十年、目録を撰するに  
日約二百通に及ぶ、長持と稱しと久しく出し捨てし此の  
拓本中世と支那の金石を雜ぬ、然るも大部分日本のも  
と爲し、狩公極高の年号にわづかのものあり、概して近世  
属するもの多し、拓本と云ふは、吾家の墓誌すむも加ふるに  
甚に痛道するを忌み、青印の日或は家名に關するものと  
人ことを寫す、散札なる拓本を秋山理一と一函に納め、高は  
長持中にありしもの内、已んば特別の關係あるものを左  
に標示して別置を賜す

宗室に關する拓本

三餘翁墓誌

白雲先生墓誌 幅



日 帙

市島子協墓表

古葱崎記 美濃古

徳志園記

市島恭書亭瑠璃の銘

無常寺寺内 泰山居士集字  
余り墓誌銘

即生院墓碑 宗家

予の因故關係あるもの

小野梓碑

大隈熊子墓誌

前島勇生墓誌

吉田隆士終焉碑

余の幹施すも是に  
なりとも也  
龍子の碑  
春原撰云















の討手しるべき改権を、時、奥地に遊け、尚ほ抵抗を  
傍人ともせず、云々、地方改権を、日本の相手とあきらむる  
ものも、尚ほ海を権渡すものも、日本に敵する、南  
東諸島の後、相手するべき、美、回、皇、會、人、元、よ  
リ、多、分、度、系、漢、江、を、攻、撃、し、ん、運、ぶ、の、シ、ン、カ、お、し、ん、香、港、に  
及、ん、ん、此、等、要、地、に、皆、る、美、回、の、司、命、の、地、を、英、の、勢、  
こ、し、其、の、権、を、権、渡、し、ん、と、も、ん、今、の、地、中、海、と、申、身、を、  
英、の、力、を、他、に、及、け、し、後、の、日、本、が、香、港、を、陥、つ、こ、と、す、る、期、に、  
前、に、属、す、但、し、務、す、る、の、地、を、以、て、す、る、の、又、日、本、  
が、回、陸、上、英、回、の、對、手、を、去、る、を、い、ふ、英、回、の、對、手、に、後、  
を、委、ん、と、す、る、也、

十二月十二日記

○昨夜、川瀬一馬の古法字本研究「出版を祝する為



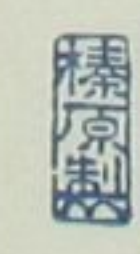
め、昨日、早、朝、に、早、十、名、程、合、つ、た、川、瀬、の、北、岸、を、成、就、し、た、り、と  
故、安、田、推、園、の、後、援、の、由、り、の、か、あ、る、川、瀬、が、研、究、を、と、し、ん、つ、た、  
の、十、二、年、前、の、回、に、属、し、安、田、を、い、く、も、の、前、に、始、め、り、し、め、る、此、を、  
即、昨、の、十、二、年、十、二、月、十、二、日、に、合、つ、た、り、研、究、十、二、年、と、因、人、に  
の、い、ふ、る、自、分、が、川、瀬、を、い、つ、た、り、正、平、論、法、攻、を、著、し、以、時  
自、分、の、感、得、に、か、此、夜、に、川、瀬、を、再、訪、し、ん、ん、今、も、し、六  
年、前、に、著、し、た、と、い、ふ、か、古、法、字、の、研、究、の、一、二、三、四、五、六、  
年、前、に、い、う、り、く、骨、が、折、れ、た、こ、と、を、思、ひ、支、田、高、俊、の、地  
不、詳、典、の、十、三、年、を、考、へ、た、こ、と、を、い、ふ、を、思、ひ、合、へ、た、此、  
の、字、の、序、上、自、身、も、所、法、を、改、め、た、其、中、の、量、の、朝、野、に、行、  
つ、た、が、後、ら、ん、ま、い、と、い、ふ、と、流、字、の、を、捕、り、ま、ん、が、日、本、の、文、化  
を、開、いた、り、と、唱、破、し、川、瀬、と、い、ふ、る、懸、念、の、十、二、年、の、後、刊



征支歌  
 雁門雁不飛。似雁是飛機。機上投巨彈。破敵我揚威。此地古  
 有饑太守。食雁美乎遺銅臭。我軍豈爲口腹來。志在一舉定宇  
 宙。拔太原兮屠南翔。取崑山兮陷太倉。保定嘉興及常熟。所  
 在壘壘皆滅亡。上海要害尤所持。自稱永保此金湯。驕將失守  
 今何在。外人皆驚我兵強。南京不能保。遷都於重慶。大官或  
 逃潛。邊將不奉命。人民迎我軍。陳告苦虐政。士卒降我軍。  
 喜曰脫檻笮。爲日本毆民者誰。介石其名蔣其姓。大勢見已  
 決。媾和制機宜。膺懲不徹底。固不可班師。願使彼悔悟。共  
 樹太平基。嗚呼此戰也。由彼先執戟。從今修隣交。必棄遠交  
 近攻策。  
 自註。後漢書王符傳云。皇市規鄉人以貨得雁門太守。規問卿在郡  
 食雁乎。第五六句故云。○天山曰。起筆鷹揚。先見餘裕之綽綽。而後敘事變經  
 過之概。取次換韻脚。以應詞致之抑揚開闔。而措辭之秀。托意之切。可見手筆  
 之精也。

敵前人柱 并序  
 我軍攻劉河行。前有狄溼。工隊編竹爲橋。以濟步兵。  
 半濟橋將覆。工兵乃入水以肩支之。遂得濟。世謂之敵  
 前人柱。  
 敵前急架竹橋危。步步將沈半濟時。一計咄嗟人作柱。禪丸雨  
 裏以肩支。一語如淡。再語見深。而三唱發嘆。知天衣無縫之妙。  
 正誤。前號所載伊倉浪仙氏作時事偶感末章第三句奴奴擊  
 阪島甲山氏作題及第二句秦改秦。吉原香谿氏作題同改田家  
 秋晚

後の歴史を汚し、川瀆の目を  
 河の研究をせしめ、其の  
 大なる其の完成の日を  
 と、我々の得るべきは、  
 (十一月十日)  
 大要に云く、今後の探訪  
 天の冥示に、よる如  
 四千年の歴史も有り、風景  
 田文の故を以て、其の歴史  
 旅せんところ、心、此、志  
 人、古く、此、意、誌、を、得



福のよきと云ふは、支那は近年我邦が幾十倍の巨資  
 を投じ或十萬の鮮血を流して此の日本の歴史が少  
 なくともある。乃ち日清戦役日露戦役其舞臺に、  
 支那のありつて、日本に取つて忘る可き事、戦蹟は甚だ多い  
 のがあるが、今次の戦争は、戦蹟は支那支那南支、  
 直り、上海とを領せり、又、遼、  
 爾、此の戦果を得り、  
 戦連勝の誉を博し、決して果に戦ひ、  
 せん、  
 秦皇の偉業とて、  
 採する所とすべし、但し、  
 困難、吾々の、  
 困難、吾々の、  
 困難、吾々の、













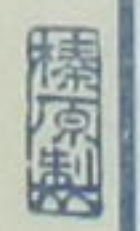


二将校一人の刻合はあつたとそのかゝるに  
 一もあつたに及ばぬと云ふ。  
 同七記

借長澤松雨對飲忘襟甚  
 有作星日初雪  
 倚遍忘襟海上甚云着履怪互  
 雲堆天際十月雪初道壹一  
 年人再來性神開臨能浩為愁  
 隨惡浪乍崔嵬北風難住歸帆駐  
 逆捲龍腥瀉酒盃  
 十時至十日念三日 湖南堂甫軒圖

刺儂皆坐大羅天  
 邊烟蝶寓言夢也  
 海箋只應風月取  
 百年臨列同領  
 然 丙午八月念五日  
 湖南堂甫軒圖

○長澤龍男(杉雨)東海松雨  
 時今大久保湖南の邊 詩と刻  
 せんし今印刷中と云ふ余も  
 してし前序を定まら今湘  
 南の邊墨を墨只 湘南巴津  
 り在りし日豪紳杉浦のあり  
 危國の十二日系を詠して撰本  
 集に此詩ありや否や(無



春事一着  
 已園備一  
 是夢同  
 自持花  
 中滿江  
 海帆風  
 東東紅  
 千與道  
 送五自  
 自名山  
 竹茶茶  
 竹雪白  
 雨即也  
 新水天  
 到則舟  
 一盃酒  
 常何人  
 己身自  
 長行名  
 吳赤心  
 湖南堂甫軒

く心之んを収めんと  
 杉雨大峰 觀極絶句の美本を  
 贈り大峰の郷里極美の名所  
 せんも余未以て此集此の  
 花を賣り了徳句(三十一)を収む  
 如和十身 著高松毎のぬき出  
 版を乞詩も亦在能う、一二  
 を揚す  
 王子嶺頭晴雪天、土氣紫山を  
 翠於烟轉眸背指蒼波心  
 惟影乃存胎内川  
 空擁欄干鳥道賒、一抱不識







の評判もあつたが  
 旭年より花ねと  
 しるべが何と  
 人気が無つた  
 其の性格も  
 一りり政治家  
 として重きを  
 き得たか  
 しては確か  
 値があつた。彼人の  
 性格も何れかの  
 二三人も

余録

近衛内閣の一つの大きな柱だった馬場一氏が死んだ。それは内閣の如く突然であつた。この間、八日間たから、現職大臣の死と異ならない。屍を馬場につくは、馬場の本懐である如く、非常時日本の國勢のために働いたのは、政治家の本懐であらうが、何といつても「聰明」とか「有能」とかいふ文字を人間にしたやうな氏を失つたとは、氏の知己といふべき近衛首相の嘆息するのみに止まらない。時局は益々馬場氏の如き政治家を要求してゐるから氏は最も有望な前途を捨てたといはねばならない。▲馬場氏は必ずしも人望ある政治家ではなかつた。寧ろその眼から鼻へ抜けるやうな伶俐と、行くとして可ならざるはなき器用とは、その競争の若くは獨立の立場にあるものに一種の面影を感ぜしめるほどだつた。

とにかく、氏を友人とし、  
 して置くことは、如何なる人にも  
 この上なく重寶であり、まご遺母  
 しくもあつた。しかも一人にあり  
 難な純潔性はなく、人として眞率  
 誠實の分子が多かつたといつて差  
 支ない。▲だから、氏は到るところ  
 でよい「親分」をもつた。若くは  
 「兄弟」をもつた。政黨内閣連や  
 な時代に、一個の官僚である氏を  
 自己の後任として法務局長官に推  
 したのには横田千之助氏であり  
 田中内閣時代に氏を勸進院に推  
 したのは森恪氏であり、勸進にな  
 つてから氏を無二の参謀長とした  
 のは青木信光子であつた。氏は政  
 友色を帯り消して井上準之助氏に  
 信任されたので、オツボテユニス  
 トといはれ、更に非常時日本の寵  
 兒として廣田内閣に総裁の手腕を  
 揮つたので、その好評を上塗り  
 したが、氏はどんな職場でも一種  
 のスター・ノーフ主演者として重用  
 されたに過ぎなかつた。つまり氏  
 は一人のために働き、一黨のため  
 働く忠實性はなかつたかも知れぬ  
 が、その働きは常に日ならず、仕事に  
 懸してこの上なき自信と情熱とを  
 もつてゐたのであつた。必ずしも

悪い意味ではない官儀的政治家の  
 典型といつてよい。氏を機軸主義  
 者といふのは、氏の上つ面を見て  
 誤解したものかも知れない。▲要す  
 るに馬場氏は時代を指導する政治  
 家でなく最善の事務家だつたので  
 ある。それだけ時代の風潮に感  
 ずるでもあり、黨相として革新主義的  
 であつたのだ。

いふ所  
 心算  
 ぬ載  
 する



市嶋 春城

拜啓未拜時を得ず候へども御文名は久しく承知罷在候  
 御惠送の御歌集昨日接手勿々夜に入る迄通讀、會心の御  
 作は日乗の雜記に抄録其數百にも及び申候實は小生短歌  
 を解するものに無之候得共佳作は喜んで誦するを常と致  
 居候。平生思ふに過去の短歌は兎もあれ、今後の短歌は  
 如何にすべき、これは大なる問題にて小生など勿論確か  
 と考案あらねど、有體に申せば、過去のものには慊たら  
 ざる所あり、因襲的に既往の諸體を株守して、今後の歌  
 となすことは此何あるべきと平素秘かに感ひ居る次第に  
 候處御集を讀み且つ御主張を承り、今後を照す光明を得  
 たる心地致され深く感激仕候一概に歌は天真流露なれ女  
 性の歌は優麗なれと申しても其弊や纖弱に流るるのみ、  
 天地は廣いが歌の境地は謂はれなく局限せられ、それを  
 踰れば邪道と難ぜられ、少しく理に趨れば歌にあらずと  
 排せらるる如き小生などの素人の餘りに莫迦々々しきに  
 呆れ居る次第に候實に因襲ほど恐るべきはなく、大勇に  
 あらざれば之れを打破することが出来ない。新機軸を出  
 すものあれば、群謗百出、之れを氣にかけては到底革新

は出来難い。失禮ながら貴下は御婦人の身として奮然大  
 膽に前途に一大示唆を與へられた御勇氣は眞に敬服の外  
 無之候、何事も眞剣であらねばならぬが藝術に於て最も  
 然りで短歌を遊戯と心得唯に技巧のみを専らとし内容の  
 空疎を顧みざる如きは既往は是非なしとし今後は大いに  
 警醒を要すること貴説の如く眞に同感に御座候、御禮迄  
 會心の御詠の内一二を摘録する  
 わが命の過去一切は白紙たれ夏山のみどり我を泣かし  
 む  
 身は拵せたりともまだをみなこの血は濁れじ獨り虫の  
 音聴くに堪へめや  
 磯に寄せてひろごるほどに潮弱り途にはかなく砂に吸  
 はるる  
 冬の夜は近よりて語れわが息に君が眼鏡の球くもるま  
 で  
 貧しきは遂に貧しく富みたるはいよいよ富みたり明治  
 このかた  
 山や空や無窮に對して人間のわれの究めは稚きものか  
 な  
 この世の中に生きねばならぬことわりを釋迦も基督も  
 曖昧にせり  
 社會のおもてに隠されてゐる秘密ありていくたりのひ  
 といけにえとなりぬ







起し、余のことも及んじある。此の奥のこゝろ人々相あつた  
山陽研究家と云くも、何うも其れを考へて、こゝろ切  
りぬきをあつて、

今日でこそ當時に於ける國體の認識者、幕政時代の先覺者として、畏くも前後二回の贈位をさへ辱ふしたる山陽も、青年の頃いさゝか常軌を逸した行動のあつたが爲に、その世に在る當時は親不孝とか、藩に對して不忠とかいふ惡評を被つたこともあり、その後幾何くもなしに俄かに文名が噪しくなつたがために、學者間に多少嫉妬の氣分も手傳つて、相當長い間兎角誤解されがちであつたが、近年はどうやらその眞面目が汎く諒解されたと見えて、山陽に對する定評も一先づ落ちつくべき所に落ちついたやうである。人の一代は棺を蓋ふて後定まるといふが、必ずしもさうばかりは行かない、慎むべきはその平生、歳之首めに當つて自ら戒めおく。

山陽惡評家のかなり多かつた半面にはまたその愛好者も昔から尠からず、廬山の眞面目を畫かうとしたものも相當あるにはあるが、一般にはつきり諒解せしめた功勞者は明治中期以來の眞摯なる山陽研究の先覺、森田思軒、徳富蘇峰、山路愛山、市島春城、木崎好尙等の諸先生といはねばならず、我々後學の愛好者は地下の山陽に代つて厚くその好意を謝せね



ばならぬ。これら諸先生研究の結果として、山陽一代の業績はその修史事業はいふまでもなく、その文章も、その詩も、その書も、凡そ山陽の足跡として此世に遺る總てのものが、山陽の學統、學問、思想、見識、趣味、娛樂の各方面から専門的に検討されて殆んど遺憾なきまでに明瞭になつてゐるにも拘らず、こゝに一つ不思議なることは、山陽の畫について從來ひどく閑却されてあり、何人も餘り詳しく述べられてないことである。或は私の寡聞に由るのかも知れぬが、僅かに市島先生の「隨筆頼山陽」と、徳富先生の「頼山陽」に簡単に記載されてあるだけで、その他には一向見當らぬやうである。恐らくこれは何人からも山陽の素人藝術、深く立ち入つて詮議するまでもないと、他の事柄よりは軽く扱はれた、めであらう思はれる。

○字山に古来いづくの長かあるが、唯本五尊の善悪の  
二字を抽出して、その善悪の思ひつき、いんじん人の思ひつき、こゝろ切  
りぬきをあつて、  
山陽の善悪の思ひつき、いんじん人の思ひつき、こゝろ切  
りぬきをあつて、



き見と、お手と合字し、此形と形容しか、こゝろ日本人の  
 思ひ別く、うづつた所、善慈の名と一対とすんき、  
 思ひ別くある。

寒業齋書



寒業齋

去年の戊午の歳、虎の虎を、狩の道と案し、  
 七林利、其の挿話、先づ、虎の虎を、  
 虎の虎を、差し、向左の如き、  
 高き、或、虎の虎を、

虎の虎を、

虎の虎を、

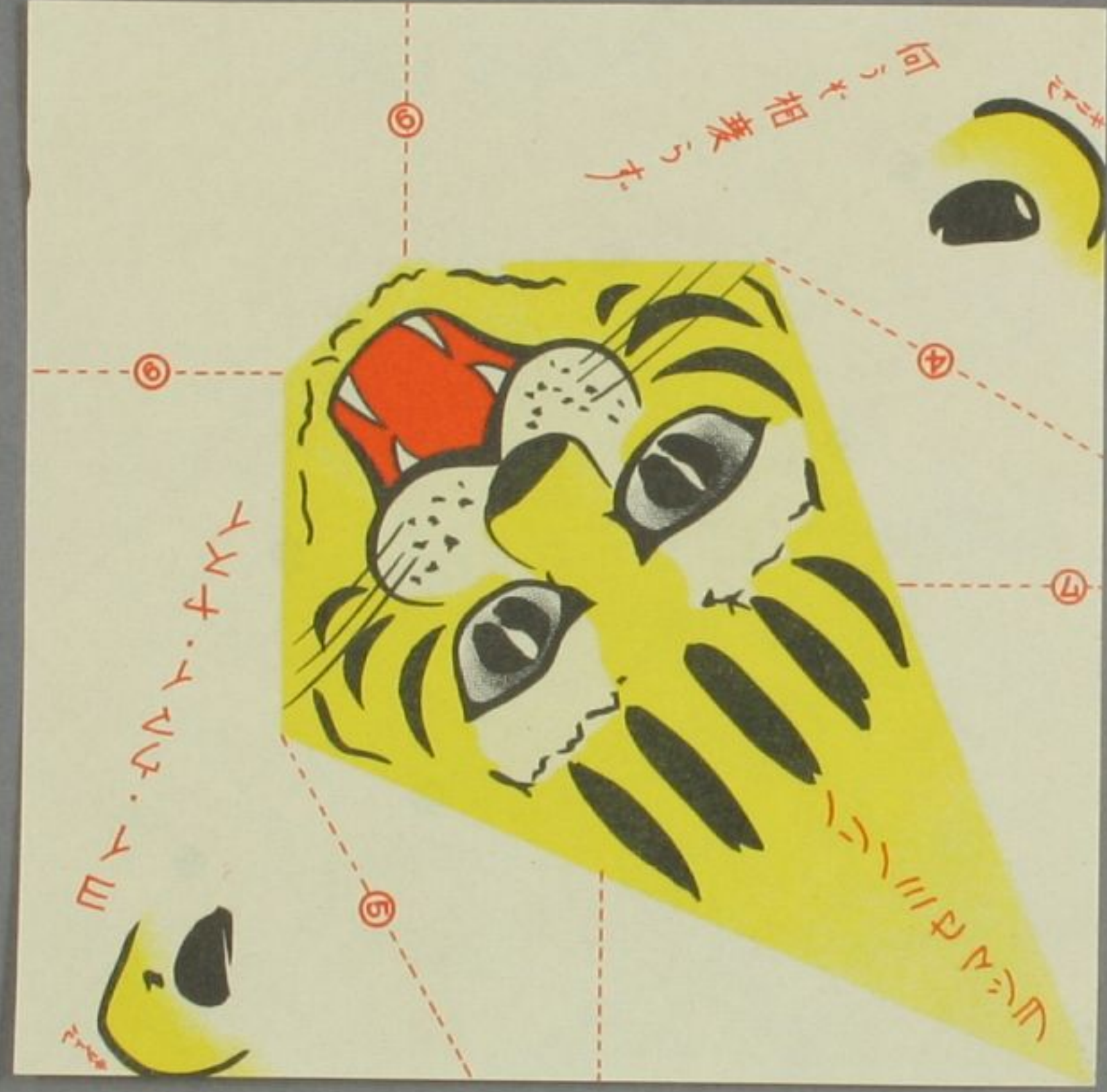
虎の虎を、

虎の虎を、

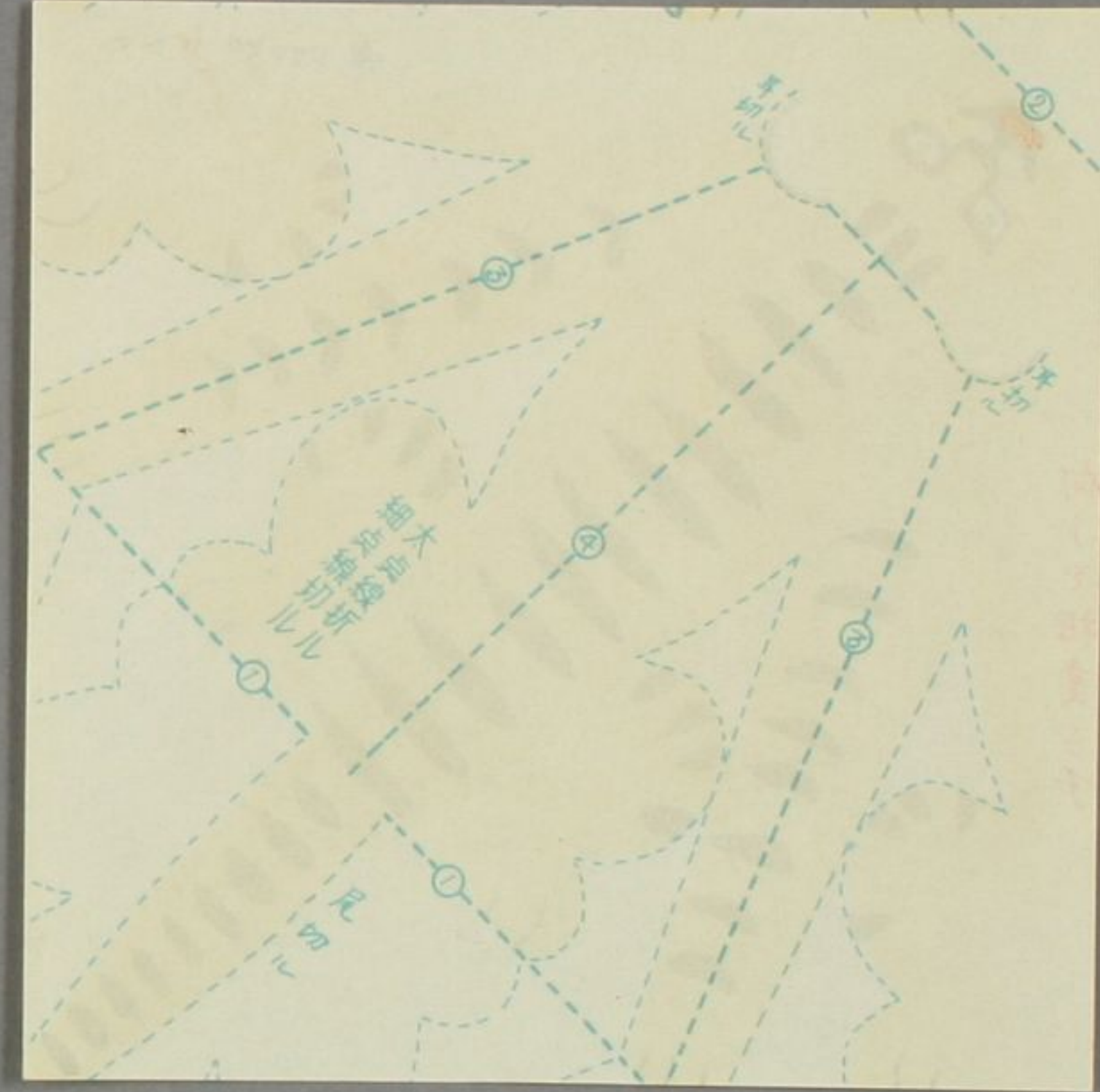
虎の虎を、

虎の虎を、



















# 高齢名士のお献立しらべ

が、只今は毎晩薬に日本酒を盃一杯ほどつづいて居ります。

東京高等女学校長  
棚橋 絢子 (百歳)



若い時は固いものを頂きましたが、近頃は軟らかい消化のよい食物を腹八分目に致して居ります。毎日二食主義で、朝はパンとオートミル、鶏の玉子二個づつ半熟にして薄切りにしたパンにはさんで頂きます。夜はをちや二碗に、軽い白身の魚くらゐです。どういふものか若い時から味噌汁は嫌ひで、それに洋食も餘り好みません。以前は毎朝お餅を缺かさず頂いて居りました。黒豆や昆布類も好物でした。甘黨の方です。

理學博士 田中館愛橋 (八三歳)



始終何やかやと忙しく動き廻つてゐることが、結局自分の健康のためによいのだと思ひます。食事などは何であらうと文句は云ひません。朝は軽く牛乳とパンだけで、その外の食事の時には、餅でも、豆でも、芋でも、好き嫌ひは云はずに出されたものを何でも平げます。酒は毎晩盃五杯づつ位、併し甘いものも決して嫌ひではなく、左右兩刀を使ひわけます。

男爵 山本 達雄 (八三歳)



暴食をつゝし、常に腹八分目にとどめ、主として菜食を嚼つてゐるほかに、これぞといふ好物もなければ、嫌ひなものもありません。酒は少しもたしなみません。

宗教家 小崎 弘道 (八三歳)



人間の身體は塵捨場ではないのだから、食べたら、食べたと思ふだけの食物を攝ればよい、——との父の遺訓を守り、例へば、もう一口食べれば皿がきれいになるといふ時でも、お腹がもう澤山だといつ

たら、決して無理につめこむやうなことはせず、それでやめます。食物に好き嫌ひはない方で、肉、野菜何でも結構、殊にさつまい、栗のふくませなど大の好物、食後にも間食にも果物はよく食べます。酒は一滴も飲みません。

陸軍中將 大島 健一 (八一歳)



食物に好き嫌ひなし。但し常に過食せず、腹八分目を守るのみ。朝食はパンとミルク。晝と夜は軽い野菜及び魚の日本食、ごく平凡で、これといふ養生法など試みしことなし。

社會教育家 松村 介石 (八〇歳)

私は昨年四月肺炎を患つて、今

Handwritten text in a calligraphic style, likely a continuation of the article or a separate note.







かつらに娘を笑はせし漸やうらなれ此の女入道の川口福  
る相もゆかたのいかり... 存るはは笑姿とす。(十一  
月廿七)

○前：序入就て書いしが宗尊親王の御歌は  
市とも用のん！昔も

今も界のちる高世のうら

とあり又李白の詩は

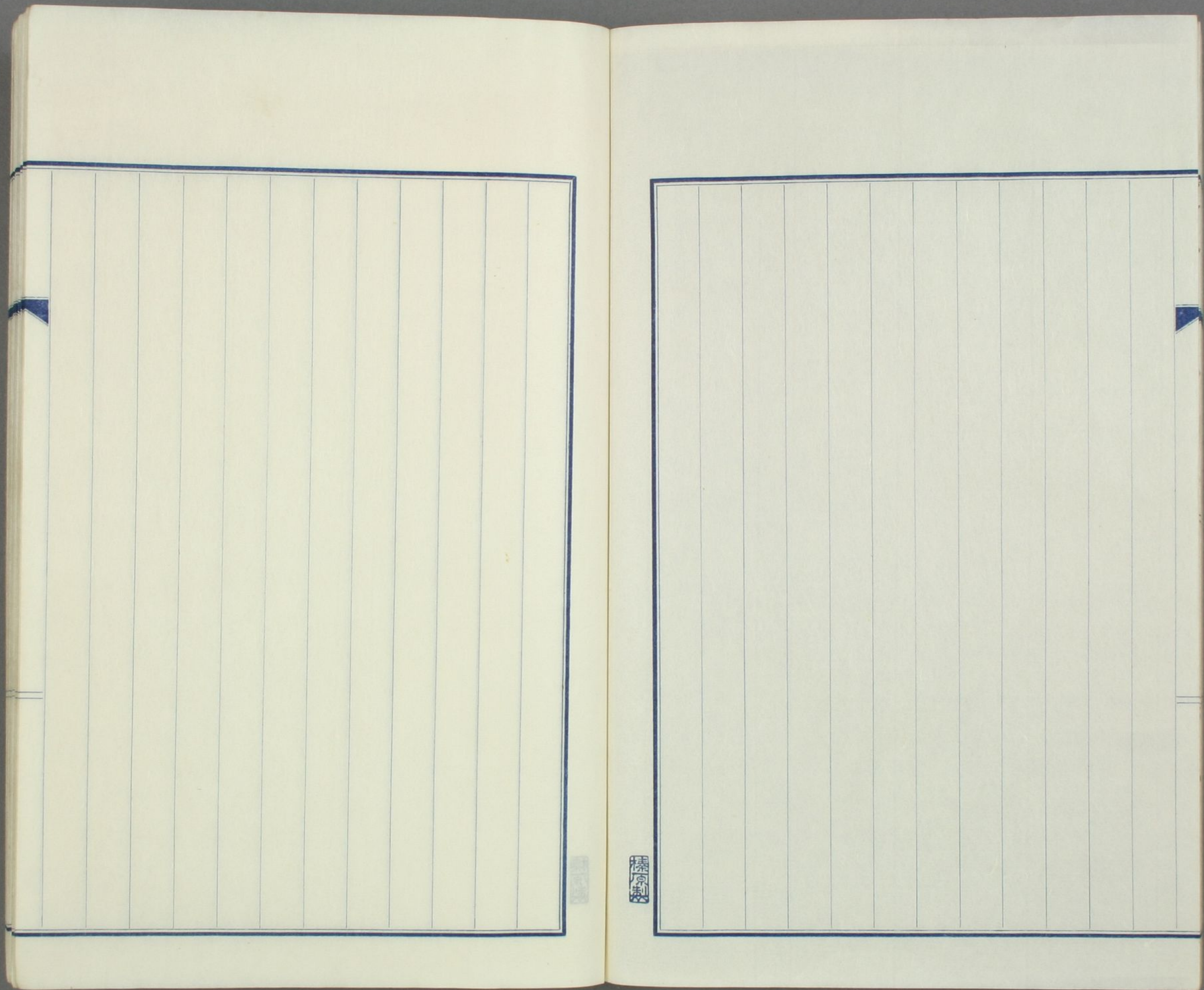
君失臣今龍為魚権帰臣今虎去界

此等皆漢の事方相傳ふ、有力の士は平んかち雲の上  
のやう之んを柳あはれ深淵の下にあり之を用ふんは作  
とす、用のんは望しるの語も胎胎す



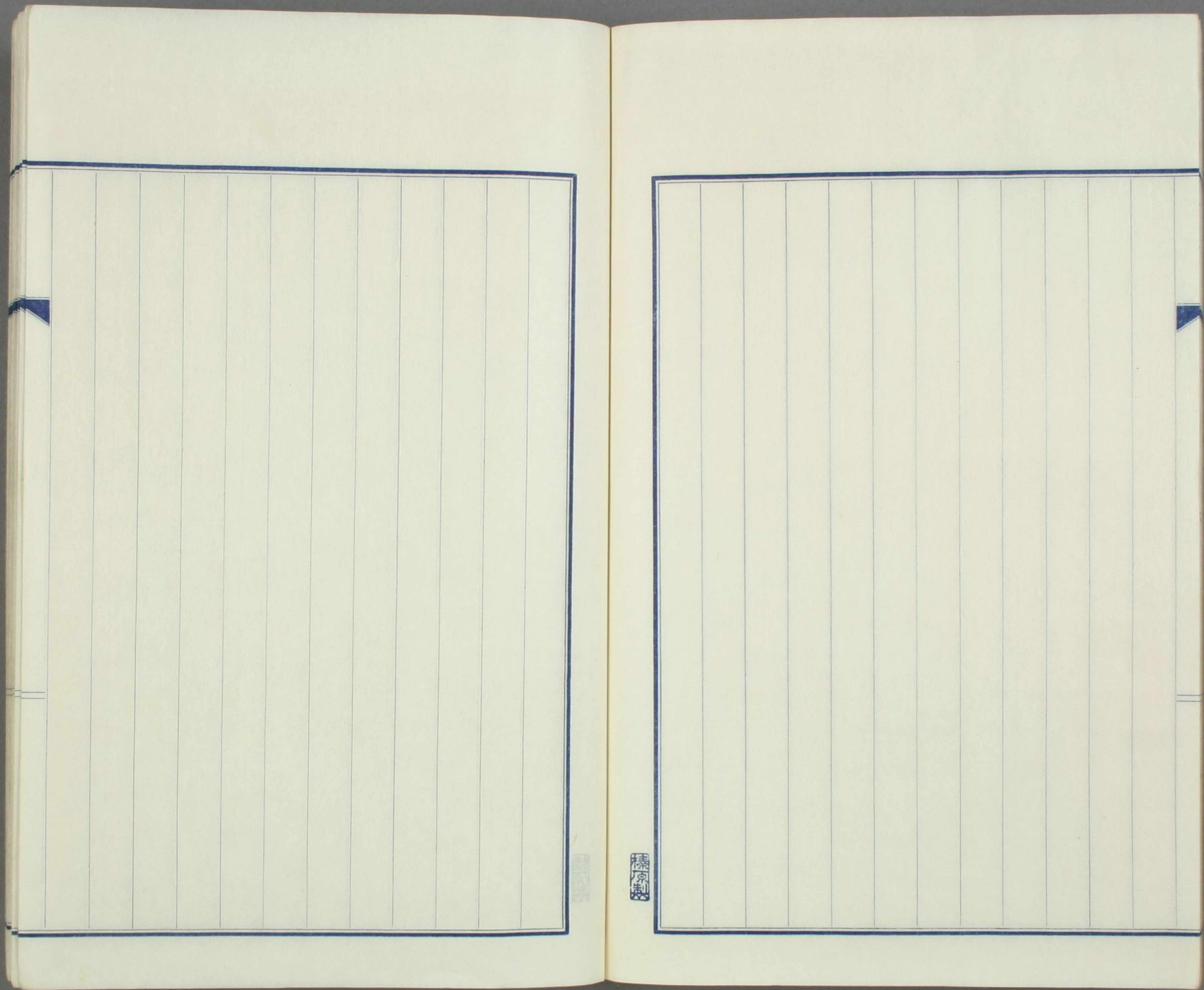
○字の星院と撰うるは任を板葉... 露精の流る出  
るあり。詠もえり七例も自らうゆのこも目もつくりもか  
いが古道をとりしとあり。座の二目につくもあはれ止  
まらぬまをとりしとあり。岡物もいふもいふあり。まの  
く枝のいふと七ハす、其の段か三個所あり、撰うる  
意も白紙も金波あり、よきくえり仁治の印が  
ま焼の木も押し七あり、此れよめりことかかん  
れ。初も流つとあり。花葉も仁治を記す。短鏡之  
類も多し家花とあり。いふとんの珍もいふらん  
次に流る心もいふ。善も為、献し、まのち家、移  
つれよめり思入、時多物、物弄り、進こと、互  
つる難あり物。(十一月廿八日)





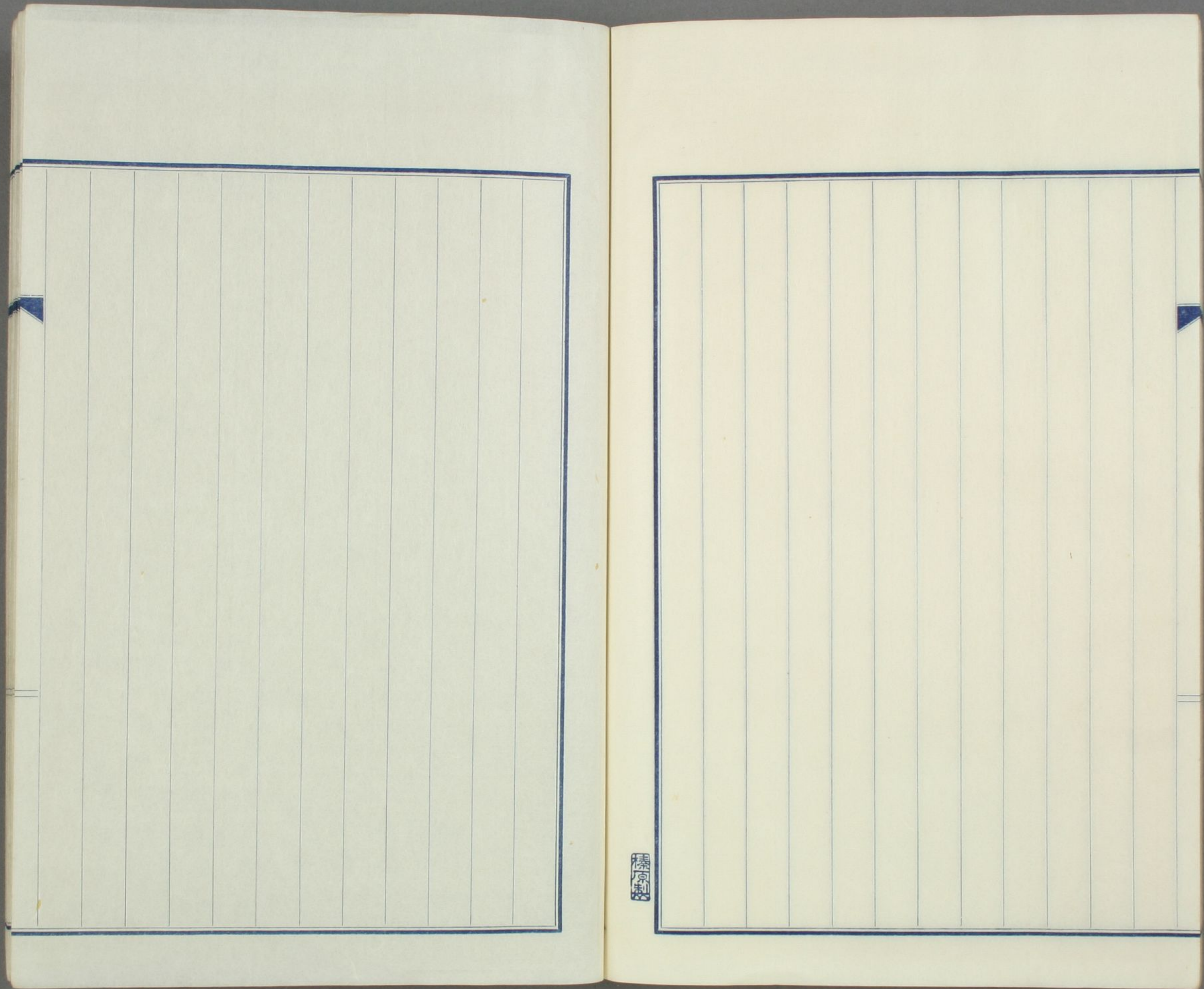
Small blue stamp or mark at the bottom center of the right page.





Small blue stamp or mark on the left page near the bottom edge.













静岡縣 (二三名) 太田重太郎 (三七) 飲食店経営 (静岡市、日無伊東支部長) 吉葉清一 (二五) 左官職 (静岡市、日無海部支部長) 宗義保 (四〇) 土地開墾 (中太、静岡市、日無海部支部長) 植松七之助 (二八) 無職 (静岡市、日無海部支部長) 福岡縣 (四三名) 三浦愛二 (四三) 費業 (静岡市、日無海部支部長) 神田敏男 (四六) 料理店経営 (長久、日無海部支部長) 青野武一 (三九) 職工 (八幡市、日無海部支部長) 深井菊松 (四〇) 米商 (八幡市、日無海部支部長) 堂本爲廣 (四七) 職工 (元岡、日無海部支部長) 川上利徳 (二九) 無職 (全許九州山坑夫組合書記長) 穂坂六郎 (二〇) 同 (全許九州山坑夫組合書記長) 甲斐政夫 (二九) 同 (全許九州山坑夫組合書記長) 下平淺市 (二七) 夫 (全許日鐵一般労働者支部書記) 柳豊一郎 (二七) 同 (高小卒、日無海部支部書記) 片柳豊一郎 (三三) 同 (高小卒、日無海部支部書記) 大塚大一郎 (四三) 同 (高小卒、日無海部支部書記) 濱野清 (二四) 同 (同上) 新湯縣 (二〇名) 玉井潤次 (五五) 弁護士 (東大法律系、新潟市、新湯支部長) 長澤榮三 (三〇) 同 (高小卒、日無海部支部書記) 上坂榮作 (六名) (全許山坑夫組合書記)

福島縣 (二三名) 大井川幸隆 (三〇) 新聞發行人 (高小卒、平野市、日無海部支部長) 加藤木誠一郎 (三三) 無職 (高小卒、日無海部支部長) 秋田縣 (二〇名) 佐藤賢太 (日無海部支部) 平山忠尚 (社大支部書記) 岐阜縣 (二名) 畑寅雄 (二四) 印刷職 (高小卒、日無海部支部) 木村愛雄 (三八) 印刷職 (高小卒、日無海部支部) 大分縣 (二一名) 兒玉秀次 (三九) (全許九州、中津協同委員長) 矢野年男 (三八) (中津第一一般政治部長) 和歌山縣 (六名) 山上爲男 (三三) 無職 (中大中退、日無和歌山支部書記) 山下清春 (二七) 職工 (大阪英商英業、全許、紀南労働組合書記長) 岡山縣 (九名) 中原健次 (四二) (岡山労働組合全許岡山山地労働者組合委員長) 重井鹿治 (三六) 洗濯 (高小卒、全許一般労働者組合委員長) 北海道 (一九名) 武内清藏 (日無海部支部) 寺島親藏 (全許北海道支部) 吉田三郎 (全許道庁一般政治部長)

# 共産革命を旨し 大衆動員を意圖

## 十八道府縣 檢舉の理由

【内務省発表】 今日本無産黨、日本労働組合全国評議會の中心分子及びその理論的指導グループである所謂労働派の共産主義一派に對し、治安維持法違反被疑者として、檢舉が行はるゝと共に、その各結社に對しては結社禁止が命ぜらるゝこととなつたのであるが、その概況は次の如くである。

一、労働派の發生過程

中世の労働派と稱する共産主義グループは、我國最初の共産黨組織たる山川均、荒畑勝三、高津正道等を中心として一帯であつて、その後鈴木茂三郎、加藤勤十、大森義太郎、黒田壽男、向坂逸郎其他の指導分子が加はつたのであるが、元此の一派は日本共産黨内の一派であつた。

即ち労働派の思想は、所謂第一日本共産黨當時その指導分子た

であり、正統派たる日本共産黨に比し如何にも離れて見えたので、従来は主としてコミンテルンの日本支部であり、不協定なる闘争をその目標とする日本共産黨に對しては極力取締が懸念せられたのである。

三、コミンテルンの方向轉換と労働派の積極的活動

然るに昭和十年夏コミンテルンが七年來で第七回世界大會を開催して、動世界赤化の工作に積極的的の擧出すこととなり、その大衆動員のため従來の運動方針を大體變換し労働派の天に近づける方針を採らせたのである。従來は、労働派の活動は、一、フランスム反動、帝國主義者反對に主力を注ぐこと、二、従來排斥して來た社会主義主義、自由主義諸國とも提携して、廣汎なる反ファシズム人民戦線運動を展開すること、三、従來の目的を達成するに各該の特殊事情に應じて運動方法を採ること、四、強力な運動を利用し若くは援助すること等の方針を決定して従來の運動方針を大體變換し、爾來我國の左翼分子に對してはアメリカ共産黨日本人執行部の指示に多量に對して右翼方針の指示運動に努めたのである。而して之が方法としては最近に於ける政治、經濟の階級の闘争を總べてフランスム反動の旗頭「支配階級の階級闘争政策」の結果であると曲解宣傳し、之に對しては自由民権の擁護、平和政策の樹立、國民生活の安定等のスローガンを掲げて闘争すべきこと及び之が闘争の爲には社会大衆黨を中心として既成政黨内の進歩的分子とも提携し廣汎なる反ファシズム人民戦線を樹立して闘争すべきことを指示して來たのである。

四、檢舉取締

之等一派の目的に於ける活動は以上の如くであるが、爾來我が國内外の事情を見るに、時局は極めて重大にして之が階級闘争の爲、一帯一致の闘争を擧げようとするものがある。斯る階級闘争の如き等一派の活動は國家的にも國內的にも極めて重大なる影響を及ぼすこととなり、更に之を以て之を以て去る十二月十五日午前六時を期し之等の中心分子に對し國體を變革し私有財産制度を否認するの治安維持法違反被疑事件として斷乎檢舉取締を加へると共に、一方日本無産黨に日本労働組合全国評議會の各結社に對しては結社禁止を命じて今後の活動を禁止したのである。

而して檢舉取締は、警視廳、北海道、秋田、福島、栃木、新潟、神奈川、静岡、愛知、岐阜、富山、京都、大阪、兵庫、和歌山、岡山、福岡、大分の十八道府縣に於て、その檢舉者数は今日まで約四百名に達したやうな状態である。當分今後とも之等共産主義運動に對しては、その運動が合法を以て之と認められず、取締取締を加へる方針である。

此の間に一言したことは、コミンテルンが前述の如く反ファシズム人民戦線の樹立及び合法運動の展開に利用する等の運動方針を採用して、爾來之共産主義者は極力社会主義主義運動乃至自由主義運動に導入し、若くは之の運動を利用すべからざることを主張し、之等の運動に對しては、之等の運動が合法的なることを主張するものである。

二、労働派の思想並に目的

かくて山川、荒畑等は労働派は、日本共産黨と提携後、機關紙の雑誌を發行し、或はその雑誌を通じて引續き正統派との競争に努めたのであるが、それは孰れも階級に關する問題であつて、主要思想の相違に關する論ではなかつた。

又従來この派の無産黨並に労働派が合法的の形態を保つて來たのは、孰れも階級上の意識に基くものであつてその眞意はマルクス、レーニン主義の基礎に立脚して闘つたものであることはこれ等の運動方針を日刊見ればよく推測せらるゝものである。然るにこの派は日本共産黨と同じく共産主義革命を目的とするものであるが、只労働派は日本共産黨と異なり、コミンテルンとの有機的連繫が明らかでなく、又その運動方針が各該各該





【本紙不再録】  
編輯兼印刷部本編輯  
印刷所 東京朝日新聞社  
東京市神田區有樂町  
二丁目二番地  
發行所 東京朝日新聞社



# 山川猪俣大森加藤ら 左翼四百名を大檢舉

## 日本無産 と全評の 兩團體結社禁止

内務省警保局は去る十五日午前六時を期して警視廳を始め全國十八府縣警察部を動員し、日本無産黨、日本労働組合全國評議會及び労働派の幹部約四百名を一齊に檢舉、更らに廿一日午前六時日本無産黨東京市豊島區支部長一名を檢舉した。當局では日本無産黨幹部等が同黨結成以來世界赤化の總本山コミンテルンの擬裝戰術指令に基いて合法團體の假面を被り巧妙なる共產主義運動をなすつゝあることを察知し極力内債中のところ最近に至り共産主義を奉ずる労働派の指導原理に基いて團體變革の意圖の下に暗躍をつゞけつゝあるとの確信を得、茲に司法當局と慎重協議の結果、現下の時局に鑑み愈々同黨一派に大鐵槌を下すに至つたが、同時に日本無産黨並に日本労働組合全國評議會に對しては治安警察法第八條第二項により安寧秩序を紊すものとして廿一日結社禁止を命じた、我國における左翼陣營はこゝに根こそぎに摘發され思想界にも大きな衝動を與へたが今後當局の動向は頗る注目されてゐる、なほ今回の事件は十五日大檢舉と同時に新聞記事の掲載を禁止したが二十二日午前十一時を期して解禁された。

## 勞農派も根こそぎ

### 鈴木茂、向坂、荒畑ら 主なる被檢舉者

- 山川 均(六〇) 著述家 (同政大三年中退)
- 猪俣 南雄(四九) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 大森 義太郎(四〇) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 向坂 逸郎(四一) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 岡田 宗司(三六) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 黒田 壽男(三九) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 伊藤 好道(三七) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 稲村 順三(三八) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 大西 十寸男(四二) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 岡崎 次郎(三四) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 加藤 勘十(四六) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)

- 鈴木 茂三郎(四三) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 荒畑 勝三(五二) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 高津 正道(四五) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 中西 伊之助(五二) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 橋浦 時雄(四七) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 山花 秀雄(三四) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 北田 一郎(四一) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 中島 喜三郎(四六) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)
- 三輪 盛吉(四七) 著述家 (早大文、シカゴ大學、コロン)



大森義太郎 向坂逸郎 黒田壽男 加藤勘十 鈴木茂三郎 荒畑勝三 高津正道 中西伊之助 伊藤好道 山花秀雄

- 安平 鹿一(三六) 市電自動車
- 佐々木 三三(三一) 市電自動車
- 牧野 松太郎(四二) 市電支部長
- 島上 善五郎(三五) 市電支部長
- 橋本 富貴良(三七) 市電支部長
- 清水 花次郎(三八) 市電支部長
- 永見 政保(三五) 市電支部長
- 三浦 信義(三九) 市電支部長
- 菅原 正松(三六) 市電支部長
- 佐藤 参治(三九) 市電支部長
- 土屋 銀次郎(四九) 市電支部長
- 草野 友四郎(四二) 市電支部長
- 新島 仙次(三六) 市電支部長
- 中西 貞吉(三九) 市電支部長
- 田中 貞吉(四二) 市電支部長
- 山ノ内 房吉(四〇) 市電支部長
- 高野 實(三七) 市電支部長
- 飯崎 子之松(四二) 市電支部長
- 柳本 美雄(二六) 市電支部長
- 橋本 定次郎(四六) 市電支部長
- 關 博(四九) 市電支部長
- 平野 武雄(三〇) 市電支部長
- 兼島 景毅(三七) 市電支部長
- 仲橋 喜三郎(三八) 市電支部長
- 大西 文雄(三三) 市電支部長
- 南 善藏(四二) 市電支部長
- 神奈川 縣(二九名) 市電支部長
- 島袋 正順(三八) 市電支部長
- 兵 庫 縣(二二名) 市電支部長
- 木村 錠吉(六八) 市電支部長
- 青柿 善一郎(五二) 市電支部長
- 桑田 喜三郎(四七) 市電支部長
- 藤田 章次(三八) 市電支部長
- 森口 新一(三七) 市電支部長
- 愛 知 縣(二一名) 市電支部長
- 赤 松 勇(二八) 市電支部長
- 近藤 信一(三二) 市電支部長
- 大島 勝太郎(三三) 市電支部長

〔裏面に つづく〕







# 皇軍大捷の歌 當選決る

さきに本社が「皇軍大捷の歌」募集を遂行するや時あたかも皇軍が露都南京めざして疾風の進撃をつよけてゐたころとて全國民のこの企てに對する關心と熱意は熾然として高まり去る十日の朝ひり窓に國民的感激をこめて皇軍の勳功を讃へた歌句は東京朝日新聞社に一萬四千四百七十三篇、大阪朝日新聞社に二萬四千五百十八篇、合計三萬五千九百九十二篇といふ多數の応募があつた、兩社でそれ／＼編輯局内に設けられた審査委員會において審査の上、東京、大阪、各十篇の優秀歌句を選出し、更に去る十五日、大阪朝日新聞社に附催された兩社聯合委員會で慎重審議の結果左の通り入選歌および佳作五篇を決定した、なほ入選歌の作曲については斯界に名高き堀内敬三氏に依頼し、この歌の中に發表の運びとなるはずである

入選 賞金一千五百圓及び記念牌 大阪府南河内郡柏原町四〇五 福田米三郎氏

## 入選歌詞

### 皇軍大捷の歌 福田米三郎作

一 國を發つ日の 萬歳に 痺れるほどの 感激を こめて振つたも この腕ぞ 今その腕に 長城を 越えてはためく 日章旗

二 焦りつく雲に 彈丸の音 敵殲滅の 野にむすぶ 露營の夢は 短夜に あゝ泥濘の 追撃の 汗を洗へと 大黃河

三 地平か空か 内蒙の 砂塵に勝利の 眼が痛む 思へば遠く 來たものぞ 朔風すでに 吹き卷いて 北支の山野 敵もなし

四 江南の空 雲燃えて 陸戦隊の 陣堅く 逆巻く浪に 沿岸の 航路を断てば 敵の船 港に島に 影ひそむ

五 八機二機五機 墜ちてゆく 敵へ情の 一旋回 機首をかへして 更に衝く

六 鐵路トーチカ 幾山河 手柄に残る 彈の痕 大上海に 火は消えて 暗のクレーター 星凍る 黒い太湖の 北南 見よ戦友の 肩の霜 もろくも解けし 敵の守備

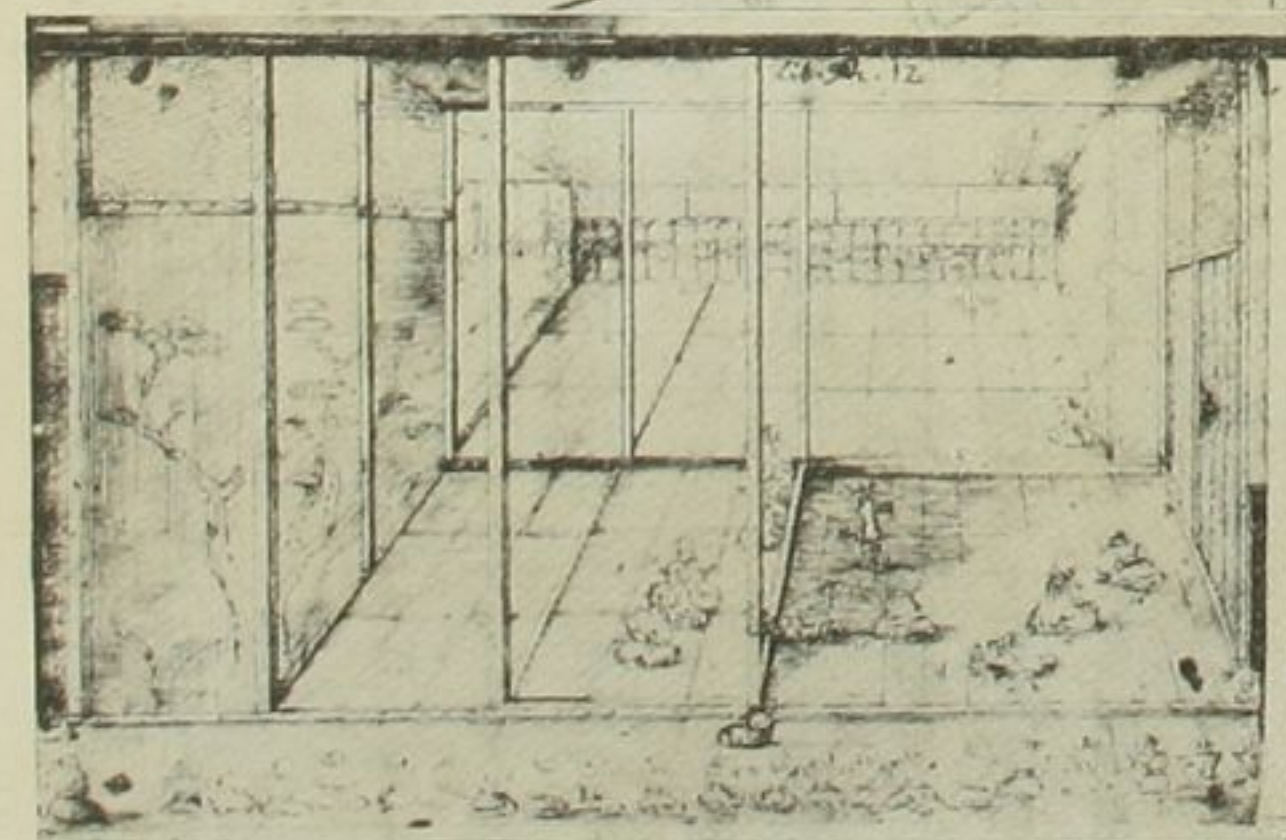
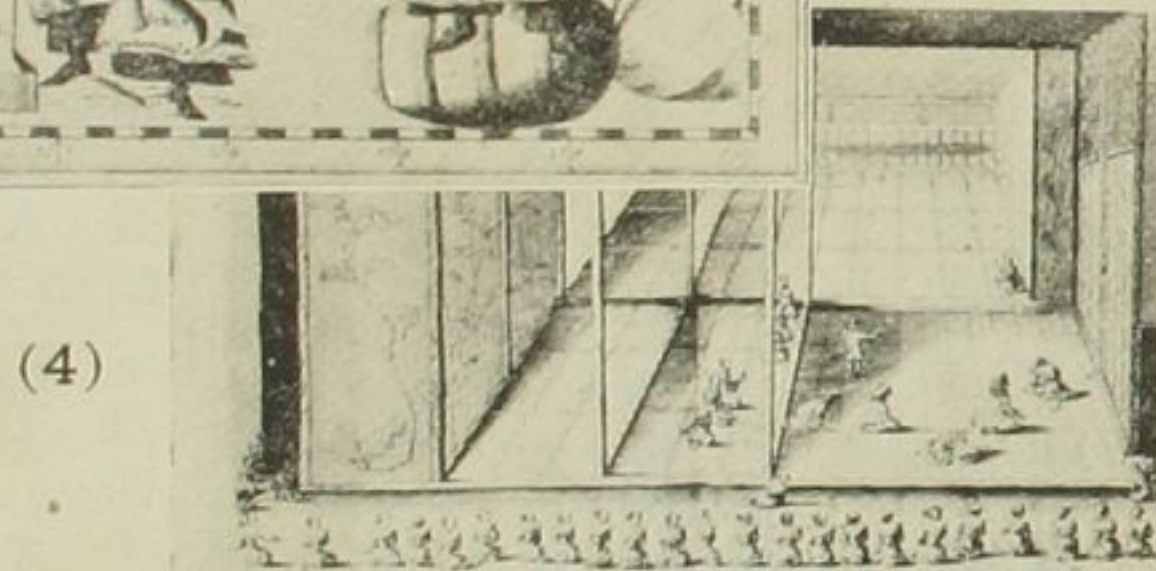
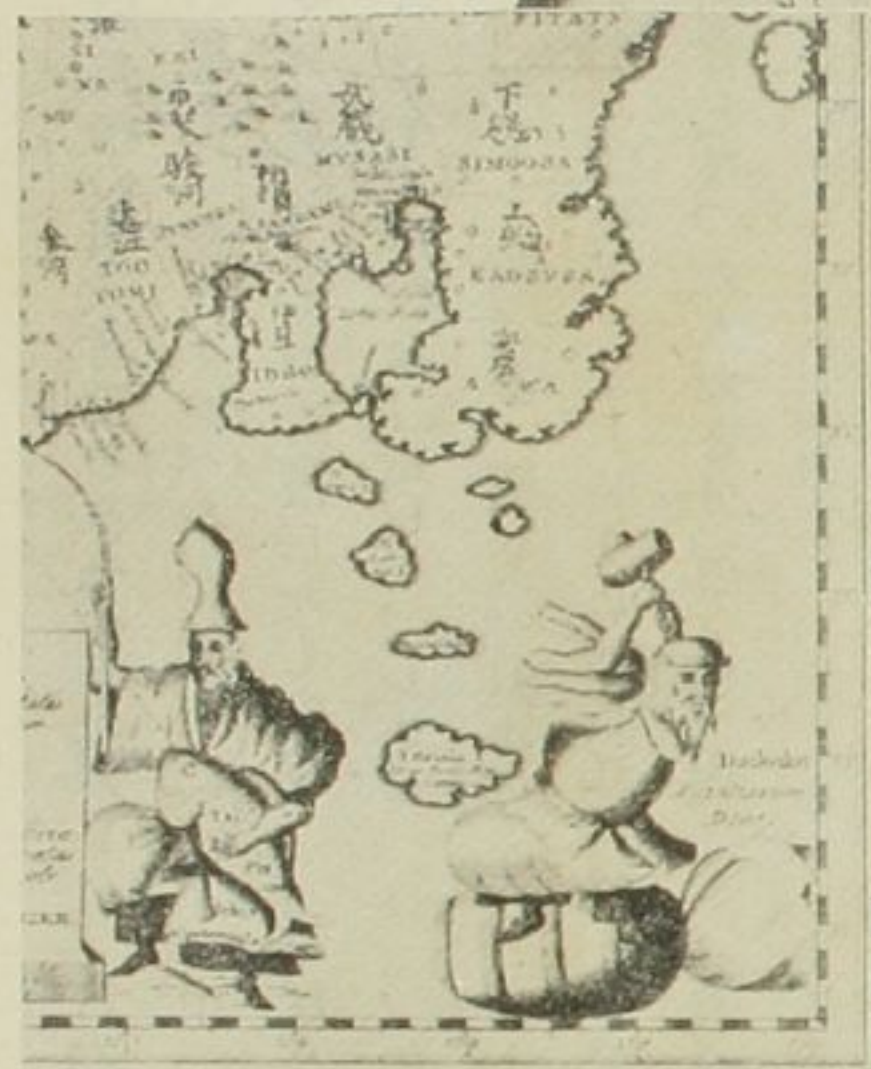
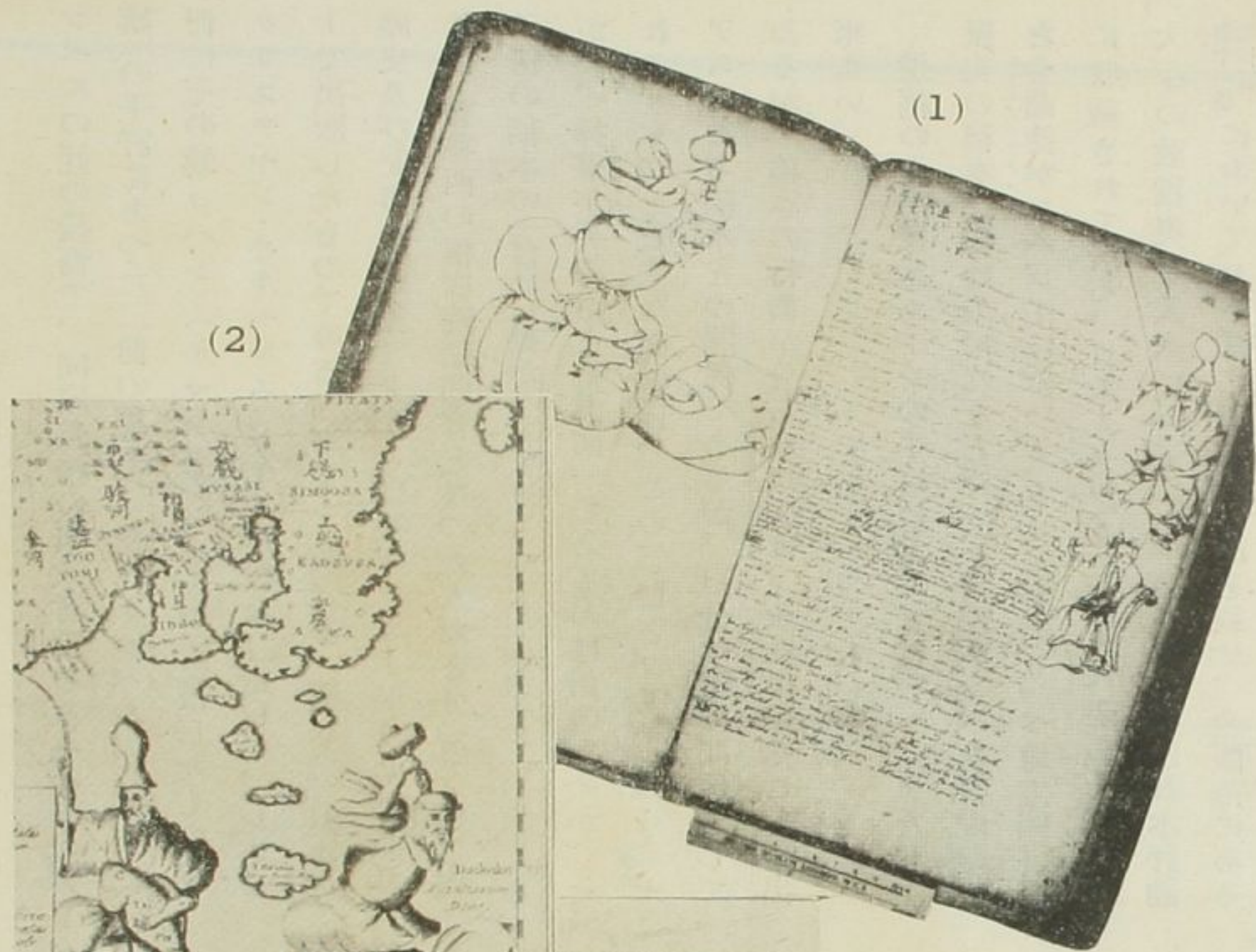
七 首都南京は 遂に陥つ 焼けた砲銃の 手をとめて につこり笑めば 隊長も 堯爾と見やる 城壁に 御稜威かがやく 朝日影 皇軍大捷 萬々歳

佳作 五篇(記念牌) 静岡縣三島町 大岡 博氏 東京市四谷區左門町 三二大澤 哲吉氏方 荻原庄作氏 仙台市北六番町七八 西山安雄氏 兵庫縣加古郡別府町 別府一〇一 山本 保氏 東京市世田谷區北澤 三ノ九〇五 西村幸雄氏







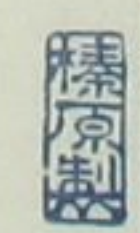


- (1) ケンベル自筆 夷、大黒及び歳徳神  
(スローン寫本三〇六一號)
- (2) 英譯日本歴史第八圖の一部
- (3) ケンベル自筆 和蘭使節將軍謁見  
(スローン寫本三〇六〇號)
- (4) 英譯日本歴史第三十二圖

*quabariant, quibata*  
*Kalen et am qo*  
 貴利師檀  
 Si cti  
 Ba  
 te  
 ri  
 n  
 J  
 ro  
 MAN  
 Be  
 za

ケンベル自筆島原記の一節  
(スローン寫本三〇六一號)

ケンベル自筆  
 幸の成友の  
 ケンベル自筆  
 書  
 標  
 原  
 製





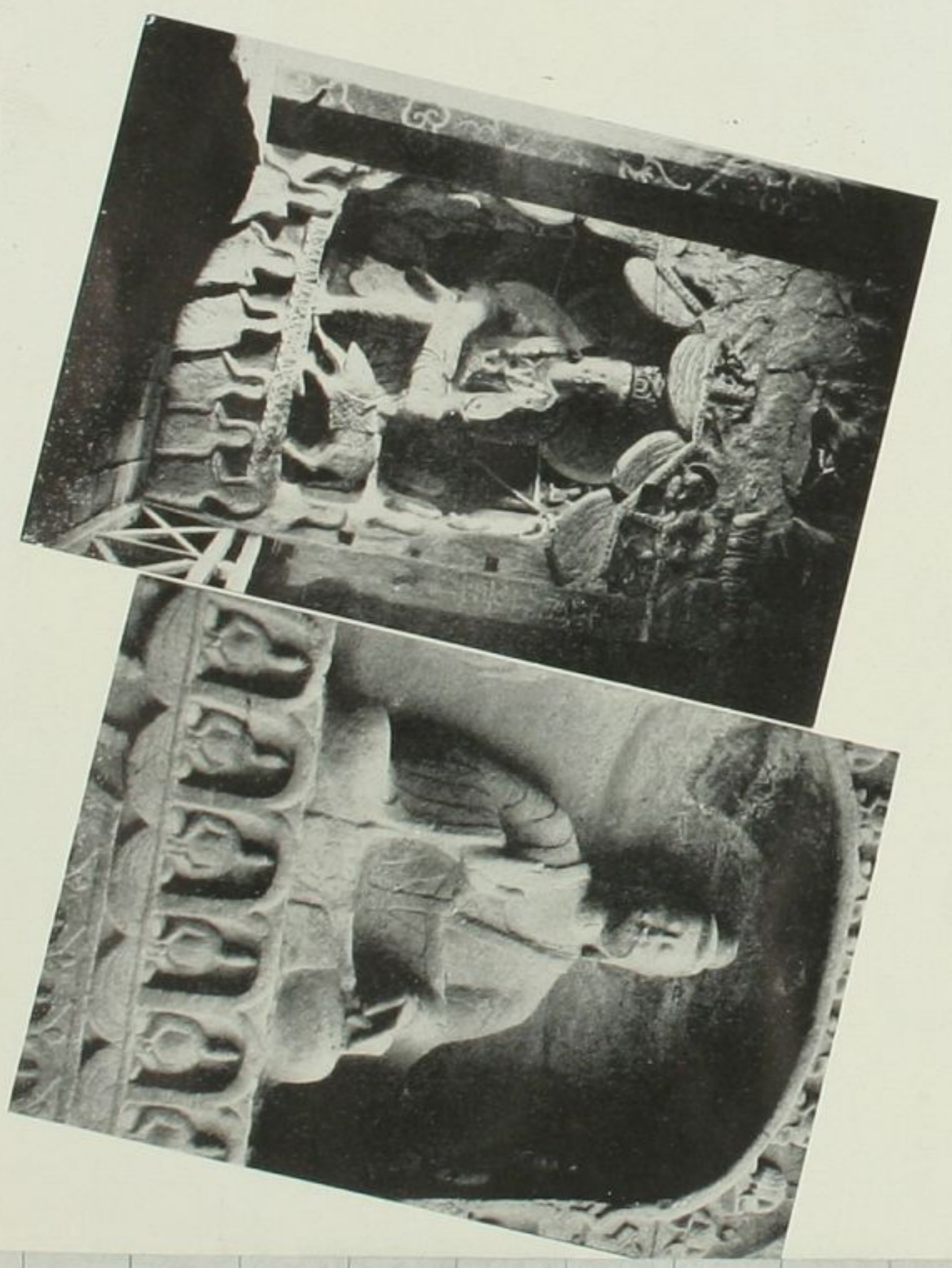
龍法、及共しに載せしむ  
漫画



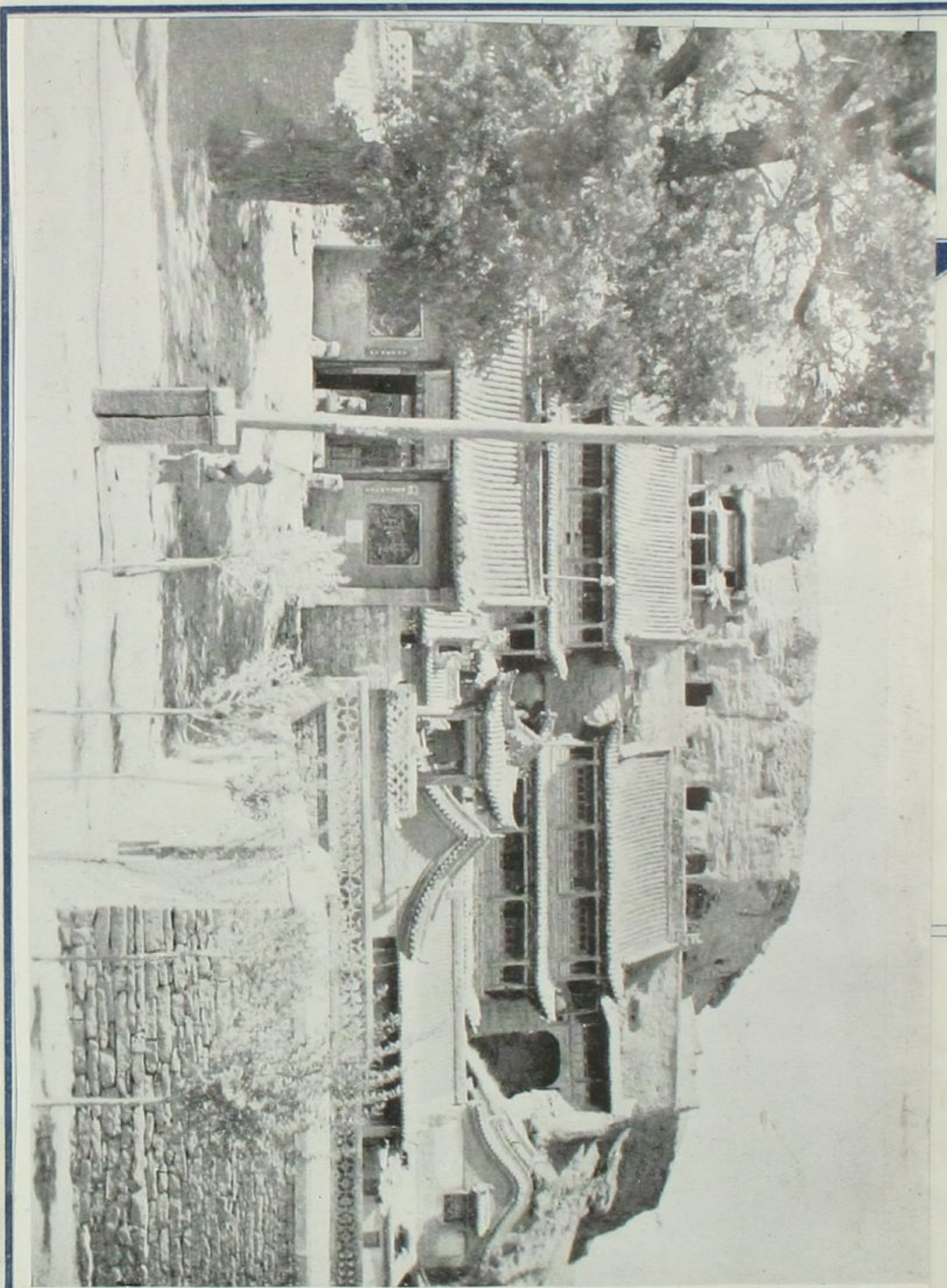
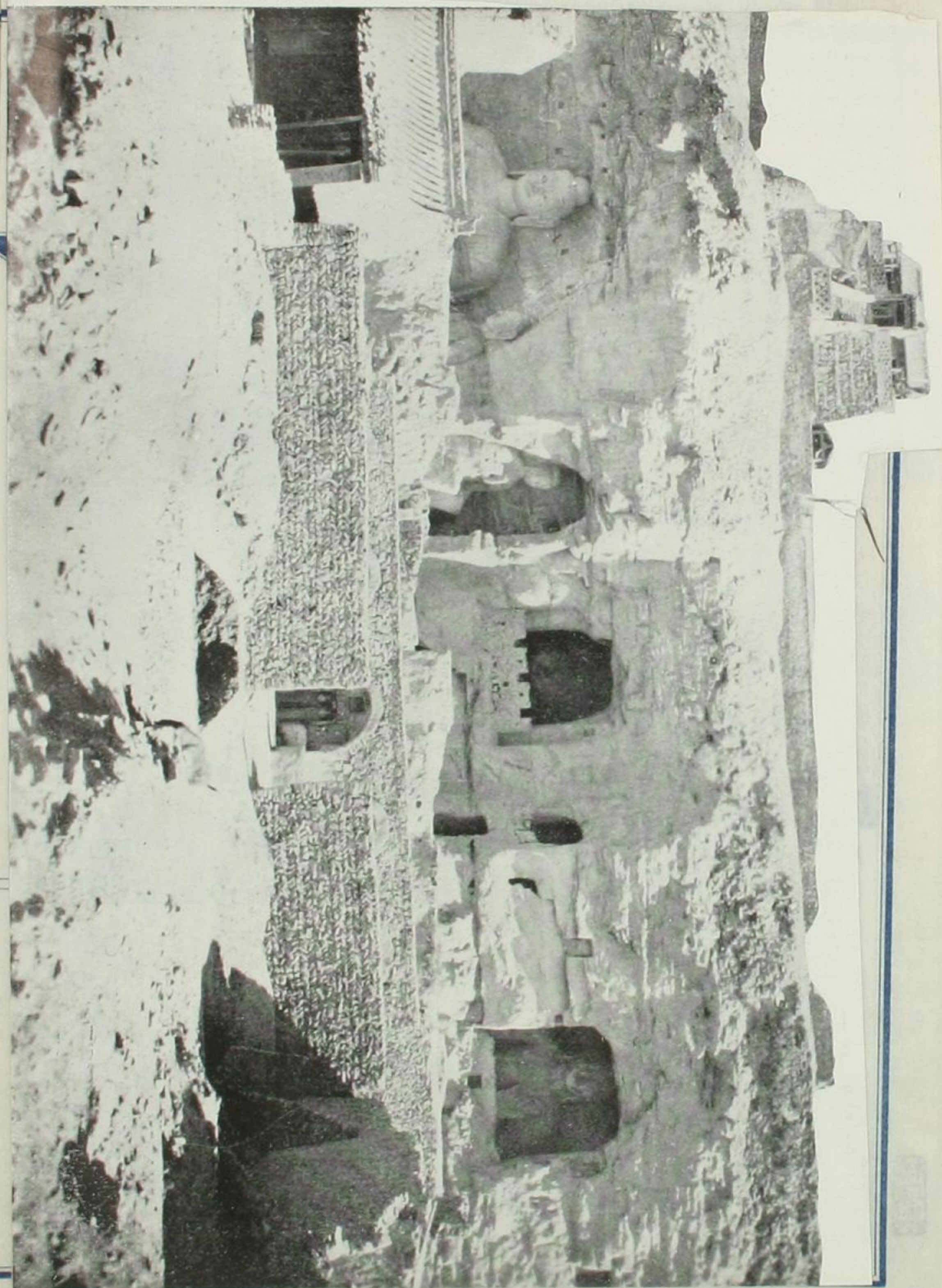
藤田

# 寺佛石の崗雲 北支名勝

北支山四省大の西五十支里の地盤に世  
界的に有名な雲崗の石佛寺がある。  
現在皇軍の管理下にあるが、これが支那軍  
の手にでもかよつたなら、どんな事になつた  
か知れたものではない。  
窟穴一杯に刻まれた彫刻や装飾は、すべて  
六朝彫刻の精華といつてもよいものだ。上







藏書







# 日章旗南北京に翻る









一握報國の提唱

このたび私は「一握報國」といふよびかたで、みなさまにしんげんにござうだんをいたすことにしました。どうぞおききくだせう。

めんだうなことはやめにしまして、あとにきりとりのお米を一つつけてありますところだけをきりついでいたゞき、それをみなさまのお家のお米びつのありますところの見やすいばしよにはつていたゞき、まる日お米をお出しになるとき、それをねんぶつをおとなへになるやうなおきもちでしづかによんでいたゞき、おじぎを一つしていたゞいたうへ、お出しになつたお米の中から一にぎりだけわきにおいてある箱かガン々々の中にとりのけていたゞきたいのです。

そしてそのお米だけは御國にささげたものとして、みなさまのを一しよにあつめていたゞいたらいかゞせう。

◎一にぎりのお米を一ヶ月ためますと、手の大小によつていくらかのちがひはありますが、大人ならばだいたいかるく一升になります。

◎一けん一升、百けん一石、千けん十石がまいにちただ一にぎりのお米をあつめるとたまります。

◎わづか百戸の小さな村でも、一戸まい日にぎりづゝのお米をとりのけますと、一ヶ年に十二石のお米が御國にささげられます。千戸だと百二十石です。一石三十圓としますと千戸でためたお米は一ヶ年に三千六百圓になります。それをもしひろめてごらんください。何と大きなことではありませんか。

◎ただにんげんといふものはヨクのでやすいものですから、できるならまい日あつめるやうにしたほうがいとおもひます。二三合とたまるともう目にあがるやうになりがちですから。

◎一日一にぎりのお米を家内中でげんしよくしたからとて、えいようにもほとんどがいがありますまい。一にぎりのお米ぐらゐはとゞ時のきのつけかたや、おひつの底をあらふ時のきのつけかたで、だいじやうぶるかぶものであります。

ああ、わづか一つかみ一にぎりのお米で何といふ大きな忠義が私にまでさせていただけることとせう。うれしいありがたいこととであります。

◎なほ、さいごに、このことはこんどの支那事變のあひだゞけにかぎらず、すゑながく日本國民のまい日のぎやう(行)としてゆきたいといふのが私のねんぐわんであります。

◎どうぞ私のこのほつくわんがぜんこくのおほぜいのかたがたのむねにうけいれられて、りつばな花をさかせ、實をむすびますやうに、神かけていのりたてまつります。



平城京址

(筆字)

平城京は添上添下野の二郡に跨り條坊を區畫し宮殿寺  
塔の私宅令を其間に布置せし其條坊の跡今に故徑を  
存せし者多く之を寺塔の位置宮殿の廢墟に考せし其大  
略を辨天竺へし古南平城京九條の條徑を置き中央條徑を  
朱雀大路と名し左右西京に分ち各四坊と爲すと云ふ然れ  
ども室異記に左京六條五坊の名を載せ群書類聚本の興福  
寺縁起に寺家一院在左京三條七坊とありし坊月邊考にも  
山階寺流記を援き左京三條七坊と曰へり七坊とは東京極  
の外を坊目なれど又同より當條の名を考せしは古來の  
屬も西京極右京極は今生駒郡伏見村西大寺菅原寺の西に  
在るべし故徑廢せし又一條北路は伏見村西大寺北垣に并  
行し東の方伏保村法華寺まで故徑存せし一條南路は法華寺  
南垣に并行し東の方東大寺手同門隈清まじし一線直道也九  
條大路は添上郡辰布村九條より生駒郡郡山町九條に向ひ

# デパート元祖開店の頃

篠田 鑛 造

## 江戸風打破と宣傳第一

三 井吳服店から三越株式会社、さてはデパートメントストアの開始を、まさしくと擬視したものは、私であるといふことを、いひ得れるやうな氣がしてならない。なぜなれば三井吳服店時代——明治三十五年の交、報知新聞社で『旅』といふ「時間表」と讀物の雑誌を、私が編輯し、西村蟹谷畫伯が挿繪を描いてくれた。其誌上へ『東京新八景』を記すにつき、私の考案に因て、「東京地方裁判所公判廷」とか、「魚河岸の朝景色」。「赤坂見附華族女學校登校」といつたものを案内風見物記ものする内へ、當時店を陳列場式に開放して、御客本位の商ひ振と、便所を綺麗にして、御手洗に御立寄りさいといふ、客寄せの新法を、銳意熱心やつてゐるのを目覓けて「三井吳服店見物」をも加へたいと思ひ、佐瀬得所翁

の次男同人記者得三君(後に書家)を煩はし、同店の幹部に申込むと、「ソレは結構で、是非店内を觀て貰ひたい」と、時日を指定され私は興味を以て出懸けると、日比翁助支配人自身を店頭へ迎へて、イの一番に、舐めて拭いたやうな便所——ソレは店(疊を敷い)へ上ると、左手の土藏の中のやうな所であつた。其一廓が西洋風のWC式で「この三井吳服店を御不淨場に使つて下されば結構なんである」と言はれた。奇抜のやうで實は巧い趣向であつた。

日比翁助氏は明治三十一年に、高橋義雄氏の下に支配人となつて、江戸風吳服店の革新を考へ、舊慣苔の如く生へた越後屋の維新興發に、魂を打込んだ時、其時の方針は宣傳第一の聲が揚つてゐた。同三十四年九月には、東京女子職業學校卒業の女店員三名が採用され、店內疊こそ敷いてあるが、何百年來の座賣を撤廢して、立賣となつたのみならず、正札附



の陳列式公開である。越後屋時代を識る前主は、唯眼瞠て驚く斗りであつた。しかし婦人客の多くは、其買ひいゝ、胸算用のスグつくのくに、歡びと楽しみとを裏んで、女性の本能を慰め得た。當時の江戸式模様は、豊泉益三氏(現重)の『越後屋より三越』に精記されてゐるのを見脱し得ない。

店頭は無論、硝子戸もなく、入口に③を紺地に白抜した太鼓のれんが張つてあり、入口から一間程の土間があつて、之れから疊敷で、店先から一間位のところに、番頭が座つて、右側に高さ八寸位の黒塗金具のがんじやうな硯箱、前には厚い大福帳を開いた上に板をのせ、前に算盤と煙草盆を置いて、お客の御来店を待つて居ります。

受持賣場の天井から紙の看板をさげ、東何番誰々と店員の名を書いてありました。其頃賣場は、東は一番から六番、西は一番から五番まであり、商品は全部倉庫にあつて、お客の求めに應じて一々商品を持運んで見せたのです。倉庫は各三階で、絹倉と木棉倉があつて、整然と棚に品別して置かれてありました。

明治三十四年四月、西館陳列場の落成の時に、第一回新柄陳列會を開催し、全國會名な染織品の藝技會を年々開くこととなりました。これが呉服物陳列會の始めてあります。

従來のしきたりは、前掲の如く、番頭座りダゴの出来る座

賣で、寒暑吹き晒しの客迎ひであつたが、陳列式腰掛販賣法と、形體を變へた。其新興氣分は、日比氏をして宣傳第一のゴツを會得せしめ、新聞廣告と雑誌案内とを、なをざりにせず。其途端の私はかく歡迎された次第であつた。私は自分のこの新八景を、趣向づけるのに懸命となつてゐた矢先が、日比氏の待つてゐましたといふカン所であつた。

#### ● 歐米百貨店視察の結晶

自動車が三井呉服店に買入れられたのは、明治三十六年で獨逸からの輸入——まだ自動車の珍らしいのが、東京市中を駛つて、商品配達に使はれてゐるのも、宣傳第一であるにちがひない所を狙ひ、私は『一見三井呉服店を識らしむるのは、友禪の呉服反物や、衣裳を外部に描いたらどんなもの』と、日比氏に獻案したら、數日ならず其自動車は友禪の繪と反物の意匠畫に塗られて『御覽下さい』と、報知新聞社へ廻送されて來たのに驚嘆した。獨りソレのみならず、『鐵道馬車の吊皮を利用して「三井呉服店へ御用の御方は、室町にて御降り下されたし」とうるしで書いたらどんなものでせう』と、獻策したら、忽ち斷行。馬車の吊皮は三井呉服店案内ビラと下つた。これにも私は、日比氏の宣傳第一の熱心に驚感







を禁じ得なかつた。

明治三十七年、日露戦争は人心を極度に昂奮せしめ、臥薪嘗膽十年の勘忍袋の緒が切れて、仁川沖旅順港の海軍大勝利が勃發する。其海軍大勝利には、三井吳服店で戦捷紀念手拭が發賣され、祝賀行列の氣勢を添へてゐた。此歳十二月二十日、日比氏は株式三越吳服店の初代専務となつて、ますく吳服店の改良進歩に熱中し、既に店内に設けられてゐた雜貨部を、漸次擴充され、デパートメントストアの一部を開始されたが、東京都人はこれに因て歐米の新販賣店舗の空氣に觸れたものである。私は横濱のレンクラホルドに觀覽の眼を喜ばした百貨店の様式を、吳服店の三越に移動した手際を最も興味ある將來に期待して、ソレを楽しむ一人であつたが、明治三十九年四月、日比専務は眞劍になつて歐米百貨店視察に赴かれ、十一月に歸朝された。

この歸朝の日に、私は頼母木桂吉氏と相携えて、品川驛から高輪の宅へ歸らるゝ途中で行違ひ、祝辭を述べて、抱負經綸はこれを三越の豪華版に待望したが、果然明治四十一年一月百萬圓の増資から、假建築ながら、店の内外すべて歐米最新式を採用し、新築祝ひの招客會等豪華の擴充、新興の氣分に、他の吳服店をして、デパートメントストアに追隨せねば

時代に取殘さるゝ慌てさを誘致したのである。

この時代の日比翁助氏の心緒は阿修羅漢の奮闘努力ソノものであつたことを疑はない。私は三越の流行會員創立に濱田四郎氏の推舉に因て、巖谷小波氏の司會の下に、最初毎月八の日に、同店の夜宴に列する一人であつたが、日比翁助氏と藤村喜七氏との吳服店經營の苦心は、其話にも聞けば、其顔にも讀まれて、デパートメントストアまで進捗する機構工作に、何の苦もなき水鳥の、表面は欣游平靜の粧ひながら、脚に閑なき苦惱は思ひやられるものを深く感得してゐた。

### ● 勞資協調の精神

誌三越の誕生は、明治四十四年の三月一日で、同胞同様の親しみを持つ武田篤塘兄が、この主筆に、濱田四郎、巖谷小波、石板思案諸兄(博文館同人)から推舉されたことは、私をますく三越に近接せしむる機縁を作て、更に又日比氏や現重役中村利器太郎氏の親愛を甘受して流行會の班に古參の顔を晒してゐた。

日比専務の三越經營方針の綱領に、「學俗協同」といふ一種の理想があつて、商利のみこれを能とせず、商利は商利とし、風潮を洗滌する一面に社會へ貢獻する。其何物かを捉へ

## 駒下駄の大隈さん

井上江

明治十九年の春、私が始めて早稻田の寄宿舎へ入つた頃、大隈さんは、京橋の日吉町に事務所があり、定めの面會日には、二頭立ての立派な駒馬車で出て行かれました。廣い額、高い鼻、無髯の偉大な横顔を、私共は、只だ馬車の窓越しに遠く眺めるのみでした。何時も和服で、鼠か水色か何か色變りの羽織を着て居られたやうに記憶して居ます。

其頃の學校と言へば、青ペンキ塗二階建の棟のみで、外に寄宿舎が、同じ青ペンキ二階建の長方形と、お局式に屈折した日本式の平屋と都合二棟、別に食堂が一同棟。大きな井戸が一つ。毎朝食事方の若者が、此の井戸から大きな柄杓でタンクへ汲み込むと、廊下の兩側に出来てた洗面所へ通ふ。裏は直ぐに茶島の山。前は目白臺まで一望の水田。

或日の午後、一人の同宿生と風呂屋の歸り、馬場下を右に學校の方へ折れやうとすると、大きな馬車が一臺、狭い道路に立ち塞がり、

馬が暴ばれでもしたのか、馭者が全力を絞つて馬を制して居る。仕方が無く、一つ上段の水荷荷の大門、古松の並木道へ出ました。見ると向ふから來る人がある。盛裝の紳士と貴婦人、馬車の主人公らしい。

『大隈さんだ。大隈さんだ』

斯う一人がさゝやきました。

大隈さんは、馬の紋付でした。袴が短くて手が出て居る。袴と足袋との間から脛が見える。表付きの駒下駄に、黒の山高帽を阿彌陀に被り、兩腕を振つて、偉大な體格が、さつ／＼と小山のやうに動いて來る風格、どうしても九州の田舎武士が抜け切れない。左に引ッ添ふて、しとやかに歩を運ぶ夫人。白襟黒紋服の丸鬚、細面の小柄ではあるが、すべてが如何にも能く調和して、誠に上品な、稀な美しい女性だと感じました。

私共は、立ち留まつて極めて鄭重に禮をしました。大隈さんは、大きな手に軽く帽子を揚げて、無造作に答禮をされました。夫人は嚴そかに目禮をして行き過ぎられました。私共は振り返つて、二人の後姿を暫ばし見送りました。

× × × × × ×

當時、早稻田の學生が大隈さんを見るのは、年に一度、夏の卒業式の時のみでした。

十九年の式場で私の目に残つて居るのは、

來賓席の筆頭に三田の福澤諭吉さんが長驅を悠然と据えて居られた事です。次が帝國大學の新總長渡邊洪基さん。其の次席に大隈さん。二十年の式場で目立つたのは、帝大の文科長外山正一さんと兆民居士中江篤介さんとが、大隈さんの左右に合並んだことです。フロツクコートの來賓席の眞中に、兆民さんは、洗晒らしの白地の浴衣にメリンスの兵兒帶をダラリと結び、「火の用心」と書いた烟草袋を烟管と一所にぶら下げ、足袋もなしに桃色鼻緒の上草履を引つけ、腕を組んで知らん顔して腰を据えて居られました。

二十一年七月二十何日、早稻田第五回の卒業式。是は私共のでした。此年の春、大隈さんは外務大臣になられたので、其の影響が自然學校へも著しく現はれました。今年卒業の優等生へは、大隈夫人の賞與があると云ふ噂が傳はつたので、是れが早くも學生を頗る昂奮させたものです。式場内外の裝飾なども、例年に比べると、目が醒めるやうに活氣ついで華々しく見えました。來賓の員數も多く、種類も多く、妻君携提の外國人も少なからず見えたやうに覺へて居ます。やがてフツクコートの大隈さんに伴はれて、綾子夫人が臨場されました。此日、夫人は洋服でした。新調の洋服でした。雪よりも白い服装の、長い裳を軽く曳ひて、シヅ／＼と設けの席へ進まれ



た時、満場の色彩は悉く此の一身に吸収されてしまつたやうに思はれました。

× × × × × × × × × ×  
二十二年二月十一日、大雪。憲法發布。大隈さんは、十四年政變の對敵黒田清隆伊藤博文等々同列に、國務大臣として署名されたわけです。

忽ち降つて湧いたのが、大隈外務大臣の條約改正案に對する、大暴風雨の如き反對運動。遂に十月十八日、霞ヶ關の爆彈一聲――

其後何十年、大隈さんと云へば隻脚、隻脚と云へば大隈さん、是が長く日本の謎となつてしまひました。今の若人の中には、事よると大隈さんと云ふ人は一本足で生まれて来たのだと、思ふて居る者が無いとも限らないでせう。  
(昭和十一年二月七日)

### ブックレビュー

村上濱吉氏監修

#### 「明治文學書目」

およそ書目や年表くらゐ研究者に有難いものも少いが、またその編纂の事業ほど困難なものも外にあまりないものだ。菊版二段組八百頁餘のこの浩瀚なる書目を前にして、まづ標を正さざるを得ない。  
しかし、おなじく書目といつても、實物に

據るところの少いものは、危険が多く、それだけに有害なこともあるが、これは、村上文庫所蔵の三萬冊に餘る明治文學文献の初版ものを土臺として、實物校合を以て絶對編纂方針としてゐるから、この種のもののうちで最も信するに足る一つである。その點、今後この書目を追抜くことは、まことに容易ならざる仕事であらう。

本書は「明治天皇に關する書」を巻頭に、明治文學に就いての研究・評論の文献を網羅した「明治文學總記書誌」、本書のほとんど根幹ともいふべき「著者別」(第一輯・第二輯)、次いで「和歌・新體詩書目」、「叢書及合集書目」、「雜誌年表」、最後に極めて綿密な「著者姓名索引」といふ組織である。加ふるに、約百箇の稀觀・重要書の圖版が風情を添へてゐる。名付けて「明治文學書目」とはいふけれど

必要な程度の他部門―政治・經濟・社會・教育等、人物でいへば、福澤諭吉・加藤弘之・杉浦重剛・島田沼南・田口鼎軒・竹越三又・福田英子等、等の著述にまで及んでゐる。考へやうによつては、純粹性に缺けるかもしれないが、所詮は文學書といふ限界が曖昧な場合が多いし、また違つた傳統の文化が胎胚したこの時代のことだから、あまり純粹に局限されるとむしろ不便なものとなるだらう。この態度は、やがて、例へば鷗外自版の『盛儀

私記』阿密哩多軍荼利法』や、鷗外作の横濱市歌・濱松市歌の一枚刷等の稀觀書類を豊富に録する一方、また廣汎に無名氏の平凡作をも見逃さぬといふことになつてゐるので、編讀者は意外な利益を得ることがあらう。

さらに、年代の方も、必ずしも明治に限らない。同一著者のものなら大正期に這入つてからのでも漏さないし、例へば芥川龍之介のやうに、全然明治期に屬さぬ者のをも収録してある。これもやはり重寶なものだが、この點に關しては、特定の作者に對する多少の好みに偏するところがなくもないやうである。嚴密な點からすれば、例へば、泡鳴・秋聲等の大正期の重要作品も入れて置いて欲しかった。いづれ増補される時を待つ。

實物校合といつても、三萬冊にも達すれば一一讀破するなどとは全く不可能なことである。そこにあるひは思はぬ見誤り(例へば、花袋の「少女の戀」を長篇とする如き)がないとも限らぬ。が、これはもはや編纂者の責任とはいへない。それらを改訂して行くことの責任は當然本書の恩澤に浴する者の側にあるはずである。

終りに、本書の編纂に就いて、監修者の下に全力を傾注した川島五三郎氏の名を記しておくべきだらう。(村上文庫發行、定價六圓)

稻垣達郎

#### ◎諸家の澁澤青淵觀

山崎紫紅

帝劇時代の社長の澁澤さんとは初興行の「頼朝」を書いた爲めに度々同席したことがある。實業界の人と違ひ温順親しむべく、また席上の會話にもイヤ味のない教訓の話を聞かされた。その態度はいつも相手の長所に尊敬の意志を持つた、謙遜の極みを盡くされてゐるやうに見える。數次の御面會にも錢莫といふものを感じさせられたことが無い。本當に金を持つてゐる人かしらと思はせられた一夕もあつた。長い間實業界に君臨の概を持つたのも無理でないと思はせられた。こゝろいふ種類の長者を現今の世の中にはいくらも欲しい。

塚越丘二郎

人生有終の美を濟すと云ふ事は頗る六ヶしい。明治以來偉大な事功を成し遂げた人は多々あるが、其の壽を終る迄社會の尊敬を受けた者は澤山ない。此の間澁澤子爵と東郷元帥が晩年益其の徳望を慕はれたのは、寔に珍らしいと言はねばならぬ。畢竟之等の人は謙虚人に下り其の功に伐らなかつたからであらうが實に普通人の及び難き風格として永く今人の銘記すべきものであらう。

篠田鏞造

澁澤青淵翁は「町人諭吉」と唄はれた福澤雪池先生より一段挺んでた町人榮一である點と、論語が唐棧の衣服に前垂掛の人格者と認められる、一代の經歷に織込まれた明治時代の民間諸計畫の一切は翁に負はざるはなしで、明治研究の老生等は翁の傳記を再三検討する義務あるものと信じてゐます。

んとするが爲め、諸科の學問と、文藝美術の碩學天才の援助に基き、三越を成功せしめんとするのが、即ち「學俗協同」主義であるとして強調し、其あらはれは、一は流行會となり、他は工藝美術の會合となつて、時好俱樂部の名稱を以て、あらゆる名家を網羅したものであつた。

私は流行會その外を識らないが、この毎月の流行會の様相が、日比專務の心的變化に隨ひ、最初は宣傳第一から、漸次學俗協同へ、合理化され、邁進向上を辿つて洗練されて行く道程を凝視してゐる私は、座賣の江戸型式を打破し、陳列式正札式に替へ、上流家庭の婦人會を揺り動かす、やがて又大衆販賣のデパートメントストアに變化され行く徑路と色彩とを、呼吸もつがせず片唾を呑んで眺めてゐたものである。唯三越のため、經營策略、終始一貫、精限り根限りを竭して、我身を蝕まれる危機を忘れ、本建築にデパートメントストアの完成を眺めず、病魔の囚となつた日比專務の一代は、デパートの創始人であると同時に、人柱の犠牲であることを尊きものと感ぜずにはゐられない。こゝに三十餘年前の昔に、感懷を走せて、現代の優越的大三越(一萬五千五百坪東(京驛の二倍大現在)の盛華を望むごとに、いつも日比專務の雄姿を髣髴たらしむるものがある。











三津備中の杜氏 尤も丹波杜氏の外にも廣島からは三津杜氏、岡山縣から備中杜氏など出稼ぎに來ては居るものゝ、兩者ともに丹波杜氏數に比すれば極少數でものゝ數にも入らぬ位、僅に其名を止めて居ると云ふまでである。

杜氏の仕事は醸造一切の責任を取つて、色香味の魂を酒に作り込むにあること前に申す通りである。所が酒は分析すれば水分何パーセント、酒精分何パーセント等々ではあるが、同じ成分にしても色香味の魂が良かつたり悪かつたりするのは不思議といへば不思議此點は近代の進歩した有機化學も理論では勇敢に片付けて仕舞つてゐるが、儲實地應用となると一向役立ぬは小癪に觸らう。酒は正に科學萬能論者の心齋を寒からしむる代物だ。之れを禮讃して云へば神祕的化學製品だ。杜氏の存在は茲に嚴として清酒醸造工業の上、開闢以來ゆるぎない所以で、其の經驗と彼れの哲學が魂となつて玉杯

の重きを爲さしめつゝあるものと云ふべき也。

杜氏の進歩 然し杜氏も昔はシメ繩の張り廻された上段の間に据ゑられ、お頭付きの二の膳を味はつて夜は絹布の夜具にクルまり、偷安姑息の夢を貪ぼつた時代から、今は目覺めて中々の篤學者もあり、科學的研究に目をそゝぎつゝあるのは、流石の此の神祕境にも近頃生存競争の世智辛さが、シミふゝと味はるゝに至つたからであらう酒醸家が彼等に對する待遇も昔程ではない。

杜氏を學問的に進歩せしめた功勞者として茲に特筆を要するのは、元醸造試験所の江田鎌次郎氏と、宇都宮三郎氏である。前者は今尚ほ杜氏の向上酒の玉成に資しつゝある。宇都宮氏は既に故人となつたが明治初年佛國に留學し、應用化學を究め歸來専心酒造の研究に没頭し、其の蘊蓄を惜氣もなく發表し、科學的に日本酒造界を指導した

明治以後に於ける日本酒質の一變は氏の功績に負ふ所少くない、醸造試験所の設置は氏に刺戟されたものと云つてよい。

#### 酒は生き物

船を大阪灣に浮べて遠く六甲の山々を望めば、翠色滴らんとする下、白砂の渚に近く、丹朱彫然たる煉瓦造り、或は巍峨たる黒瓦白壁の大建築、幾十尺の煙突がニョキノ、林立する壯觀を見受けるであらう。即ち灘の酒造藏である。

酒造藏として古きは二百有餘年を経たものもあり、今津西の宮方面は比較的古く、灘三郷（魚崎、御影、西郷の三郷）には新築が多いと云ふ事であるが、新築の酒造藏としては千石造り（一個半仕舞）を基本として建てられてある、普通は、仕込藏は奥行六間幅十七八間又は八間に十三四間である。其の前に仕込藏と後續して所謂前藏なるものが並列し、此は六間位の奥行を有し







間口は仕込蔵と同じである。  
仕込蔵と云ふのは醸造の中心設備で  
總二階建てか又は中二階造りとし、  
酒母の仕込みを行ふのであるが、酒母  
室は多くは二階に置く。前蔵と云ふの  
は先づ準備作業場とでも云ふべき所、  
階下に洗ひ場やら釜場、槽場を設け其  
の二階を麴室にする。

酒と空氣 杜氏は酒造季節中此酒造  
蔵に立て籠つて、有りと凡ゆる操作を  
監督し、酒に魂を入れる役を勤めるの  
だ。所で酒の原料は前に申したやうに  
米と水の二つで、云はゞ清酒は米の精  
分を水に解かしたものと云ひ得る。  
然し此の水と米に生氣を與へ、之を活  
動せしめて水は米を溶かし、米は水を  
分解すると云ふ作用を起さしめるもの  
が居て、初めて米と水が酒になるのだ  
その不思議な作用を起させるものは一  
生物だ。それは酵母と云ふ微生物で八  
百倍か千倍の檢微鏡下に初めて其の存  
在を認め得ると云ふ小さなものである

だから微生物の存在する空氣も酒には  
重要な原料の一つであつて、其の空氣  
の淨不淨の如何、冷熱の程度は微生物  
の種類、酒が出来るか、出来ぬとか  
又は酒質の如何は實に此の空氣と離る  
べからざる關係を持つので單に清冽清  
澄の空氣と云ふだけでは駄目だ。灘の  
空氣は幸ひと此の點に就て最も適して  
居るが、酒造蔵は此の微生物の住ふに  
最も都合なやうに構造されてあるの  
だ、杜氏は此の

蟲遣ひの役 だ、併て今此れ等の原  
料から清酒の出来る順序をカイ摘まん  
で述べよう。昔から酒造は一  
麴、二醎、三造りと稱して、麴  
は即ち酒の始まりである、麴  
を作るには麴菌の原種を少し  
使つて蒸米の表面に振り播く  
スルと、アスベルギルス、オ  
リゼーと云ふカビの一種が盛  
に活動し初め、忽ちの間に多

高級清酒



酒は撰ぶべし

良酒は：東自慢

東京 富士西商店 堀

量の糖化素(チヤスターゼ)を分泌し  
て澱粉を糖分に變化してしまふ。こう  
して出来た麴と蒸米、水の三つを一定  
量の割合に混ぜたものを桶に入れ之れ  
に或程度の温度を與へ麴の糖化作用を  
促進せしめる。此の混合物が次第に甘  
くなると、空中や水中の乳酸菌と云ふ  
一種のバクテリアが混合物の中で發育  
して不用の微菌を退治し、清酒酵母の  
お守りをする役目をつとめる。かくし  
て清酒酵母はいよゝ益々増殖して酒  
精醱酵を營む。こうして所謂酒母即ち  
醎(もと)の熟成が終る。之れを本に  
して茲に愈々清酒醸造の第三段とも云  
ふべき作り即ち醎(もろみ)の仕込み  
にかゝる。

酒

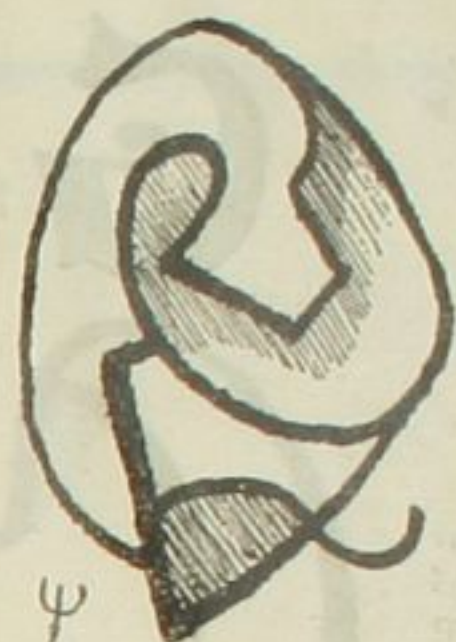
横山大觀

私が酒が強くつたのは、岡倉(天心)  
先生のお仕込みといつてもいいでせう。  
岡倉先生は非常に酒を召し上つた方です  
が、烈しい時には長夜の宴といふのをや  
りました。今はもうありませんが、下谷  
の「松源」といふ料亭で徹夜して酒を呑  
み、朝になつても雨戸をたて切つたま、  
百目蠟燭をつけ、なほ呑み續けたもの  
です。それで参つてしまふと、先生に叱  
られるのですから、途中ほどよい時分  
をみはからつて、便所へ駆け込み、喉へ  
指を突つ込んで、呑んだ酒を戻してしま  
つては、また呑み出したりしました。そ  
んなことをやつたので酒が強くつてき  
たのでせう。菱田君も下村(觀山)君も一  
緒に酒を呑んだ仲間にもうみんなななく  
なつてしまいました。

酒を本當に呑み初めたのは廿六の歳で  
した。その年に私は學校を卒業したので  
すが、それまではとくも酒の呑めるやう  
な境遇ではなかつたのです。  
元來、私は美術家になる積りはなかつ  
たので、中學校を卒業すると大學豫備門  
(現在の高等學校)へ入學する積りでした  
當時は大學豫備門のほかは英語専修科と  
いふものがあつて、こゝへ入ると半年で

大學豫備門の四級に編入されるので、年  
限も非常に短縮されるといふわけ、従つ  
て志望者も大學豫備門より多かつたので  
す。私はまづ英語専修科を受けましたが  
その合格者氏名を伏せてあるので(後で  
合格してゐたのを知つたのです)續いて  
大學豫備門の試験を受けました。番町小  
學校を卒業して私と中學校で同級の高田  
君といふ人がこれもやはり専修科と豫備  
門と兩方を受けましたが、その高田君の  
知り合ひで、非常に高田君と仲が悪い  
パイダー(蜘蛛)といふのが試験官にあ  
て、高田君が二股かけて受験してゐるの  
を發見し、それは怪しからんといつて、  
兩方受験したもの全部十六名は退場を命  
ぜられてしまいました。私は馬鹿らしく  
なつてそれきり試験を受けるのをやめて  
しまつたのです。  
それが十九の歳のことで、それから三  
年後、初めて美術學校といふものができ  
るから入學してみないかとすゝめられ、  
官立ではあるし、父も別に反對しないだ  
らうと思つて入つてしまひました。しか  
しそのころで生活できようなど、は夢  
にも思つてはゐませんでした。  
美術學校へ入つてから、私は學費と筆





## 偽作展覧會

笠間 杲雄

ペルシアの古書はその文字の手蹟と、中に挿まれた密畫との爲めに珍重される。我々に取つては、ペルシア密畫が特にタメルランの侵入以來、著しく支那の繪風を取り入れたことに興味がある。この殺伐な英雄は漂泊生活を愛したにも拘らず、支那文明を尊崇した。蒙古とアラビア人との二回の征服で、支那文化は西域以東に追ひ返されながら、當時のイランでは、その固有の文化に支那趣味の多くを混へたまゝ發達して行つた。ティムル朝の宮廷で何よりも尊ばれたものは支那の繪畫であつた。

イランに居た間に私は好むまゝに密畫を見て歩いた。今では歐米などの博物館に在るもの以外に、本國にはいゝものゝ残りの少ないこと驚くばかりである。殊にフェルドウシーのシャハナーメ(列王紀)やニザーの英雄詩傳には、相

當古い手寫の書は稀に手には入るが、密畫は全部引き抜かれてゐるか、質の畫が入れてあつた。密畫だけを切り取つて賣つたのである。甚しいのは事情に通ぜぬ外國人に高く賣る爲めに、古書の數頁の文字の上に、新しい色彩の密畫を描いて、文字を塗りつぶしたのすら澤山ある。ペルシアの手寫本には必ず前頁の最後の字の下に、次の頁の最初の字を見出のやうに繰返してあるから、偽作の密畫は、文章が讀めなくとも、文字の形を見別けるものには、すぐ看破出来るのである。尤も密畫の眞偽は少し繪の味の解るものには直ちに鑑別出来るのである。

フランスでさる富豪のペルシア古書密畫のコレクションを見たが、繪畫の方は過半は近頃の偽作であつた。尤も十八世紀以後繪風の墮落したイランでは、却て近頃の偽作者

に相當の才分を持つてゐるのがある。従て眞偽に拘らず、自分の氣に入つたものを買ふのが、眞の藝術を愛するものであらう。質と聞いて急に厭になるなど、言ふのは、所謂成金趣味であらう。

文書の偽作と云ふものは多くは政治的の意味のもので、所謂シオンのブルトコルヤ、ジノヴィエフの怪文書などは世界の政局を動かした。先頃物故したチエコ再建の傑傑マサリック博士の名を爲したのは、五十餘年前、ブラーグ大學の哲學教授時代に、ボヘミア王國創業の傳説を謳つた古詩が、後世の偽作たることを暴露して學問的に立證したのであつた。その爲めに祖國復活の裏切者として、同志の誹謗の的と爲つた。然かも民族の誇りが虚偽の上に築かれるべきでないといふ彼の信念は、祖國を最後の勝利に導いた。

繪畫の電氣復製術が著しい發達を遂げたので、歐米の客間にかゝつてゐる廣重などは、近頃では復製の方が多くなつた。我國でも畫家自身が眞偽を鑑定出来なくなつた程、立派なものが出る。かうなると高い價を拂つて名家の作品を買ふのは考へものだ。養殖眞珠が世界中の天然眞珠の値を下げさせたと同じ事が起らぬものもあるまい。

書畫の質を専門にしてゐる作家にも、固有の天分の相當に恵まれてゐるのがある。歐米では偽作畫家は多くは矢張り早く金になる爲めに已むを得ずやつてゐるのだ。

近頃面白いのは、ヴィエナの美術館長ブランシック博士の發案で、古來一時は眞品と思はれたことのある名偽作百點の展覧會を開くことである。これは歴史的にも藝術的にも興味のある企で、英國でも其蒐集をヴィエナから借りて公開し、進んで常設の一展覧會を設ける案すらある。

右の名作と誤認された偽物を見ると、世界の博物館や美術館で、曾て一たびも偽作を誤つて眞品と認めたことのないものは一つもない。専門家の鑑定でも百パーセントは信ぜられないことを示す。従て鑑定違ひなどは大して耻でないといふことになる。

大英博物館の古代石器及陶磁部で二年前まで光つてゐたセルヴェトリ・サルコファーグスは、一八七三年にエトルスカのものとして買入れたのだが、十九世紀の偽作と知れて今日では影を潜めた。同じくシーザーの塑像の古ローマ最高の藝術と思はれてゐたのも、十八世紀の作と知れた。フランスの誇であるルーヴル美術館も、一と頃第二世紀のギリシア金工の名作、所謂サイタフェルネスの冠ティアアラと銘



を打つたものを、十萬圓ほど出して買ひ込んだことがあつた。これはオデッサに住む老露人の偽作で、此の老人が出て来て自ら證明したので、流石に自信の強いフランスの鑑定家も肯を脱いだ。

當時此の事件が喧傳されて、有名な曲馬團の隊長バーナムの耳に入つた。彼はフランス政府に對してこの偽作の金冠を買ひたいと申出た。ルーヴル美術館の専門家が購着された旨の箱書を附けて呉れるなら、ルーヴルの拂つた買値のまゝで引受けやうとの條件であつた。ルーヴルでは素氣なく斷つてしまつたので、惜しいことには此のサーカス王の金冠をフアンの小供達は見ずにはしまつたのである。

ルーヴルが購された、もう一つの有名な事件は、ルネッサンス風の人頭のテラ・コッタで數萬金を投じたものであつた。これは今でも存命してゐるイタリア人のバステアニーニの偽作である。世界の博物館には此の男の偽作は數百にも上る程陳列されてゐる。ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で人の眼を牽くドナテロ作のセント・シンシアの像なども、同一人の手に爲る贋物だとの説もある。

大戦中にベルリンの博物館で數萬金を投じて手に入れたギリシア古女神像などは、此の種の古代美術品の中でも秀逸と稱へられてゐるが、後世の偽作と評されてゐる。近ごろルーヴルのテル・エル・アマルナの部に並べてある木彫の人頭も、古代エジプト工藝の逸品として、巨額を費したものであるが、名あるエジプト學者の考證では、その陳列棚のガラス箱と同年代即ち昨今のものだとのこと、如何なる國家でも購されるときは仕方が無いものらしい。

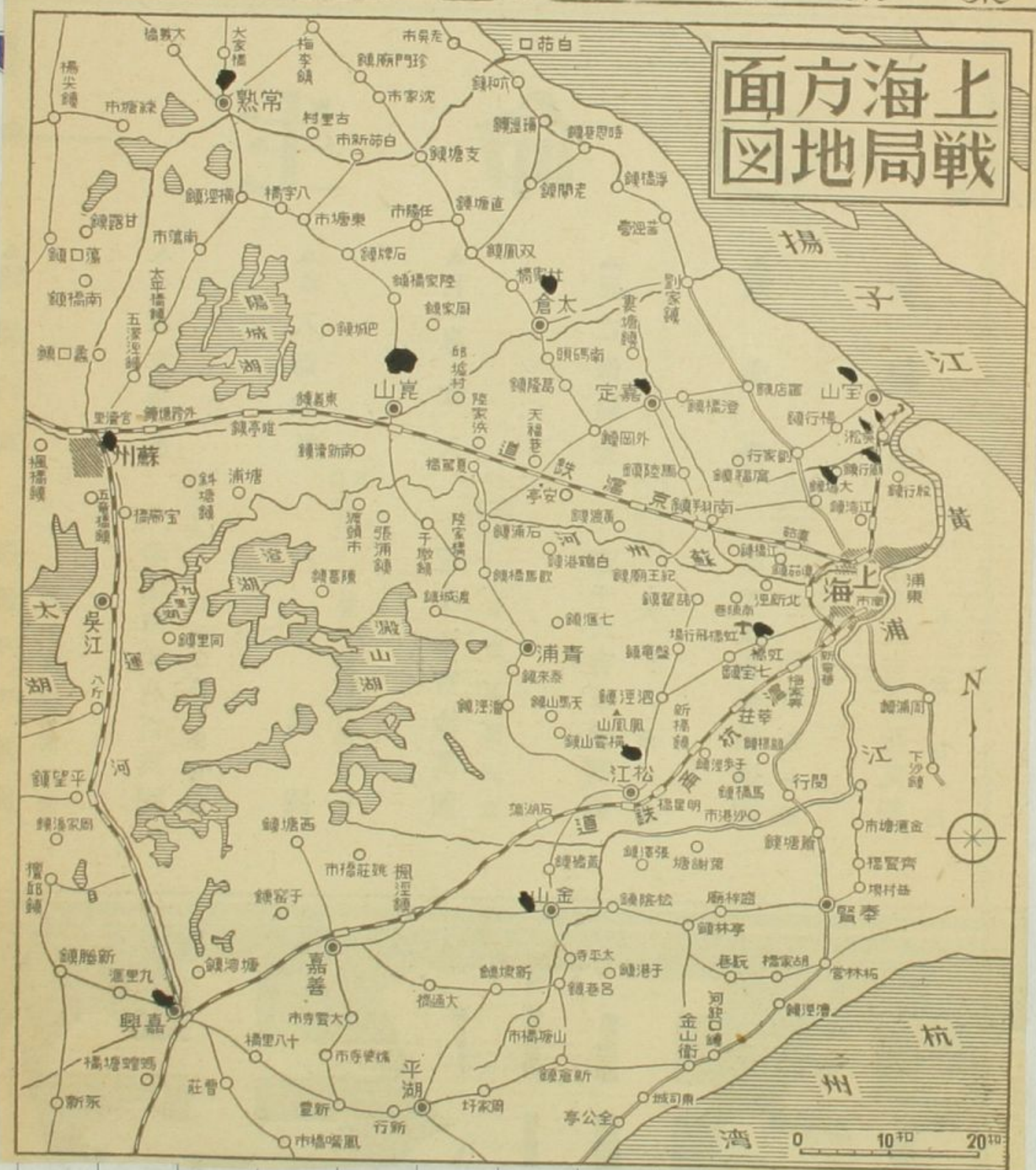
繪畫の偽作に至つては、歐米も東洋も、天が下には虚偽のない國は無い。中にもロダン、ヴァン・ゴッホ、ミレーなどは度々詐偽事件で裁判にさへなつてゐる。イギリスのエデンバラ美術館にもミレーの偽作が麗々しく陳べてあつた。

こんな風な専門家や考古家さへ購された程度の偽作美術品の展覽會が開かれたら、興味もあり有益でもあるだらう。日本でも催しては如何だらうと、或美術通に話したら、日本の富豪の持つてゐる古美術品などを、そのまゝ陳列したら大體この展覽會の實を擧げることになると答へて呉れた。









十一月廿日發表

# 敵死傷七十萬 我軍戰死一萬六千

陸軍省發表 (廿日午後三時半) 事變發生以來本日起到明  
せる敵我損害概數左の如し

察哈爾方面		北支方面		上海方面	
我戰死	支那	我戰死	支那	我戰死	支那
○山西方面(未調査)	遺棄死體 二二、五〇〇	遺棄死體 四一、九七〇	遺棄死體 一六四、三九〇	遺棄死體 一〇、二三四	遺棄死體 三〇、〇〇〇
	傷者 九〇、〇〇〇	傷者 一〇、〇〇〇	傷者 七、三〇〇	傷者 一、〇〇〇	傷者 一、〇〇〇
	俘虜 一、〇〇〇	俘虜 一、〇〇〇	俘虜 一、〇〇〇	俘虜 一、〇〇〇	俘虜 一、〇〇〇
	小銃 一〇〇	小銃 一〇〇	小銃 一〇〇	小銃 一〇〇	小銃 一〇〇
	輕機銃 一〇	輕機銃 一〇	輕機銃 一〇	輕機銃 一〇	輕機銃 一〇
	重機銃 一	重機銃 一	重機銃 一	重機銃 一	重機銃 一
	手榴彈 一〇〇	手榴彈 一〇〇	手榴彈 一〇〇	手榴彈 一〇〇	手榴彈 一〇〇
	其他 一〇〇	其他 一〇〇	其他 一〇〇	其他 一〇〇	其他 一〇〇

陸軍省



蜀山人と其妻

鶴田勢湖

亡妻を哭する詩六首

小石川原町の日蓮宗本念寺（白山神社の南位）に、大田南畝一族の墓がある。南畝墓の史蹟標識が門内右手に一區劃された山木北山墓域の前に、皮肉にも建てられてあるか、北山の如き名家墓碑を、なぜ史蹟に指定しないのかと、私は不思議におもつてゐる。

庫裡後方にある墓域の中央、南北に並列された大田氏累世の墓碑のうち、南端に、貞徳院妙持日頂大姉と彫られた小墓碑がある。側面に、大田覃故妻富原氏墓とあつて、他面に南畝が、亡妻を哭する賦詩六首が彫られてある。南畝のあゝした豪放酒脱の半面には、斷腸の詩情か、苔深い墓石に物語つてゐる。一寸思出して書いてみた。これは南畝の四十五歳の寛政六年の春の作である。

(其一) 萬點桃花雨。肅肅袖不乾。更添雙涕淚。併徹鐵心肝。  
(其二) 梅諸汝所著。春服汝所縫。衣食皆由汝。一朝無

我供。

(其三) 長女嫁鄰里。男兒未識昏。平生何所愛。唯女兒孫。(結句一字脫記カ後日加入ノコト)

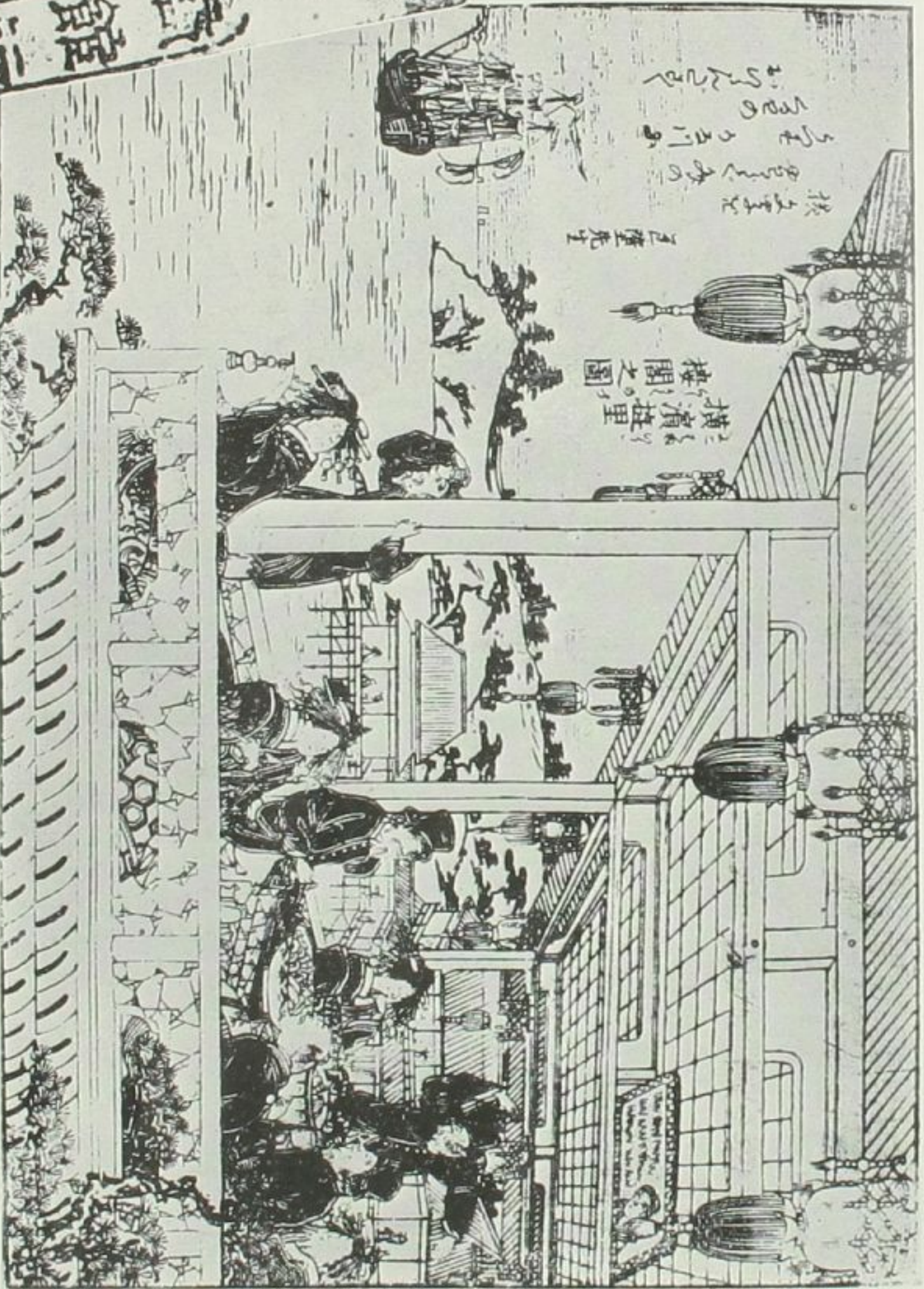
(其四) 昔余詩酒興。私貯一枝花。愛情能防護。幾微絶齒牙。

(其五) 卅歲飽糟糠。無時不下堂。鬼燵照遺桂。猶訝臥靈牀。

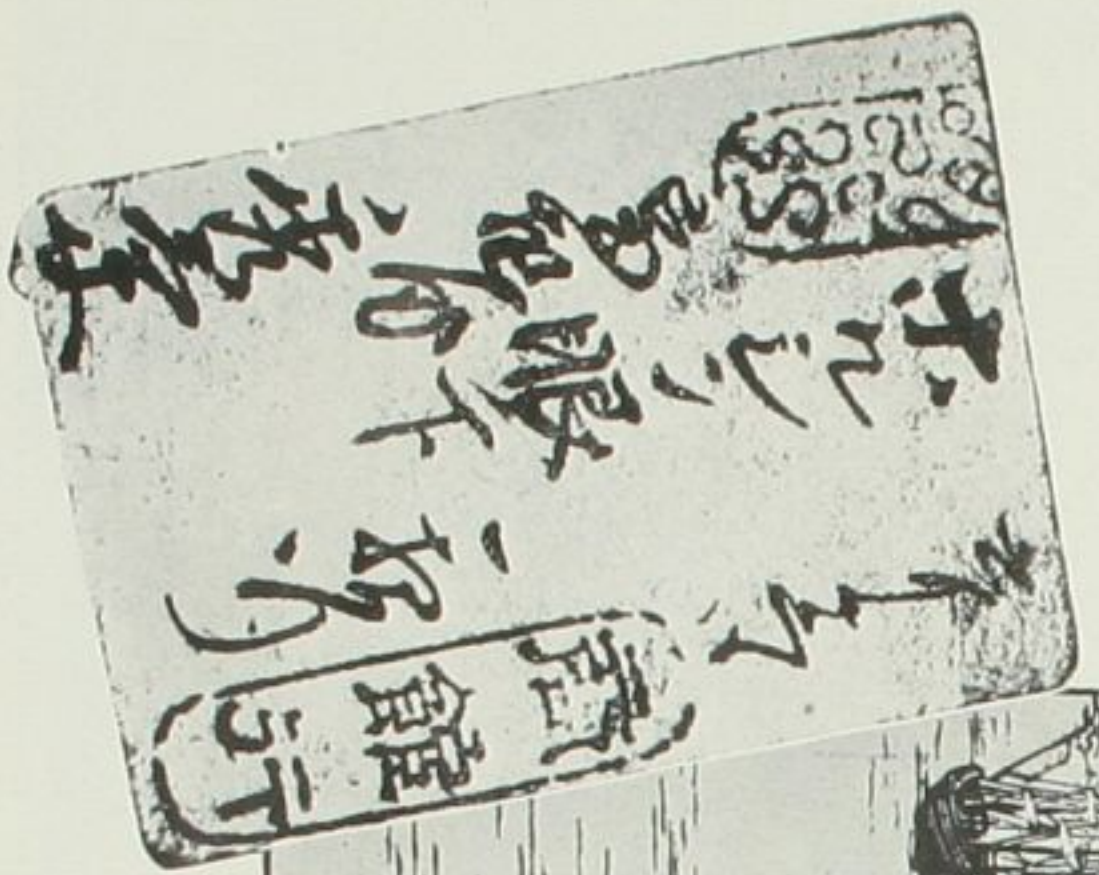
(其六) 去日頻過七。殘春已盡三。自今頭上雪。歲歲益參々。

以上に付、永井荷風君は、自己の境遇に類似せる此南畝の境遇に深く同情し、之を其著中に書き、綿々の情を寄せてをる。南畝の妻をしのぶ斯の話、少くとも文壇の佳話でなければならぬ。然るに惜しい事に、南畝自らの墓碑には已に龜裂が生じてをる。(此項胡東補記)

商旅行娼妓鑑札  
明治二年横濱吉原遊廓實地視察  
娼妓秀菊がホルミン、メンソリンの屋敷へ一夜行として出張した時の紙鑑札



(のもの時當現出廓遊町崎港) 圖之閉樓里遊濱濱





# 年賀郵便を全廢

## 官吏率先國民に協力要望

### 郵便局特別扱廢止か

閣議決定

政府は時局に鑑み、明年十三年の年賀郵便は全廢せしめる意圖の下に、九日の閣議で左の如く申し合せた。

(一) 全國の官吏は時局に鑑み(主として紙の節約)のため年賀郵便を全廢することに決定、各行政長官からそれを通達する(二) 一般國民に對しては官吏の年賀郵便全廢の政府の方針に則り協力を求む

(三) 従つて年末慣例の全國各郵便局の年賀郵便特別取扱を止めるとになつたが、永井遞相が事務當局と協議の上、最後決定をなす

遞信當局談 年賀郵便について官吏の全廢に伴ひ一般國民にもその趣旨を徹底せしめるとのことであるが一般國民の分も全廢しない限り年賀郵便の特別取扱を廢止することは困難であると思ふ、だからこれは遞信大臣からよく事情を聞いてから決める



# 年賀郵便取扱ひ中止

## どう影響するか

### 關係方面の意見に聽く

九日の閣議で、郵政所報の如く時局に鑑み、昭和十三年の官吏の年賀郵便を廢止すること、一、郵便局の年賀郵便特別取扱ひの中止等が決定されたが、これは明治卅九年十二月初めて年賀郵便の特別取扱が

行はれてから三回目の取扱中止である

遞信 省郵務局長の調査によると大震災の時は特別取扱は中止されたもの、事實上普通郵便として取扱はれた年賀状は二億七

百五十四萬枚に上つてをり大した減少を見なかつた、今回は主として紙の節約が主眼となつてゐるといはれ政府もまた國民の協力を強請してゐるので、昨年度八億四千八百七十七萬枚に上つた年賀郵便も影響

をひそめるものとみられて、右に、つき遞信省が年賀郵便が廢止になると二月廿日から組織的に懸限つて行つたあの忙しさが中止されるわけでは



細二海士山家之...  
贈(一)并之...  
贈(二)并之...  
見財(三)并之...  
身(四)并之...  
委(五)并之...  
回(六)并之...



左の如く申し合せた

(一) 全國の官吏は時局に鑑み(主として紙の節約)のため年賀郵便を全廢することに決定、各行政長官からそれへ傳達する(二) 一般國民に對しては官吏の年賀郵便全廢の政府の方針に則り協力を求む

(三) 従つて各未仕の全國郵便局長の年賀郵便特別取扱を止めるとなつたが、永井遞相が事務當局と協議の上最後決定をなす

遞信當局談 年賀郵便について官吏の全廢に伴ひ一般國民にもその趣旨を徹底せしめるとのことであるが一般國民の分も全廢しない限り年賀郵便の特別取扱を廢止することは困難であると思ふ、だからこれは遞信大臣からよく事情を聞いてから決める

# 年賀郵便取扱ひ中止

## どう影響するか

### 關係方面の意見に聽く

九日の閣議で別面所載の如く時局に鑑み昭和十三年度の官吏の年賀郵便を廢止すること、一郵便局長の年賀郵便特別取扱ひの中止等が決定されたがこれは明治廿九年十二月初めて年賀郵便の特別取扱ひ行はれてから三回目の取扱ひ中止である

**遞信** 省郵務局長の調査によると大震災の時は特別取扱ひ中止されたもの、事實上普通郵便として取扱はれた年賀郵便は二百七

百五十四萬枚に上つてをり大した減少を見なかつた、今回は主として紙の節約が主眼となつてるといふはれ政府もまた國民の協力を強調してゐるので昨年度八億四千八百七十七萬余に上つた年賀郵便も

をひそめるものとみられてゐる

**右に** つき遞信省郵務局長は語る

年賀郵便が廢止になると毎年十二月廿日から組織的に短期間を限つて行つたあの忙しい特別取扱ひが中止されるわけですが事實

### 郵便屋さん大喜び

上の關係としては普通郵便として出す人もありうるわけですが、そのために年賀郵便が年内にいつたり正月過ぎになつて著くといふ結果になり勝ちですが、しかしこのために従来一千二百萬圓の年賀郵便収入が激減することとは明瞭です

約七千萬枚印刷してしまひました、特に郵便中なので國威宣揚とはかりポスターも日の丸入りで二萬五千も印刷しました、切手代が騰り、紙も高くなつてゐるので相當打撃は覺悟してゐましたが實際弱りました

市内某印刷店では語る

私もなど年末の収入で暮してゐるやうなもので、かき入れどきにこの話や今年の暮が越せるかどうやら、まつたく困つたことです

### 名刺店大弱り

日本橋區馬喰町の某名刺店は語る

弱りましたね、今年紙價が上つてゐるので特に早めに用意して在庫も日の丸等を多く用ひ、

どんな對策をとるべきかは今後の問題です、従来年賀郵便についての虚體廢止の意見が高まつてゐたやうですが、實際うまく行つてから才官吏は國民の極く一部ですらどう影響しますか紙の節約といふ理由からは別問題ですが年々一割近く漸増する年賀郵便は昨年東京市内で一億五千萬に上り、これだけでも九百八十五萬に上り、これについての臨時雇は本局で千五百余名といふ多額です、本年の年賀郵便は一般には戦時とか戦線にある皇軍將兵に年賀郵便なりと送つてせめてもお正月気分を味はせたいといふ意味から激増するのではないかと思つてゐました、しかし別法を考へ年末の挨拶等が増加して来るかとも思へます

**某代議士の談** 例年議會開會前に申合せをして費は出さぬことになつてゐるが、さうきまれば今年も相當徹底するだらう

東京中央郵便局  
長平塚運吉氏談





小田原城の風景

# 一握報國運動

## 相馬御風氏が提唱

### 貯蓄心養成の一助に

戦後の精神運動に渾身の努力を傾け、作戦報國に講究し、或は各方面から依頼の原稿執筆、支那事變勃發以來文字通り寧ろなき糸魚川町相馬御風氏は十數年來抱懐してゐた「一握報國」運動を好機至れりと今回公表その實行運に乗り出し、二政府關係では學友、通信大臣永井柳太郎氏内閣書記官長風見章氏その他を介し各方面への紹介を依頼する一方、産組中央會大日本報青年團その他の各種團體へ呼びかけ本縣は知事各部長へ北郷方を乞ひ一見小事の如くであるが此の運動こそ單なる經濟的貯蓄運動ではなく實に興國の一大運動であり毎日唱ふる三握報國語による精神的一大國民運動たらしめんとする意圖で「一握報國」運動の提唱を各方面、此場を馬國策的運動にまで進展するものと期待されてゐる、なほ一握報國の運動とは毎日一にぎりのお米を一ヶ月ためてこれを貯蓄し天皇陛下、天地國土、全國民おたがひの御恩に報じず資金とするにあり大人なら一にぎりが一ヶ月一升になるので千戸にためた米は一年三千六百圓になると言ふにあり長文の印刷物を配布した



愛國郵便切手に就て

護れ大空切手報國



逓信省



### 本邦最初の愛國郵便切手

六月一日から全國各郵便局所・切手賣捌所で、我國に於て初めて發行せられた愛國切手及び葉書が發賣されてゐます。この切手は民間航空の發達助成に充てるため一枚に付二錢又は三錢の寄附金が附いてゐるのであります。例へば賣價六錢の切手は、その内四錢は一般郵便料、二錢は寄附金といふことになつてゐます。今度發行された切手の種類は

- 二錢 切手 (寄附金二錢・賣價四錢) 紅色
- 三錢 切手 (寄附金二錢・賣價五錢) 紫色
- 四錢 切手 (寄附金二錢・賣價六錢) 綠色
- 二錢 葉書 (寄附金三錢・賣價五錢) 藍色

でありまして、切手は三種とも、山嶽の上空を飛ぶダグラス機を描いたグラビア印刷、葉書は料額印面に金鶏を表はし、表面下半に富士を描いた彫刻凹版印刷で、何れも普通のものより大型の美しいものであります。

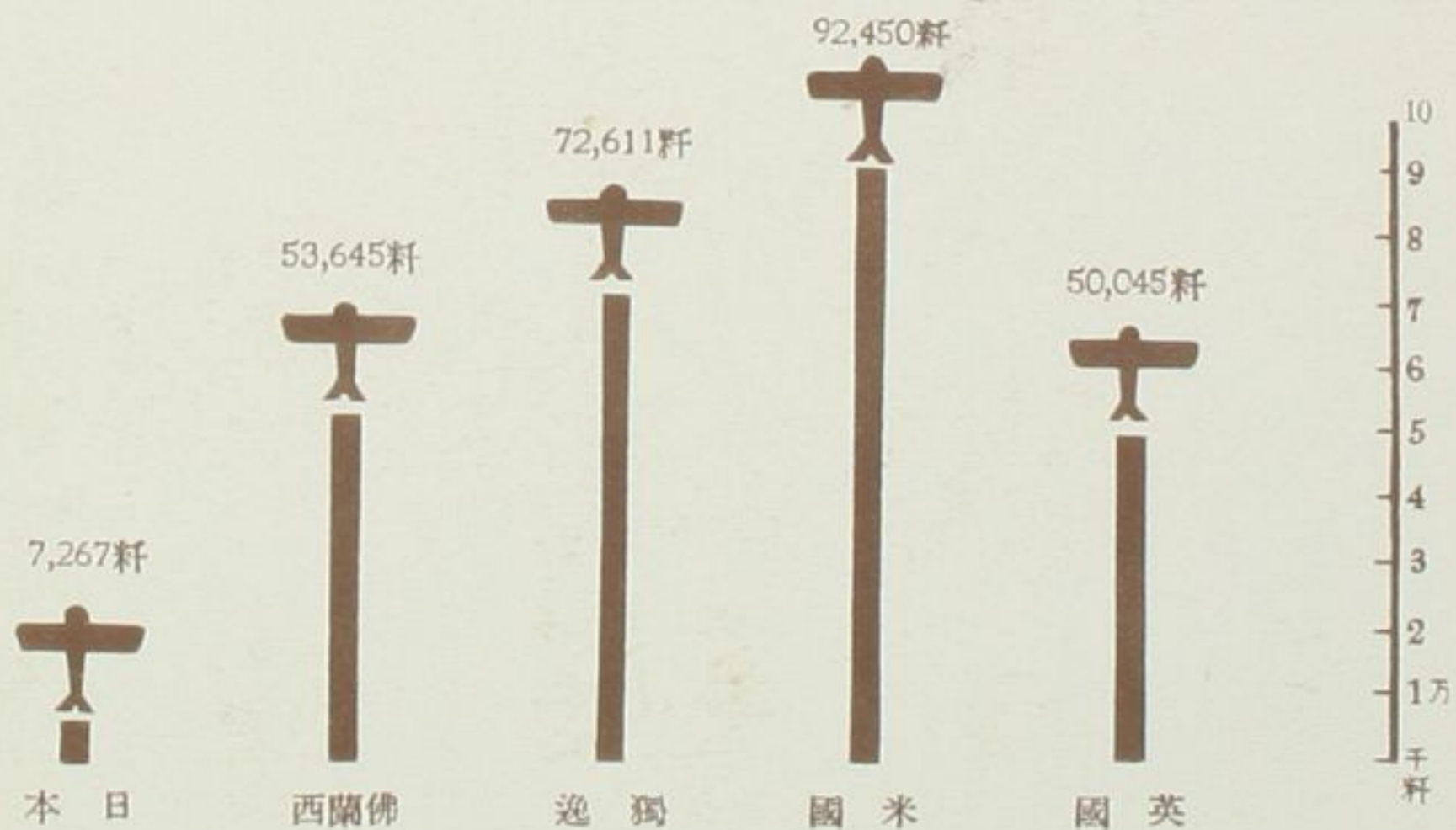
此種の寄附金郵便切手を發行することは、外國に於ては早くから行はれてゐたのでありまして、その起源は詳かではありませんが、西曆一八九七年(明治三十年) ヴィクトリア女王即位五十年記念として、現在英領オーストラリア聯邦の州となつてゐるヴィクトリア及びニュー・サウス・ウェルスに於て一片及び二片半の二種が發行されました。これらの切手は夫々料金額の十一倍の寄附金附、即ち一志及び二志半で發賣し、その寄附金はヴィクトリアに於ては慈善團體基金に、ニュー・サウス・ウェルスに於ては結核療養所の基金に充てられました。その後追々發行せられて今日のやうに頻繁になつたのは歐洲大戰後で、主として戰禍による罹災者の救恤金募集の爲であつた様であります。斯く初めは戰爭の負傷者、戦死者の遺族救濟等を目的として發行したのでありますが、その範圍は漸次擴大せられて、傷病者、貧困者・兒童・老弱者・失業者の救濟・結核豫防・病院記念碑の建造等社會事業の各方面に涉つて參りました。殊に最近に於ては國際オリンピック競技大會費・國債の減債基金等廣範圍に及びつゝあります。その發行は大體一時的のものが多く様々ありますが、瑞西の様に毎年繼續して發行し、その賣捌期間の如きも六ヶ月に亘つてゐるものもあります。

### 愛國郵便切手と航空事業の發達

御承知の通り我國現下の情勢は未曾有の非常時局に際會してゐまして、國防上・經濟上重大の使命を有する民間航空事業の發達に待つこと極めて大なるものがあります。然るに我國の現状は、飛行場等の設備を初め飛行機の製作・乗員の養成・航空輸送事業等外國に比し多大の遜色があります。しかのみならず我國は、既に世界制空に汲々たる歐米諸國の航空路により包圍せられてゐる状態で、甚だ立ち遅れの觀があります。いまにして速かに適當の方策を講じ、國家百年の大計を誤らない様にせねばなりません。政府に於ては斯業の使命と現下の時局とに鑑み、航空事業の整備擴充を焦眉の急務として、之を重要國策の一とし、その達成に努めつゝあるのであります。しかしこれけ獨り政府當局のみの力を以てしては到底充分なる成果を收め得るものではありません。是非共國民全部が航空に對し深い關心と認識とを有つて、積極的にこれが促進に寄與して頂くことが必要なのであります。愛國切手は極めて僅少の出捐で誰にも容易に國家事業に協力していただける最善の方法であります。若し全國民が一月一枚の愛國切手を利用せられるならば、寄附金は年額千數百萬圓に達し、目下政府で計畫してゐる全國の主要都市に設置せんとする飛行場その他の施設は立ち所に實現するのであります。

### 定期航空線路延距離

(一九三六年北半球の夏期)



### 各國民間飛行場數

(昭和十一年十月現在)





# 圖路線空航る至に方東極

